

特 220
240

山本良吉編

昭和女子の教養備考

東京 弘道館發兌



0045467-000

特220-240

昭和女子の教養備考

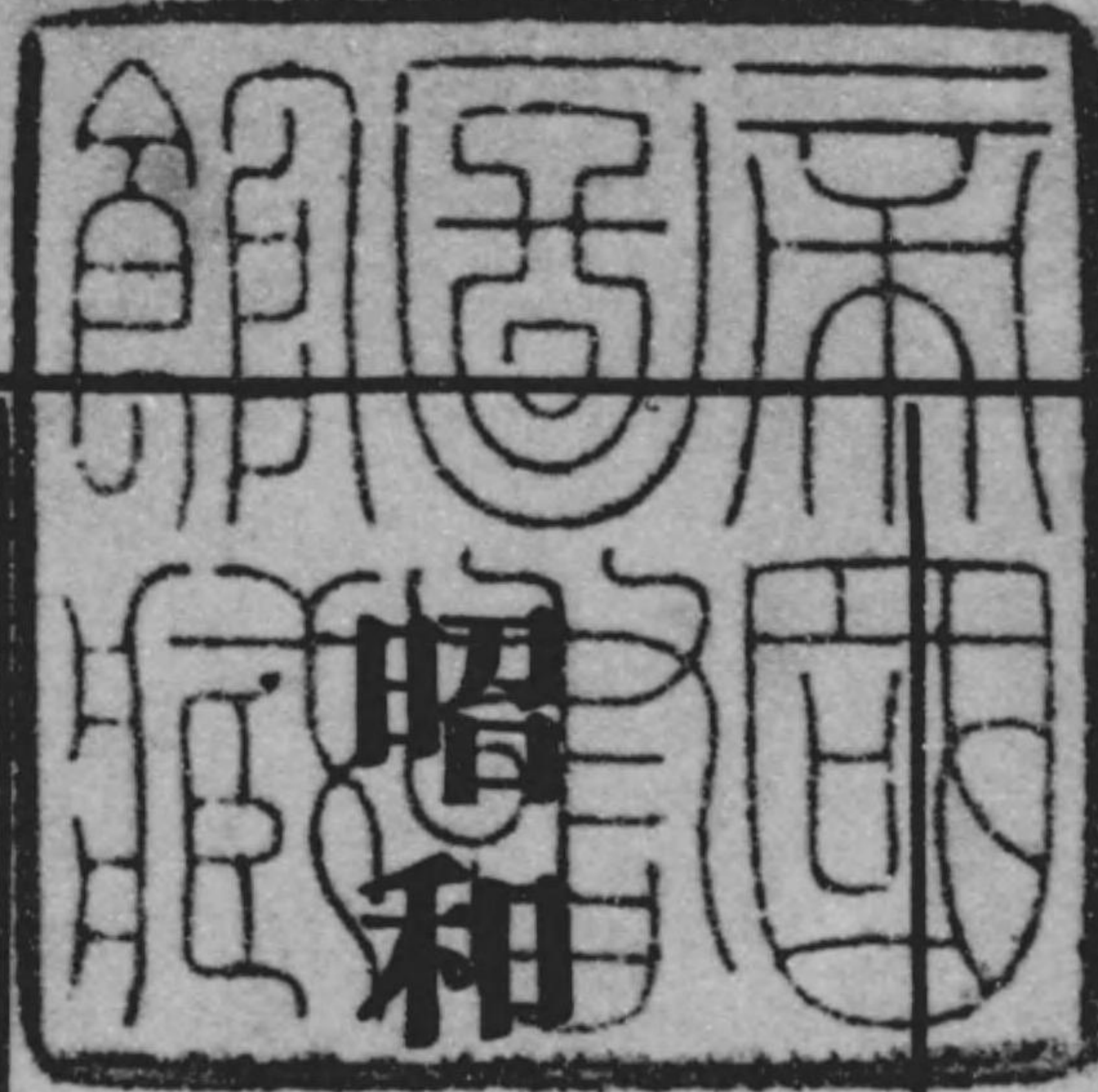
山本良吉・編

弘道館

昭和10

AHF

特220
240



山本良吉編

女子の教養備考

東京 弘道館發兌



編纂の趣旨

私が「女子の教養」の前版を出したのは大正十三年であつた。その後暫くの間故あつて訂正を加へなうだ。この十年の間にわが社會は二重の變化をした。一は民族的意識が以前に比して著しく濃厚になつた事、一はそれと反對に、わが若い女子が著しく放逸になつた事である。明治以降のわが社會状態を考へるに、明治三十年代は男學生が以前の生活様式を脱して著しく放逸になつた時であり、それと同じ變化を女學生が丁度現時に於て受けつゝある。男學生放逸の結果は社會が今尙受けて居り、それが引締りかけて來たのは主として學校以外の或る勢力によつたのである。男學生が引締りかけんとする現時に於て女學生が正に以前の男學生の跡を逐はんとしてゐる。女子の放逸は社會民族の上に男學生よりは遙かに深い患を残す。女學生の今の風は是非とも改めねばならぬ。今の女子教育は實に危機に際してゐる。民族の前途を思ふときは、このまゝに捨ておくことはできぬ。そのために久しく執らなかつた筆を再び執つて本書を草した。

わが女學生現時の風を改めるにはまづ

一 わが女子の歴史傳統を顧みねばならぬ。歴史や傳統に基礎をおかぬ運動は、すべて浮草の如く定まる處を得ぬ。眞の改良はいつでも歴史の反省から出發する。故に本書に於ては歴史的傳統的女子の長處や仕附を明かにするに力を用ひた。歴史や傳統を反省することによつて、深い意味に於ける

二 わが忠孝も愛國心も眞に理解することが出来る。本書は忠孝や愛國心を切れ切れな獨立の徳と解せず、その根本たる民族文化の愛着を詳説し、それから自然に上述諸徳が導き出される次第を明かにした。民族文化の中に培養された諸徳はおのづからわが民族の特徴を帯び、わが民族に於てのみ立派に行はれ、わが民族に非ずば行ひ難い者となつてゐる。從來かゝる

三 民族的諸徳は實際に於て教育界に無注意に過ぎられた形がある。本書はすべての徳をこの民族文化の立場から見、民族的の香を帯びしめた。かくする事によつての眞の日本人の引き締つた精神が養はれる。從來外國修身書の直寫でも與へる様に、民族文化といふ根柢なしに諸徳を列擧した教へ方が、實に現代女學生放逸の一原因をなしてゐることは、教育上見遁すべからざる大事件である。日本民族的徳のみ眞に日本人の

胸にこたへる。日本人の胸に眞にこたへる徳を會得することによつて始めて日本人たる事を得る。日本教育は今は日本人を造るのに意を向くべき時代となつてゐる。しかし

本書は徳目の説明を試みるよりも、これ等日本的

四 諸徳がいかにわが民族生活に必要であるかを會得せしめるのを主とし、又いかにすれば

五 生徒にそれが實行できるかの仕方を説き示した。實に徳の必要な所以を抽象的に説かんとすれば功利主義に墮し、條件や理由を挙げれば擧げる程生徒の心情から遠ざかる。修身はかゝる理屈を教へるものではなく、

六 その徳を行ひたい氣持を興すのを目的とする。過去の修身は徳目の扱ひ方に於ても、教授上の力の用ひ方に於ても、實は現在の社會狀態の要求に應ずるには不十分であつた。この要求に應ずるために、この度殆んど全部を作り直して、新たにこの書を編纂した。修身科は教師からいへば、その信念の發表でなくてはならぬ。修身書が編者の信念の發表たるべき事は言を俟たぬ。

本書上欄に細注を加へたが、それは本文を記憶するための梗概ではなく、本文中に就

て特に生徒の頭に永く印したい事柄である。修身科に於て内容の大體を語記せしめ、それ採點する如きは、全く教授の趣旨に徹せぬ。挿圖は、それがなくては本文の意味がわからぬか、又は本文の情趣を得難い場合に限つて入れた。
別に印刷すべき備考は私が全部自ら執筆し、本文の教授法を始め、本書各課の趣旨を深くし、明かにするを目的とした。

昭和九年九月

山本良吉

目次

課	卷一	卷二	卷三	卷四
第一課	高い人柄……………三	生のありがたさ……………三〇	一生の階段……………三六	われ等の任務……………八一
第二課	社會の半分……………五	親……………三三	屈惑……………三九	道のため……………八二
第三課	考へる力……………六	細やかな氣持……………三五	忠實……………四一	職業……………八三
第四課	結ぶ……………七	作法……………三七	つゞまやか……………四三	女子の職業……………八四
第五課	跡始末……………八	尊敬……………三九	親切……………四五	天物を暴殄する勿れ……………八五
第六課	問はぬは恥……………九	同胞……………四一	喜ばすより善くする……………四七	儉約……………八六
第七課	喜んで知らさう……………一〇	長幼……………四三	應否……………四九	行の儉約……………八七
第八課	人に惜まぬ……………一一	祖先……………四五	はつきり……………五一	責任……………八八
第九課	他山の石……………一二	親類……………四七	贈物……………五三	若い女子の慎み……………八九
第十課	よい氣持……………一三	衆人……………四九	身なり……………五五	愛の危険性……………九〇
第十一課	影日向の行……………一四	博愛……………五一	正直……………五七	選擇……………九一
第十二課	女子の美點……………一五	常に他人に氣をつける四〇	慎重に考へよう……………六三	満足……………九二
第十三課	互に氣持よく……………一六	和を貴しとす……………四二	日本人……………六五	全體のため……………九三
第十四課	歳暮……………一七	外國人……………四四	諸道と競技……………六七	尊い一生……………九四
第十五課	正月……………一八	他國學生……………四六	歴史……………六九	責は自分にあり……………九五
第十六課	習慣のつき易い年齢……………一九	他國に對する同情……………四八	愛國……………七一	判斷……………九六
第十七課	清潔……………二〇	わが君臣……………五〇	國の威光……………七三	改良……………九七
第十八課	體力を養ひませう……………二一	皇位……………五二	固有文化の發達……………七五	節句……………九八
第十九課	運動……………二二	大嘗祭……………五四	謙遜な心……………七七	模範とならう……………九九
第二十課	困苦に耐へたい……………二三	儀式……………五六	人格……………七九	平生の用心……………一〇〇

卷一

編輯趣旨

女子が始めて女學校に入ると、境遇の變からして種々新たに心得べき事が出てくる。本卷は勿論それを説き示すのを主とした。

現代の女學生及び女子一般に共通の誤は、男女同等の意味を誤解して、女子も男子と同じ仕事をなすべきものと思ふ事である。男女同等とはその道徳的價值をいつたので、その仕事についていふのではない。本書は上下級を通じてこの誤を正すのに力を用ひた。實にこの間違つた氣分は現代社會の一の痛とも見るべく、これを正して、男女共に本來の任務に向はしめるに非ずば、わが社會が歐米と異つた圓滿な發達の過去の歴史を毀損することとなる。實にこの間違には歐米諸國でも困りきつてゐるがもはやかの國々では何とも仕様がなないのであるが、わが國まで遅ればせにそのまねをするには及ばぬ。右の間違つた思想の結果、わが婦人の態度、作法、品格が近來著しく下つて來た。本卷はその矯正に力を用ひた。態度、作法、品格は男子にも必要であるが、男子の多くの學校は殆んどその訓練をな

し得なくなつた感がある。せめては女子教育だけでも、その本来の任務を考へて、わが社會の品格の維持者たるべき女子の本質を發揮する様にした。

女子はたゞ教科書を空讀記のみする傾向が男子よりは強い。もつと學問をば自分の生活と直接關係のあるものであり、たゞ學べばよいものではないと考へる氣分を強めねばならぬ。これには從來の一般の教科書も、たゞ一般的抽象的な事を教へ、それを讀記のみさせてゐた事に責任がある。しかし過去の責任を問ふとも詮ない。わが女子教育は一日も早く正しき教育法につかねばならぬ。

女子の嫉妬心はその本能であるといはれてゐるが、それは決して女子の名譽ではない。學校に於てはなるたけ友人相助け、互に隠し合ふ如き暗い氣分を少なくせねばならぬ。本巻は處々でそれに注意をひいた。

本書は上下級を通じてわが國の傳來に注意を向け、日本人たる氣分を與へるのに力を注いでゐる。本巻の挿畫及び内容に於ても、この意味を取せられたい。わが國と外國と同一價値のものがある場合には、わが國の取るのは國民當然の氣分である。わが國は明治以來の社會事情のためにこの氣分が著しく薄らいでゐる。わが自國の事物に對して第三國人の様な態度を取る如き傾向は、國民としては變態と見ねばならぬ。どこの國人かわからぬ様な氣分をわが國人に與へる事實が、よし社會の各方面にあつても、少なくとも學校だけは日本人の氣分を與へねばならぬ、日本人を造らねばならぬ。本書の中

心主義は實にこゝにある。この趣旨であるから、例を引くにも挿圖にもなるべくわが國のものを主としたが、本巻に於て英國の實例に一課を割いたのは、これによつてわが女子に反省を促すためである。

右は本書全體の精神であるが、第一巻に於ては生徒の年齢に應じて、特に新入學生徒に對し、中學生として必要な事を説いた。その多くは生徒が直ちに實行すべき、そして實行し得る事である。その實行によつて始めて女生徒が女生徒らしい態度を保ち得ると信ずる。

修身で教へる事はたゞ生徒のみが守るべきではなく、學校全體が守らねばならぬ。學校の規定も慣習も氣風もすべてそれを實行さすやうにならねば、教育の効果はない。

上欄の單語には本文の説明もあり、生徒の注意を促すための發問もあるが、多くは生徒に一生念頭に残さすための注意である。それを節の大要即ちサイドノートと考へてはならぬ。編者は教科書にはサイドノートをつけるべきものでなく、節の大要は必ず生徒が自ら考へ出すべきものと考へる。これを考へ出す作用によつて、眞に考へる力がつくのである。節の大要を書いておくのは、生徒の試験勉強に便する傾があり、試験勉強は眞の勉強と東西三千里である。

第一課 高い人柄

第一課 高い人柄

この課 は生徒の新入第一時に授けるもの故、餘り詳し

く解説するに及ばぬ。たゞこの學校に入つた上は、物事を考へる力をつけ、又自分の人物を立派にするやうに氣をつけよとさへわかれば、それでよからう。人物といつても一寸わからぬかも知れぬと思つて、人柄の語を用ひた。一體に今の小學校卒業生は、語や字は可なりむづかしい事を知つてゐるやうであるが、その内容は全くわかつてゐないことが多い。語を覚えるのは決して教育でないことを常に生徒にはつきりさせてほしい。小學校卒業生は又一語を他語で言ひかへることを知つてゐる。しかし内容は全くわかつてゐない。これ等はわるい教育の結果であるから、中等學校に於ては十分にその癖をなくしたい。

一年の教授法 私は一年では、生徒によませ、そして大體のわけをいつてきかせます。詳しい字義などを一々穿鑿するのはよくないと思ひます。生徒に讀ますには、一人に二三行を與へ、なるべく一時間に多數の生徒にあたる様にします。一節を終る毎にその大體の意味をいひきかせます。その意味を生徒に一二度言はせるか否かは生徒學力の程度によります。本來は言はせるべきでありませう。そして次の時間の始には必ず大體の意味を言はせます。そのために入學の初に於て復習の必要な事を父母にも生徒にも聞かせておきます。この生徒に言はせる

のは一回につき三四人にさせれば十分でありませう。修身はたゞ本を覚えるのが目的ではなく、それを實行するのが目的でありますから、生徒の直ちに**實行し得る事**を教へた時には、次の時間に實行の如何を問ひ、實行してゐない者には更に實行する氣にならせた。實行してゐるかわらないかは、生徒の答へる態度によつてわかります。實行してゐないからとて、それを叱つても効果はありませぬ。實行せねばならぬ氣持にならせるのが修身教授の最要點であります。これが今の一般修身教授に於て缺乏して居るのではないかと心配されます。小學校に於ての修身科に對する態度は生徒の一生涯に影響する最も大切なものであることを、小學校で知つてほしいものです。

物事のわけ といふと、すぐ理科や地理などの事と思ふ癖があるが、世の中で自分がどうしなければならぬかとわかるのが、物事のわけの本體である。今の子供が、自分に對し人に對しどうすべきかの考の足りない事は實に恐ろしい程である。學校へ行つて、たゞ二三の本を讀み、その日課ができれば、それでその務がすむと思はせるのは、教育の第一本旨に反きます。修身科に於ては特にこの點に注意せねばならぬ。**世の中をよくする** といふと、すぐ自分の事は捨て、

において、人の事を心配する事の様と思ふ傾向がある。世の中をよくする第一義はまづ自分をよくし、自分のよい事が波及して、自然に世の中がよくなるのを目的とするにあることは、深く子供の時から鍛へこまねばならぬ。**役所會社** に勤めたいとの希望が可なり強く今の女子の間にあるが、勤めるのも悪くはないが、それを女子の第一の目的と考へさしてはならぬ。女子の任務が家庭にあることは、その天與の義務で、そして特權である。人類の永い發展を考へると、過去に於けるわが國の女子の取つた方向が女子としては最も理想的であつた。明治以來西洋模倣が各方面に普及し、その結果として、わが國がかれに優つてゐたこの良風をも西洋化させかけ、教育者までがこれを奨励せんとするが如きは沙汰の限りといはねばならぬ。

高等女學校に入つたがため に非常にえらくなつたと思ふ傾は、今の女子には可なり多く、兩親さへもそれを認めて、女學生風といふ一種の態度を許す如きは、憂ふべき傾向である。己のすべき事を行はず、自己の修養を怠り、徒らに横柄傲慢な風をなす如きは、男でも女でも共に間違つてゐます。男子生徒がかくの如くなつたのは中學校の過去及び現在の誤であり、早く直すべきものであります。せめては女學校だけでもこの風を防止したい。

東京目白の成蹊女學校だの、田園調布の川村理助氏主幹の女學校などは、この點に於て非常に優良であると聞いてゐます。私が先年或る地方に海水浴に往つた。その荒物屋に入つて買物をしたれば、その店の女子が實に横柄な風をして應對をしたので、なぜにあんな風をしてゐるのかわからなんだ。後に人に聞くと、その女子が全村内唯一の高等女學校の卒業生であるので、それを鼻にかけてゐるのであるらしい。かゝる不心得な女子を造るやうでは、その高等女學校は全然失敗と見ねばならぬ。人は教育を受けるによつて、益々自分の不十分さに氣づくべきである。横柄傲慢は常に教育のない者の特徴である。

第二課 社會の半分

人口數 の如きものは、上の二位くらゐ覺えたらばそれでよい。何でも細かく語記するのを能と思はせてはならぬ。語記の必要 unnecessary の程度を考へる位な常識はある様に教育せねばならぬ。

十四年以上 の數をあげたのは、青年期以上の男女を大體知るためである。

男女の比 日本ではかく男子の方が女子より多いが、しかしこれが世界各國皆同様と思つてはならぬ。國によつては女子の方が多いことがある。左にその實例を示せば

	男	女	合計
英 本 國	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	六、六六六、六六六
北米合衆國	六、六六六、六六六	六、六六六、六六六	一三、三三三、三三三

しかし大抵女子の方が男子よりは多い。わが國がその反對であるのは女子に取つては仕合せである。表中他の大國の數を擧げなんだのは、一寸その正確な表が手に入りにくいからである。

能力が違ふ といふのは、その量をいつたのではなくその質をいつたのである。男女の能力のちがひが違ふとの意である。世人は往々量に差別がないといふと、直ちに質が同じであると思ひ誤る。

挿圖 山吹の花を二つ寫し、大體は似てゐるが、決して同じくないことを示す。生徒にどう違ふか指摘さすもよからう。

第三課 考へる力

考へる力 とこゝに強調したのは、語記や記憶を排すためである。女子にはこの注意が特に必要である。考へる力に於ては多くの女子は男子より弱いと思はれる理由がある。故に女子には男子生徒より少ない分量を授けて、それを男子と同じく考へしめる様に訓育したい。

織狀線 電球の中の細い線。普通のにはタンダステンといふ鍍物の線を用ひてある。織狀線などいふむつかしい名は普通に用ひぬので、原版にはタンダステンとかいたが、檢定員の意見に従つて、この名を用ひることにした。昔は竹の纖維を用ひたものである。そのために日本から可なり竹が輸出されたが、今は用ひられぬ。タンダステンが切れて居るか否かを調べるには、電燈をふつて見れば、切れてゐるのは振動するから、すぐわかる。

ヒューズ 電燈の上部の木の邊に入つてゐる稍太い金屬線である。外からの電氣がこのヒューズを通つて電球内のタンダステンに通ずる。電燈に通すべき電力より以上の電力が通ると危険であるから、その時にはすぐこのヒューズが飛んで、電流が切れる様になつてゐる。飛べば電流が通じなくなるから、燈が消えて、危険はなくなる。ヒューズの太いのは家の電流の本である配電盤にも入れてある。しかし配電盤は通常電燈が少し多い家でないければ用ひぬ。

外線 とは柱から家に電流を送る線。町に通つてゐる。**島** 高い島や大きい島は餘程古い地層構成の時にできたのである、低い小さい島は多くは川から流された砂がたまつてできたのである。川口にできて水が兩方に流れるから、島の形は三角形をなす。それをデルタといふのはギリシヤ語の頭の字がデルタといふからである。

市 が繁昌するのは、多の市は川の岸又は川口にできる。川で交通運搬の便があるからである。わが國の大市と川との關係を一二生徒に言はせて見たい。

その日の温度 學校には生徒の多く通る處に大きい寒暖計をおき、生徒に見させ、修身や地理や會合の時間にきいてほしむ。

風呂の温度 が何程かきいてほしい。私がベルリンのホテルで女中に何度に御入りかと問はれ、體温が三十七度だから、それでよいと思ひ、三十七度にせよといつて入つたれば、冷くて困つた。寒い時は普通は四十三四度以上がよい。四十八九度になると、もう入ることは難い。

第四課 結 び

第三課 考へる力 第四課 結び

復習 は小學校にも中等學校にも極めて行はれない傾になつた。そのために先へ先へと進んでは行くが、教はつた事を眞に頭に入れることはできてゐない。その結果輕薄な上すべりの人物を造る。これは教育界として深く注意すべき事であり、本書はそれについて教育者の考慮を求め積で、この章を加へた。復習をさせた以上はその復習の結果を

次の時間に 必ず聞き正さねばならぬ。大學などでは教授は講義のし放して、前時間の事を聞き正しなどしい傾向もあるから、そこを出た教師も又その教師に教はつた先生も皆そのまねをして、次の時間に、前の時間の教へた事の復習の結果を聞き正さないまゝで、その日の授業に入る習慣が中小學校にも可なり廣くなつた。中等學校以下では、前の時間(一回分)ではなく、少なくとも二三回分に教はつた事を、生徒が何程眞につかんでゐるかを調べないで先へ進めるべきでは斷じてない。生徒に**聞き正す場合** 前の時間の事と、その又前の時間の事との連絡などを尋ねる事も必要である。

底のない桶 挿圖二個の説明。昔し或る若者が金持老人の所へ行つて致富の要訣をきいた。老人は、もしまこと金持になりたくば、明日早朝に來いといふ。行くと、今日一日水をあげよといふ。しかしその桶には底がない。

つまらぬ事をいひつけるとは思ひながら、終日水をあげた。豫期の通り水は少しもたまらぬ。老人は又明日も早朝から来いといふ。その日は桶には底があるが、釣瓶に底がない。又かひなき事をするのかと思ひながら、終日くむと、不思議や釣瓶から落ちるしづくが溜つて、桶には水が一ぱいになつた。さて老人が教へるには、金は何程まうけても、心に儉約といふ底がないとたまらない。儉約の底さへあれば、たとひ入る金は少なくとも金持になれるといつた。さてわれ等の勉強には、何といふ桶の底が必要であらうか。この圖の説明は、教師は言はず生徒に言はせる方がよからう。

答案 はすべて必ず正しい答へ方に直して返すべきである。それも生徒が出した時から餘り長くならぬ中に返さねばならぬ。直された答に注意して見る生徒は必ずえらくなる。

答案 には點をつけて返してはならぬ。さうすると、生徒はたゞ點ばかりに注意する。生徒が點などには注意せず、答の正否のみを考へるやうに注意したい。

第五課 跡始末

跡始末 も今の生徒には著しく欠乏してゐる。これは復習しないで先へ先へと進む授業と同一調子の教育の結果である。女子は殊に成長の後に家事を擔當すべきであるから、幼い時から整頓の習慣がないと、非常な困難にひまます。大學などで研究生が夜晩くまで研究するものが非常に多い。尤も整頓の必要は男も同様であり、役所や會社の事務を整頓する習慣のない人は、どこへ行つてもその務ができません。終には失業者となる。女生徒の如きは學業ばかりを主にせず、宅へ歸つたらまづ衣服を整理し、勉強をしたらその器具類を整理する様に、學校から指導命令せねばならぬ。そのためには餘り多い宅課などを與へぬ方がよからう。女生徒(男生徒も同じだが)が朝起きて自分の夜具をも整頓せず、飯をたべたら椀も箸も亂雑に捨ておく如きは、決して善良な教育法でない。父兄會などに於て學校は、かゝる事につき家庭の教育法を指導すべきである。父兄會といへばたゞ子女の成績點のみ聞く處とする如きは甚だしい誤である。私は學校長には、父母を通して、生徒を改良する責任のあるものと考へてゐる。

洗面所 で自分の使ふべき分の手ふきで洗面器をふかないと、次の人は新しい手ふきで全部をふき、それを捨て、更に新しい手ふきで顔や手をふかねばならぬ。

一人に二枚の手ふきが必要となる。それを五十人するとしたら、鐵道會社(鐵道省)に對して可なりの負擔となる。それを毎日と考へると、一年の會社(省)の費用は大したものとなる。



第五課 跡始末 第六課 問はぬは恥

ガスの栓 を止めることを忘れたために火事が起り、急いで歸るために、栓をしめることを忘れる。そうすると永く點火したために栓が熱し、その熱でゴム管が溶ける。そこからガスが洩れ、そこへ火がついて室を焼き、全建築又は建築の一部分を焼くことは可なり度々あつた。そのために篤學な學士が數年かゝつて研究した論文の原稿がやけて國家學問の進歩に損失を與へた例もある。

茶の湯 茶道ともいふ。それを修めると、日本の女子が世界の女子のもたぬ修

養をもつことになる。日本の女子が西洋の音楽をまねたり、西洋のダンスをまねるとも、それはたゞ西洋人の上手な事を下手にまねができるといふことで、少しも日本女子の値打を高めない。日本人は西洋人などのできぬ事ができねばならぬ。この頃女子に生花や投入れを習ふものは相當にあるがそれより更に尊い修養の道たる茶の湯を修める者の少ないのは、心がけが間違つてゐるためである。女子の教育者もかゝる點に注意が足らなくはないか。

茶入れ 茶の湯では、ひき茶を使ふ。その茶を入れる小るさな器具形は色々あるが、なつめといふ形が普通である。

茶杓 その茶入れから茶を取り出して茶碗に移す道具。

水差 茶を立てるには水差から水を釜に入れ、その釜でわいた湯を茶杓でくむ。水差とは水を入れておく道具形は色々ある。

第六課 問はぬは恥

大學者 であればあるだけ、わからぬ事がふえる。世の中の事がわかると思つてゐるのは學問をせぬ人の常で

ある。學問をせぬ人は物の原因を考へぬから、一寸した説明でわかつた積りでゐるが、その原因の又原因と深く溯つて行くと、世の中は實は説明のできぬ事件のみであるといつてもよい。何でもわかるといふ人は、よい加減の處でわかつたときめこんでゐる人である。そんな人は決して眞に學問をした人でない。

問ふは一時の恥 別に恥ではないが、恥かしい氣持のする人もあるといふ事。かゝる諺について一々出處を調べる如きは反つて間違を教へる事となる。出處の正確にわかつた事は教へてもよいが、諺などの眞の出處は實はわかるものでない。今ある本の中で何に一番古く出てゐるかといふにすぎず、それが眞のものであるとの斷言はできない。その頃古くから傳はつてゐた諺が偶然その本に載つたにすぎない。よし出處のたしかにわかつた語でも、中等學校で教へるのは、反つて生徒に注意の主點を失はしめる恐がある。

實物 たとへば草一つもつて來よ。その色は何色か、なせ葉に某々のぎざ／＼が入つてゐるか。その葉の向がどうしてできたのか。こんな事に一々答へられるものとは限らぬ。色は普通緑といふが、葉の色の調子は決して一定しぬない。それを何色といふかだけの間でも、正確には答へられるものでない。二つの草の葉の色はどうして

違ふのか、これ等でも特殊の研究をしなければわかることでない。

人に笑はれや せぬかとは女子の最も憂へる所である都會の男子は女性化してゐるので、田舎の男子よりも恥しがりが多い。わからぬ事を尋ねて人が笑つたつて心配するには及ばぬ氣持を、女子にも與へたい。

孔子 大廟とは通例國王の廟であるが、こゝでは魯の周公の廟處である。孔子は禮に詳しく通じた人であるが、尙一々人に尋ねた。人が笑つて、あれで孔子が禮を知つてゐるのかといつたら、孔子は、「これが禮である」といつた。知らぬ大切な處へ入つたら、一々人に尋ねるのが禮の一である。

登蓮法師 西行法師と同時の人で歌よみ。

ますのすゝき まそほのすゝきとは、そはすの普通であつて、何も別に意味のない事であるが、平安朝の末期からは、何でも秘傳と稱して勿體つけてゐたのである。しかし一説にはます月の薄は十寸穂の薄で、穂の一尺ばかりあるもの、ますほの薄は眞麻穂の薄で、穂の糸が亂れた様なのをいふともいふ。

或る禪僧 京都妙心寺の開祖關山國師はわが國ならびない高僧である。まだ若い頃鎌倉の寺にゐたが、京都大徳寺の開祖の大燈國師が非常にえらい人であると聞き、

それこそ師たるべき高僧であると思ひ、そのまゝ荷を包んで京都にいつた。その途中で富士山にも氣がつかなんだ。昔は徒歩であるから、少なくとも二日位は富士の下を歩いたのである。花園天皇が寺を御造りにならうとして、大燈國師によい弟子を望まれたれば、關山の外にはないといつて御薦め申し上げたので、妙心寺の開祖となつたのである。今から六百年前に入逝した。

シカーゴの中等學校 この學校では全級三十人ばかりの中、男子はたゞ一人であつた。中學校の下級には男子も可なり多いが、上へ行くに従つて男子の數が減る。これは米國人は仕事を大切とし、男子は中學校の上級なごへまで行かず、仕事があればすぐその方へ向く。そしてそれから苦勞して立身する。大統領の多數は學校出ではなかつた。わが國で誰も上級學校まで行かねばならぬと思ふのは、一は學校の教育法が間に合ふ人を造るのに重きをおかぬからである。

英國の某大學長 これはオクスフォード大學の Balliol 大學長 スミス氏の宅であつた。英國で第一等の教育者、當時の大臣もその弟子であり、女王が同大學へ行かれた時も、同氏の宅で午食を取られた。私に發問したのはその令嬢であつた。

御茶に招く 英國では四時になると、家族一同でお茶

を飲みます。その時に少しの菓子類をもたべます。他の人をも招いて一しよに話をします。この時には一家皆出るので、若い子供等も客と同じく飲食するから、行儀も練習せられ、又知らぬ客に座對する禮儀をも覺える。實に英人はお茶で作法を學ぶともいへる。子供は宴會には行かぬ。成長してから宴會での禮法も、一部はこの御茶で覺える。英人は晩食にはよく／＼の客でなければ招かず、大抵この茶ですます。さて日本では子供に作法を教へるこのお茶の如き機會はあるか。學校の作法は實地の教育とはならぬ。

第七課 喜んで知らさう

自分が教へる と益々はつきりわかるのは、第一、人に教へるために繰り返していふ。繰り返せば返す程はつきりして來る。第二、自分がわかると思つてゐたことで、人に教へる中に、まだわからなんだ事があつたのに氣づき、益々わからさうとする。

自分のわからぬ事 をわからぬといひかねて、ごまかしをいふ事は、自分の人格の値打を下げる。

英米二例 は皆私自身があつた事實である。

町の角 外國では町の角にその町名をかけた標札のある處が多い。わが國にはそれが殆どない。人を困らさぬためには、外國の様にしたい。

米國の女學校 ニューヨーク市にある一中等學校であるが、生徒は女子ばかり。米國學校が皆男女共學であると思ふのは誤り。男女共學の弊は可なり多く歐米學者間に説かれてゐる。

生徒に案内させ 米國では學課が一頁ぬけても、人に深切をする事を一つ覺えた方がよいと考へられてある。

私が物を知つてゐる とさもえらさうな顔をするのは、心の賤しい人に必ずあることである。殊に役人、その中でも小役人に最も多い。教師などは自分の態度で、これと反對の氣分を生徒に教へたい。

親切な校風 これは東京の或る七年制高等學校の實例人に知らさぬ 私が東京女子高等師範學校へ行つた時校長室がわからなだったので、一人の洋服をきた女教師らしい人にきいた。さうするとその婦人が口をもきかず、手でその方を指したきりであつた。これが同校の教授であつたかどうか知らぬが、もしかゝる者が教授をして居るとすれば、その學校の生徒の氣分が思ひやられる。後に同校から多くの共產主義者を出したのを見て、人情を

とき、誠にこわい顔つきをします。これは婦人自身には氣がつかぬらしいが、本能的に同性を敵と思ふ女子の遺傳がこゝにも現れる。口で友人だ同窓だといつても、心で競争者と思つてゐては決して立派な態度はできぬ。

第九課 他山の石

ロンドン市 とかいたが、實はロンドン市といふのは極小の一部分のみで、普通ロンドンといふのは London County Council といふべきで、多くの區の集りであり、大ロンドンともいふ。それに對して古からのロンドン市を Greater London ともいふ。

地下鐵道 ロンドンには地上電車は市の端の一小部分にしかない。交通は地下鐵道とバスとが主である。

エレベタから 出て電車の處へ行くといふのは、地下鐵道で乗換をする場合である。エレベーターといふのは正しい發音でない。

物を買ふ のに、自分はどういふ物を買ふかはつきり考へて後買ふべきである。考なしに買はうとすると、時が長くかゝつて次の客の妨になる。

儲物性 のクリーム類は皮膚によくない。

知らぬ教師の下にはさもあるべしと思つた。女學校の生徒には決してかゝる野暮な風は見せたくない。

第八課 人に惜まぬ

自分より物を知らぬもの が世の中に一人もない様にしてあげたいといふ氣持は、尊い氣持であるが、女子にはこれはむづかしい。それは太古から、女が男を求めるとき自分の好きな男を他の女に取られると損だとの氣持が、遺傳的に女子の本能となつたのである。しかし學校で優等生一實は點數の多い生徒を種々の方法で優待するから、益々それが強くなるのである。教育上考へるべき事である。學校は點數を上手にとる生徒よりも、人物の立派な人を造るのに意を用ひたい。

善をなす といふと、兎角善といふ事が別にあり、日常の事皆善とも惡ともなるといふことを知らね傾があるこの點に注意が必要である。教室で生徒に昨日した善事をついへよといつても、一寸答のできぬ者が多い。善を日用生活以前の或る定つた形と思ひこむためである。行儀よく食事するのも善ではないか。

他人を敵と思ふ 婦人が途中や車中で他の婦人を見る

他人の耳 人と話をするにはその人にきこえればよい。第三者の耳に入れるのは失禮である。日本の人には大人でも子供でもこの練習が全くできてゐないので、人が十人も集まると實にやかましい。米國の中等學校では下級で聲の練習をすることとなつてゐる處もある。大聲が無禮な事は女學校でもよく教へてほしい。

銀行休日 といふのは、宗教の大祭の日である。年に三回あるかと思ふ。銀行が休めば一切の商取引が休みとなり、つまり全市の休日となる。尤もその日にその節の物など賣る店は開いてゐる。

第十課 よい氣持

恥かしい事 とは、友人などに笑はれても恥かしい事ではないわけを子供の時からよく覺えこましたい。女子は外見や體裁のみを恥かしく思ふが、眞に恥かしいのは

心に。

すまぬ事 即ち本心から考へてすまぬ事をする事、すべき事をしない事である。よく子供心にしみこませたい**身體の諸機關** とは神経や胃や腸の事をいふ。心が快活である、その作用で神経が盛んに働き、胃腸までもよくその働をなし、消化もよくなる。胃を氣持わるく思はずと、腸にすぐ静脈が充ち、氣持よく思はずと赤い動脈血が充ちることは醫學上の實驗でわかつてゐる。

柔和な顔 心が柔和になると、顔も柔和になることは、誰も知つてゐるが、人の心が筋肉によつても支配されることは、心理學上の事實である。脊を眞直にすれば心も正しくなると同じく、顔の筋肉を柔和にすれば、怒つてゐることはできぬ。

第十一課 影日向の行

手をめく 教室の掃除をするとき、人が知らぬと思つて隅の方を略する事はあり易い。かゝる事を要領を得るといふ事はやるが、かゝる悪習慣が斷じてつかぬやうに教育したい。かゝる風は陸軍にもあるとかきいてゐる。**わがため** すべての人は良い事をするのが目的である。

大學生 京都府立第二中學校出身の醫學士板澤政治氏、今は第一生命相互保險會社醫務次長。

第十二課 女子の美點

やり放し 勉強するとその器具をしまはず捨て、おく、戸を開けてしめない類。すべて跡始末の課に説いた事であるから、こゝで第五課「跡始末」の事を聞き直す方がよからう。

高聲 第九課「英京の夢」の中の事を問はれたい。**低聲** むだな事に高聲になる者は、必要な時に低聲にし過ぎる事が往々ある。低聲を上品と思はしてはならぬ。**人に物を問はれたとき** 第七課「喜んで知らさう」、第八課「英京の夢」参照。その課で教へた事を生徒に聞きたい。

強ひて速慮 私が東京神田神保町の停留場で電車に乗らうとして、私の前に婦人が居たので、その乗るのを待つてゐた。その人は後に私の居るのを知つて知らずでか、いつまで待つても乗らない。そのために、他の方から後の人がすん／＼乗つてしまふ。この婦人は遠慮深いために私及び次々の人を遅らした。

自分の目的を達するのは即ちわがためになるのである。ためといふ事を利益、特に物質的利益のみと思ふ考へ方は、幼い時から絶対に排斥せねばならぬ。

人が知ると知らぬと 女子は人に見せたい、知つてほしい氣持が、男子よりも強い。尤も近來男子の教育法が誤つたため、男子もこれ等の點に於て大分女子らしくなつたが、かく人に知つてほしいといふ賤しい心は是非とも排除せねばならぬ。

女子の地位が低く 女子が結婚して他家に行くと、舅姑がある。それが可より無理をいふこともあつた。明かに無理だとか有害だとわかつた事さへ従はねばならぬ事もあつた。

是を是とし非を非とす といふのは、冷たい理屈をいひはることと思つてはならぬ。是非の本源は人情にある。學校出の者はどうもこの人情といふ事がわからないことが多い。教室で物事を相談する時でも、冷たい理屈ばかりいはせてはならぬ。學校を理屈のみ教へる處でなくなれば、それだけでも成功である。

後漢 支那の古い時代。どれだけ古いかは次の條から考へられる。

楊震 非常に正しい人で高官に進んだ人。わが國では景行天皇の時、紀元七八四年に當る年に八十歳で死んだ。

活動を鈍くする 停車場のプラットなどで、餘りに上品がつて遅く歩くと、次の人に迷惑をかける。殊に階段の處ではこれが最もひどい。

物靜か 女子の聲は高くて細い。それを張りあげさせねば男子よりは靜かである。これは女子が自然に靜かであり得ることを示す。

社會の品位 男子が活動するときにはその仕事に没頭するから、仕事をする場合には少し仕方が荒くなつたり普通でいへば、無作法とか無遠慮になることも止むを得ぬ。女子はかゝる仕事を男子と競争すべきでないから、どこまでもその本性を保ち得る。女子が上品にし作法を行ふと、それが男子に影響して、男子の品位も上り得る。

世界的に女子は品性禮儀の維持者と考へられてゐる。近來の日本女子は西洋模倣が強く、西洋の映畫に耽り、西洋音楽を教へられ、西洋ダンスを教へられ、又ソビエツト式文學を読むために、思想の標準を失ひ、女子といふ意識をなくしかけてゐる。女子教育家の最も注意すべき時である。日本の女子は依然として昔の品位を保ち、世界の女子を指導せねばならぬ。日本文化の種々の方面が今や西洋を指導せんとしてゐるのに、女子ばかりかれの跡について、そのまねに倣々たるのは、いかにも女子が大勢に後れ、大勢に闇いことを示す。女子教育者もこの

邊に注意ありたい。

第十三課 互に氣持よくなりませう

人が粗野な風 をするとき、自分が温顔で直す實例として、私は電車に乗つて車掌が横柄な風をするのを見ますと、切符を買つた時、丁寧に「どうもありがたう」といひます。さうすると、かれは私の次の客に對して必ず丁寧な物言をします。

第十四課 歳暮

煤掃の圖 これは江戸の末期の江戸歳事記から取つたのである。大きな商店(昔はたなといつた)の煤掃の想像畫である。

慣習 は社會に傳つて來た習俗で、習慣は個人の癖。尤も癖といへば悪いものゝ様にとられるが、習慣にはよい癖をも含む。

心の大掃除 一年中にした悪い事、悪い考、悪い習慣を取り去りたい氣持になる。更生などといふのも心の大

新年式 は社會を通じて少し遅く行ふ様にしたい。午前八時とか九時とかに行ふのは、社會家庭の慣習を學校が破壊することになる。實は今まで各學校の不注意な態度のため正月の元旦の家庭の良習は大分破壊された。社會及び學校は今悔悟して改むべき時である。

日誌 を毎日つけると、つける毎にその日の行を顧み、反省して改良の念を起させる。しかしそのために生徒の日誌を教師が見てはよくない。それは偽をかくことを教へるからである。もし教師の徳によつて、生徒をしてありのまゝの事實を必ず日記にかく習慣をつけることであれば、日誌をつけさせて、それを教師が見るのは有効であらう。

第十五課 正月

新年おめでたう は必ず家々でいふ様、學校で教へねばならぬ。

雑煮 をたべる時など、少しゆつくりした氣持であるのが正月らしい。然るに各學校の新年式を早朝に行ふために、正月の始から各家庭共に急がしい氣持になり、ロク／＼一家が揃つて落ちついた氣持を味ふことができぬ。

第十三課 互に氣持よくなりませう 第十四課 歳暮 第十五課 正月

掃除である。自分の心を掃除することは人生に最も必要であるが、従来修身では餘り説いてない。わが心の垢に注意し、それを取り去ることに、特に一時間を割いても教へてほしい、しかもさる場合、教師自身の經驗を話される方最も有効である。

祝儀 を贈るなら、向の人が真に喜ぶ様な物を選ぶべきである。何でも金高だけ考へて贈つたり、人から贈られたものを轉贈したりするのはよくない。中には、内にとどろいふ物があるか知らぬで贈る人もある。又何か知つてゐても、その眞の値打を知らないために贈つて反つて向を不愉快にする事もある。日本製でも外國製でも安價の葡萄酒の如きは殆ど飲むにたへぬものである。それを高價な贈品と考へる如きは、大きな間違である。夏の飲用品も多くは同種である。

贈答品 を自分で持参せぬ時は、必ず進呈する意味の手紙を出すべきである。手紙を受けたら、必ず返事を出さねばならぬ。物品のみ届いた場合は、開けないのが本當であらう。

歳暮の大三十日 即ち三十一日の午夜になると、多くの寺では百八の鐘をならします。一年の用がすんで、靜かに聞く空を貫く鐘に心をすますのはよい氣持である。學校でも聴くやうに奨励してほしい。その代り翌日の

學校は教師だけの都合のために社會の美風を破壊してはならぬ。

正月の圖 これは徳川の初期の京都の圖である。萬歳は今元且に來るとは限らぬ。萬歳は歴史的には極めて古くあるものであり、正月四日宮中の紫宸殿前で舞つた事もあつた。三河國邊がその出處であるので三河萬歳といふが、各地方の者が正月だけ萬歳となつたのである。千秋萬歳を祈る語があつたのでかく名づけた。

門松 今より約九百年前の延久保承の頃の本に既に出ているから、平安朝の末に既にあつたのである。勿論それは松であつて、今の如く竹をそへることは餘り古くはなからう。吉田兼好の徒然草「明行空の景色昨日に變りたりとは見えぬど、ひきかへつて彌らく心地でする大路のさま松たてわたして花やかに嬉しげあることを又なくあはれなり」は生徒に見せてよからう。

變らぬ操 松に常盤の色ありといつて、人の節操の變らぬたとへになつてゐる。操は男子に對する節操のみならず、自分の立てた決心覺悟に對する節操として最も貴い。世人の中には共產思想、共產文學の影響を受けて、節操を輕んずる傾向の人もあるが、節操は人の人たる所以であり、性格と同一物である。性格の定つてゐない人は人物とはいへない。定めた事は理由なしに變へぬのを性格

のある人といふ。

植物 と共に楽しむのは邦人の特徴である。節供の如きは一々植物を用ひ、植物を飾り、植物と人と一つになる。かゝる植物をも友とする風は他國にはない。

鏡餅 の起りは、平安朝時代から齒固めといつて、齒を祝し堅固ならしめんために餅を用ひる式が正月にあつた。それは源氏物語にも出てゐる。足家時代になると、將軍家に於ても具足に餅を供へた。これ等が鏡餅の本であらう。

讀初 この圖は徳川末期の本から取つた。士分の家では大學を讀んだ。孝經を讀んだ家もあつたかも知れぬ。私國では士分は元旦は登城及年始廻禮で、二日の早朝に讀み初、書き初、はき初(掃除)、針初、縫ひ初をした。徳川將軍家では讀み初は三日の晩に正式に行つた。

左義長 正月の飾物は一部分は六日の晩に取り去り、他の部分は十四日の晩に取り去り、それを十五日の朝たいた。自分の家でなく地方もあり、神社でなく地方もあるそれを左義長といふ。この語は支那にもあるが、語源ははつきりせぬ。

祖先のした通り を實行して居ると思ふと、自分の私意が入らぬだけ安心であり、又それで祖先と同一の事をしてゐる同一國民であるとの感じがはつきりする。社會

記させたい。女子だからとて詩の意味も知らぬやうではよくない。

第十七課 清潔

この課 は教師の考で第一學期の終に授けられたら有効でありませう。

冷水摩擦 まづ朝起き寢巻のまゝで洗面場に行き、口や眼や顔を洗つてから、手拭を柔かくしほつて上半身をふき、堅くしぼつて更に一度ふき、次に下半身を同様にする。

清潔と壽命 との関係について醫學士樫田忠次郎氏は次の如く述べて居る。多くの人は曇天に頭の重きを感じるのが普通である。これは何故であるか。人間の皮膚から絶えず小便と同じ様な成分を分泌して體外に排泄して居る。晴天の日には多くは空氣が乾燥して居るから、皮膚から水蒸氣を奪ふことも多い。水蒸氣を取ることが盛になると、皮膚の分泌が活潑になる。分泌が都合よくゆけば停滞も少なくなるから、頭も自然軽快になるのである。然るに曇天の日はこの反對で、空氣が濕潤して居るから、人體より水蒸氣を奪ふことが少なく、従つて分泌が少な

にこの氣分を深くするために。學校でも行事として歴史的慣習をなるべく實行したい。歴史に従はないでは奥深いといふ氣持は味へぬ。國民精神などやかましくいつても、たゞ勅語を形式的に朗讀するだけで、何等國民的慣習を筋肉によつて行はせないでは、國民的氣分は出ぬ。今の學校及び監督者はこの點に於て考が行届かぬ。

第十六課 習慣のつき易い年齢

習慣 筋肉を、或る刺戟に度々くり返へして従はせると自然に意識なしにその通りに働く様になる。それが習慣であり、筋肉の働き方を外部から取り込むことも考へられ、知識を外部から取り込むのと同じ傾向をもつてゐる。

英語 の發音の如きは今の年齢で正しく習慣をつけぬと、後になつて非常にむづかしい。邦人の英語發音の殆ど談にならぬ程下手なのは、皆今の年に於ける教授が不正確なためである。

少年易老 朱熹の詩。少年は早く老人となるが、學問は中々進まぬ。昨日庭の池の邊には青草が茂つたと思つたにはや椽がはの前の青桐には秋風がふく。かゝる詩は語

く、停滞が多くなり、頭が重くなるのである。曇天にも頭が重くならぬ様にするには、皮膚を清潔にして皮膚の分泌をよくすることが必要である。入浴は此目的を達するに頗る有効であるが、雨天の日に入浴すると殊の外好い心持であるのはこの理由による。一日に皮膚から出る水蒸氣の量は、一日に出る尿の量よりも多く、最近の研究によると、西洋人に在つては平均千六百五拾瓦(日本人ならば恐らく千五百瓦)、ザツト、麥酒瓶に二杯位はある。この麥酒瓶二本位の皮膚から出る水蒸氣の一部分は、皮膚の上に乾燥して鹽の様になつて附着し、其一部は直接皮膚に接して居る襯衣に附着する。皮膚やシャツの垢染みるのはこれがためである。其の垢を其のまゝに棄て置くと、皮膚の氣孔が塞つて、分泌が十分に出来なくなる。毎日麥酒瓶二本位排泄せなければならぬものを、麥酒瓶一本半しか排泄出来ないといふ事になると、其の半分は他の排泄機關の過超負擔となるか、さなくば體内に残らねばならぬ。これが遂に病を惹起す原因となるのである。生理的にいふと、身體の排泄機關は皮膚の外に尙二つある。腎臓と肺臓とである。腎臓は尿を排泄し、肺臓は空氣の呼吸と共に水蒸氣をも排泄する。試みに鏡に向つて息を吹懸けると鏡面の曇るのは、即ち肺から水蒸氣の出る證據である。この三者は其の職分に應じ、同じ

様に排泄作用を営んで居るのに、若し其の一つが故障を起して任務を充分に盡すことが出来ないと、他の二つがこれを分擔しなければならぬ。即ち皮膚の排泄作用が妨げられると、肺臓と腎臓とがそれだけ餘計に働かねばならぬ。自然無理が出来るので、臓器の餘り健全ならざる人はこれがために又臓器の故障を起して来る。同時にこれ等の臓器は完全に働く事が出来ないから、排泄される汚物は体内に残る。所謂体内に水氣を持つといふのはこれである。腎臓が十分働かないと水氣が起る。これと同じく汗が十分出ないと体内に水氣が多くなるのである。これを捨て置くに恐しい病氣になる。寒い時には小便が多く、暑い時には小便が少い。寒氣の強い時には皮膚の氣孔が縮小する。これがために皮膚の分泌作用が十分でない、水蒸氣の蒸發が少い。而して體の溫度を多く奪はれない様にする。その結果右に述べた生理的理由で腎臓が多く働くから小便が多く出るのである。暑い時はこれに反する。皮膚の氣孔が十分に開いて居る。故に汗や水蒸氣は自由に分泌する。蒸發する時、體の溫を奪ひ取つて空氣の溫度に適する様にする。汗の方へ多く出るから、腎臓の仕事がそれだけ少くなる。従つて小便が少い。尚皮膚を清潔にしないと、水蒸氣が排泄されないのみならず、脂肪が分泌を妨害せられる皮膚から脂肪が分泌されると

いふ事は誰も知つてゐる。處が皮膚の氣孔が塞がると脂肪も分泌しなくなる。すると脂肪が皮膚の内面の氣孔の口の處へ溜つて来る、それがために種々なる皮膚病を起す事がある。皮膚を清潔にするのは右の如く大切であるから、よくこの道理を領解して常に清潔を怠らぬ様にしなければならぬ。一體日本人は入浴好きの國民であつて、これには西洋人も感心して居る。しかし風呂に無闇にはいつも、皮膚に直接觸れる褌衣、夜具のシーツの如き、久しく洗濯せずに随分垢の付いたのでも、平氣で着て居るのは甚だ矛盾した遺方である。入浴も必要であるが、皮膚の清潔はシャツと待つて始めて完全になるのである。日本人は病氣にでもなつて臥床すると、決して皮膚の清潔といふ事を考へない。尤も病氣に由ては皮膚を拭くことの出来ないこともある。しかし多くの病人は或程度まで毎日皮膚を拭くことの出来るものである。大學病院などでは病人の皮膚の衛生といふことは大層注意して、斷えず病人の皮膚を拭いて居る。巧に拭けば決して差支のあるものでない。さればといつて、無闇に皮膚を洗ふのも宜しくない。皮膚から分泌する脂肪は体内の汚物として排泄されるのではなくて、皮膚の潤澤を保つ爲に分泌されるのである。恰も頭髮が脂肪の分泌により潤澤を保つといふのと同じ事である。しかるに毎日入浴して石鹼

で身體を洗ふと、この脂肪までが悉く洗ひ落されて、自然に皮膚が荒れる。故に毎日湯に入るのは差支ないが、さつと洗ひ流す位に止めて置いて、時々の外は石鹼で洗ふ事だけは止めたがよい。一體皮膚の上に溜る垢は、排泄された水蒸氣と、外部から之に附着するゴミと、加ふるに皮膚の皮の剥けたのが混合して出来たものである。此の垢は常に湯に入る人ならば石鹼を用ひずとも取去ることが出来る、(「實業之日本」に依る)

冷水摩擦 について大澤醫學博士が次の如く述べられてある。(「冷水浴と冷水摩擦」新編堂發行) 冷水摩擦を行ふには普通洗面の場合の裝置を採つてよろしい。全部裸體になり難き寒冷の氣節ならば、先づ上半身裸體になり、左右の手、背面と徐々に摩擦して衣服を纏ひ、漏布で胸部、腹部、次に下部全身に移り、下腹部の摩擦を行ふ。初は軽くして、慣れるに隨つて段々と力を籠めるやうにする。摩擦には氣を靜かにし、ゆつくりする。摩擦は呼吸にも注意し、外界にある新鮮の空氣と胸腹部中に溜んで居る汚染の瓦斯とを轉換させる心持で、稍々深呼吸を行ひつゝする。尙遠山醫學博士も次の注意を與へて居る。冷水摩擦は(同書) 毎朝目が覺めると同時に匆ね起き、成るべく短い時間に便所の用をすませ、身體の溫度のさめぬ間に戸を締め、風の當らぬやう注意し、且皮膚の紅

くなるまで強く摩擦する。冷水摩擦は決して薄着をして身體を冷してはならぬ。少し身體の工合が悪くても中止するには及ばぬ。發熱、出血又は愾衝の病氣あるときは中止した方がよい。毎朝冷水摩擦の清爽なことは、身體の活々として愉快な事、何とも云へない快感を感じ、それがため氣分よく一日を送ることが出来る。われ／＼の身體の中には横紋筋纖維と平滑筋纖維とがある。皮膚を顯微鏡で見ると、横の紋理の見えるのと紋理の見えないのがある。横紋筋纖維は自分の隨意に使ふ事が出来る、平滑筋纖維は自分で使はうと思ふも勝手に伸縮させることが出来ないが、冷たい目に遭ふと收縮する。その爲に又血の通ふ道が細くなり、血が通ひ悪くなるから、寒氣にあふと皮膚が白くなる。その反對に、熱氣にあふと平滑筋纖維が弛緩し、その都度皮膚竝に皮膚の血管が伸びたり縮んだりする。この平滑筋纖維の縮小が容易く出来るやうに鍛鍊するのが、冷水摩擦の重な效能である。暫くこの習慣を續けると、皮膚の抵抗力強固になり、寒暖の急變に遭ひ、雨に濡れ、寒風に吹かれ、不時の出来事のため深夜に起き出て、非常な事の爲に徹夜して働くやうな事があつても、決して感冒の心配がなくなる。感冒は百病の基と言ひ傳の通り、種々の病氣を誘發する原因であるから、冷水摩擦によりて皮膚を強固にし、感冒に

かゝらぬ様にするには、多くの病氣を豫防する最上の法である。坐業の人、常に机に向ひ讀書する學生、身體の一般に虚弱な人、感冒にかゝり易い癖のある人、神經衰弱症にかゝり、居常鬱々としてよく考へ込み、夜になると煩悶して安眠の出来ない人、病氣恢復期にありて衰弱の未だ去らざる人、胃腸の慢性疾患、無熱なる肺肋膜炎、慢性病、盗汗をかく人等に對しては最良の治療法で、高價なる醫師の藥を用ひるよりもつと效力を見ることがある。

冷水浴 は朝起きて冷水の中に入るのであり、それにしたへる體質の人はした方がよいが、一般の人には勧めかねる。

中止 一旦始めかけて途中で中止する習慣をつけると、意志の持続性を弱くする。それを意志の弱い人といふのである。外物に氣を取られ、深く考へもせずそれからそれへと注意の飛びあるのは、女子にあり得る欠點の一である。始めてから中止する如き癖をつけては、その欠點を益々大にする。

体内の不用物 が發散しないと、例へば腎臟を害することもありませう。病菌がつくのは皮膚が不潔な人々に往々あるのを見てもわからう。この件尙前條「清潔と壽命」参照。

蟲 はどうしても不潔物を含む。近來呼吸病患者の寢室は外氣と同温度にした方が治り易いといはれてゐるが、その理由として次の如く説く専門家もある。室内を温くすると、外氣と温度が違ひ、室内の空氣が上昇する。そして床下から冷氣が押しあげて来る。その時に自然に床中にある不潔物をも押しあげる。これが患者に害を與へるのであると。兎に角呼吸器患者の寢室には、夜でも外氣との交通を自由にすべきことは、進んだ醫學者間の定説となつてゐる。

自分で拾ふ 人の捨てた物を自分で拾ふ、これが眞の公共心とも隱徳ともいはれます。公園等でそれをするやうに慣らすには、學校内で、その習慣をつけねばならず、校内でそれをさすには、教師自ら例を示さねばならぬ。

日光の效力 煙や埃の類が太陽の紫外線の通過を妨げます。實際大都會では紫外線の小部分しか達しない。

本通だけ 舗装してその横路は舗装しないことがわが都市にはやるが、さうすると、横路で履物についた泥が舗装の上でおちる。それが埃となつて吹きまはる。舗装するならなるべく横路も、本通りになる一丁計り手前からは舗装する方がよからう。

第十八課 體力を養ひませう

最も悲惨な不幸 母の弱いために起る不幸は餘りいへぬ方がよいかも知れぬ。それは生徒中に繼母で困つてゐる者もあるから。

毎日の體操 例へばラヂオ體操の如し。自彊術を毎朝毎晩三十分位づゝ家で行ふのは、公設の方法としてはまだないが、よい體育である。

筋肉を平均 に働かす點から見、競技類はすべて有害である。競技は皆或る特殊の筋肉を働かすもので、その結果必ず或る筋肉又は骨格の異常發育及び異常衰退を來たすことは、最近の諸研究によつて明かになつた。水泳の選手の如きはこの點に於て最も體格骨格に有害な變化を來たしてゐることは、選手の胸背部のレントゲンによつて明かになつた。競技選手になると健康を損するとは知れ亘つてゐるが、その原因は右の骨格の變化によることが多い。競技をするなら、すべての競技を平均に行ふべく、特に一の競技のみを行ふのはよくない。健康からいつて選手養成は人の子を害するものである。それはいづれの學校に於ても注意すべき事である。

外國の習慣 西洋料理を一がいによいものと思ひ、そ

のまねさへすれば健康になれるなどと思ふのは誤である。日本人には日本人特殊の食物が歴史的にわかつてゐる。人間の體質は世界共通であるなどと思つてはならぬ。高山植物と普通の植物は同様に育てることはできない。**熱量** 食物はその生ずる熱量によつて定めるべき事として、ドイツで學説が發表されて居り、それによつて日本の陸軍などで食料量を定めてゐたが、ドイツに於て大戦の時遙かに少ない熱量でも人間が働けることがわかつたので、其の熱量説は未定の意見とわかつてしまつた。學者の説は決して完全に達してしまつたのではない。**學者** 從來の醫學者などはたゞ西洋の研究をそのまゝ受けついで者で、日本の事を特殊に研究し始めたのは比較的近年の事にすぎぬ。況や専門研究をせず、たゞ大學や専門學校を卒業した醫者などが、事物について深い研究もせず、素人考で彼はいふ言の如きは、決して安心して信用することはできぬ。明治中期に於て、各地方の醫士や醫師の中で餅は消化不良であると公言し、又文書に認めた者も可なりあつた。然るに今は餅米の方が消化がよいことがわかつた。専門家の面を被つた素人考は、普通の素人の考と何等異なる所はない。民族の經驗はこれ等輕卒な人々の考よりも信用すべきである。

わが身體 が自分の物であるとの考は若い時から捨て

去らねばならぬ。わが身體は社會の民族の力によつて存在し成長したのである。われ一人の力で生れたのでもなければ、發育したのでもない。社會民族の力によつて成長したものならば、社會民族の一部分である。一部分を害すれば必ず全部即ち社會民族に何等かの害を加へる。個人主義はその根柢に於て事實を誤認してゐることを若い者に明かにわからせたい。

寝つきが悪い 癖がつくと、一生取れないことが珍しくない。

早朝 に於ては頭が新鮮であるから、考へる力も覺える力も強い。深夜になると、頭が疲勞してゐるから能率が少ない。

女子の寝坊 主婦となると、まづ一番に起きて萬事を指揮せねばならぬ。それが寝坊であると、一日中家の仕事が出来なくなる。

スポーツと女性肉體 スポーツと女子の身體との關係は、十分に研究せられぬまゝ獎勵されてゐるが、これは輕々にさすべきでない。今醫學士齋藤一男氏が「帝國大學新聞」に出された一部を次に轉載する。運動によつて筋肉の伸展と弛緩とを絶えずやるから、關節の固定が阻害されて、關節の怪我をよく起し易い。殊に水泳においては軟かい、脂肪に富んだ、しなやかな筋肉を作るから、

うつかりすると足關節の捻挫を起し易いので、注意を要する。然し男の競技者に見られる様な骨の變化、關節の變化は今の所未だ殆ど見られないのである。骨膜、粘液囊等の炎症は男より多い様に思はれる。

外國の文獻によれば、大體において運動家には通常に比べて狭い骨盤の持主が多い。その理由に色々の説を立て、居るが、ウェストマン等は次の様に説明してゐる。「優秀なる選手には男子型が多い。丸々してゐる女の人には選手には少い。従つて狭い骨盤の人(男子型)の方が男の様に活動も出來、それ等を計つたら狭い骨盤が多いのである」と。又或者是骨盤骨の發育が、運動によつてこれを圍む筋肉のよりよき發育不良のためにおさへられて大きくならないのであるともいふ。然るに自分が岩田博士と共に日本の女子の一流選手と體操學校の生徒とを材料として骨盤外計測とレントゲン検査とを行つたところが、普通人に比して小さくならぬのみならず寧ろ大きいといふ結果に到達したのである。(數字は特に省く)。又そのレントゲン像に於て薦骨(横面)の形を見ると、その曲り具合が何うも運動家の方が強い、これは單に尻餅の様な外傷によつて起きたものとのみ考へられないので、大髒筋を運動に依つて盛に使ふ結果牽引されてかく變形したものと想像してゐる。

同じくレントゲン線において坐骨の骨端成長線を見ると、女子運動家は一般女子に比べて早く閉鎖する傾向を數字的に計測して證明することができ、同時に骨盤開角度を計測して見るに、普通二十歳位の人は90度位の處、運動家は92度といふ數字を示してゐる。即ち一般に年寄はその角度が増すといふ高橋學士の研究からして、運動家は坐骨成長線の早期癒合と相俟つて幾分年寄の人と同じ形に入る様に考へらるゝが、これが本當の年寄とその間にどんな差があるかは、今後の研究に待たなければならぬと思ふ。

扱つて月經と運動といふ問題であるが、常識からいふと月經中は運動せずに休んでゐるのが至當と考へるが、試みに運動の盛んなる女學校に就て調べて見るに、月經時に一般運動に不参加なものは約二割、他は運動量を減らすか或は通常通りにやつてゐる。これに對し、選手になつてゐるものは僅かに一割五分強が運動に參與しないのみで、他は參加してゐる(ドイツの統計では約四割が不参加である)。これがどんな風に影響するか。岩田、根本兩氏の研究によれば、本邦選手で月經期中軽度の運動をしたものの、當該月經經過及び次回月經來潮期日に何等變化なきものが約四割、他は凡て月經量の過多、月經の持續日數の延長の悪影響が見られてゐる。尚選手の練

習をやつたものは、變化なきもの僅に一割、外國の統計ではもつと多いのであるが、他は何れも悪影響を蒙つてゐる。又本邦選手にして月經中選手として競技に出場して何等變化なきものが約一割五分しかないのに、外國では五割位が變化なく済んで行く、即ち外國婦人の競技選手的練習をしたのと本邦人が輕運動したのとが略同數の變化を受ける所より見れば、日本人は外人に比し、スポーツに依る性機能の感受性が遙に敏感であるといふことになる。この主なる原因として日本人は初潮來潮前、十二三歳に猛烈な運動をするからであらうと想像してゐる。

第十九課 運動

登山 山は一體に空氣がよく、紫外線を受けることも多い。東京の如き山の少ない處は止むを得ないが、近くに山のある地方では、時々生徒全體で登るもよく、家族連れで登ることは屢行ひたい。平生何等脚も身體も練らないで、夏休に重い荷を負うて嶮山に登る如きは適當とはいはれない。

巡禮 西國三十三ヶ所の觀音を廻り、四國八十八ヶ寺を廻るなど、身體四肢を使ふ。身體はすべて生活そのもの、

ために使ふのが最もよい。生活を離れて別に運動をしなればならぬと思ふのは誤りである。思想の進歩は自然に生活と運動との合一をよいとすることに傾いて來てゐる。手工科が世界的に重んぜられるのはそのためである。手工といふ學科が一つあるのではなく、生活のために頭と筋肉とを同時に働かすのが即ち手工である。家庭で箒をもつのも、雑巾をかけるのも、皆手工であり、それを立派にするのが生活のための運動である。生活のための運動を疎外にして、そして特に競技をする如きは、筋肉の正しい働かせ方ではない。今の女子教育はこの點で大いに考へねばならぬ。

片輪 この語を純調してほしい。現代には一方に勞動の神聖などと叫ぶ聲があるかと思ふと、他方にいやな貴族的氣風ができて、左程高い身分でもないのに、子供にまで女中を使はせ、小學校時代でも女學校時代でも自分で何の用をもせぬのを貴いと思ふ傾がある。かゝる子供が成長して主婦となると、丸でにせ貴族の氣分になる。子供の時から自分の用や家の用を行ふことが出來ず、主婦としては女中に物を命ずる外何もできぬ如きは、どう考へても片輪である。私は温泉へ來て、にせ貴族の多くを見る度に、わが社會の將來を深く悲む。しかしその原は一は女學校の教育にもよることを忘れてはならぬ。

第二十課 困苦に耐へたい

衣服を解く ことを知つた女生徒は今殆どよくなつたらしい。これも女生徒の生活が全く學校とかけ離れたためである。母は自分の傍に女子を坐らせて、時には衣類の解き方をも手傳させるべきである。衣を解くことを女中まかせにしては、例の片輪を造る。衣を解く知識が大切なのではない、その經驗が貴いのである。自分自身に最も近い衣服と筋肉勞動との關係を知らねば、衣服その物の値打は眞にわらぬ。

近江商人 中世以降近江、八日市附近を根據として諸國に行商した所謂黎明期の近江商人は今や都市の發達と共に三都に店舗を張り、又獨特の商法、即ち遠隔の地を一本の天秤棒に商品を荷うて、彼我の貨物を賣買し、或は遙に未開の地に渡つて通商に従事した。慶長元和の際には、豪膽の商人が萬里の波濤を越えて南蠻貿易に従ふもの多く、近江商人中亦これに加はるもの尠しとせなかつた。即ち八幡出身の西村太郎左衛門暹羅屋勘兵衛の如きは、その一例として聞えてゐる。八幡商人は早く慶長初年江戸に出て店舗を開き、江州物産を販賣、續いて京

都大阪に商權を確立し、或は遠く松前藩に出入して漁場を經營し、又關東片樞の地に呉服店を經營するものも頗る多かつた。日野商人は八幡より少しく後れ、元祿以降殊に關東諸國に出て、酒醬油の醸造を業とするもの多く又賣藥製茶の行商も多數に上つた。更に五箇庄を中心とする商人は、その勢力をなすに至つた時代は日野よりも遅れたが主として布織編等を關東各地に賣り、所謂持下と稱して關東關西の物産や呉服類を彼我相交易し或は四國九州に渡り、店舗を京阪に構へて漸次その商權を確立した。その他愛智川、高宮、長濱等にもそれ／＼巨商輩出し、中には遠く松前に渡海して漁場を開くものもあつた。

土用干 八月好晴の日に梅雨でしめつた衣服を干すこと。これも女子には手傳はせてほしい。

昔の女子 に比べて今の女子が眞に優つてゐる點はいくらもあらうが、辛抱する力は少なくも減じた様に思はれる。女子教育を男子教育と同型同主義で課すると、種種の結果が生ずる。その結果を受けるものは女子自身であり、社會であり、民族である。教育者自身は何の結果をも受けない。教育者はそれで自ら安心すべきか。社會の希望とか、家庭の氣持とかに餘りに重きをおくと。教育に社會を指導すべき權力が失はれる。教育者は生若

い學者や雜誌記者などの意見にのみ心を引かれてはならぬ。

卷二

編輯趣旨

本卷はわが民族道德の實際的方面を述べた。わが民族道德の中心點は恩の思想である。恩とは自己存在の源を自己以外に求め、それに對して感謝する氣持である。この氣持によつてわが社會が組織され、宗教も政治も經濟も家庭も皆この氣持を中心として發展して來た。社會の各方面に、同一な氣持が貫徹してゐる時のみ社會が圓滿に存在し、活動し得る。明治の初に於てまづ人心維持の一中心力たる佛教を排毀し、それから思想の基礎の全く異なつた西洋の事物を殆ど選擇なしに採用したがために恩、從つて勿體ないといふ氣持が著しく破毀せられ、自己存在を自己の價值即ち權利に歸する西洋思想が社會に普及せんとした。その思想とわが國傳來の忠孝の思想とは根柢に於て相容れぬ處がある。從來の政治家も教育家も法令もこの源を考へないで、たゞ忠孝だけを修身に於て授けんとした。そのために忠孝は社會に於て他の方面と關係のない空に浮いたものとなつた。これが修身が生徒の心を支配し得ない一原因である。

本卷に於ては、まづ恩の氣持を基としてわが國傳來の宗教的道德的氣分を社會の各方面に亘つて説

き示し、その背景の上に皇室に對する傳統的氣分を説明した。課は二十に分つてあるが、實は一の連絡した論文である。教授される方はこの根本氣持をよくつかんで、各課共にその表現である點に重きをおかれない。

一年に授けた事項で、本巻に更に述べてあるものもあり、本巻中に同様な事項を二度も述べたものもある。それは各自に是非とも實行させたいためである。修身は科學の書と違ひ、あらゆる事實を網羅して、それを組織的に列べてそれですむ性質のものではなく、又一の事項につきその原因を一二三と列挙したり、その必要なわけを順序をつけて理論的に闡明するのを目的とはしない。いかなる原因で一事項ができてゐるとか、かくかくの必要があるから、それをしなければならぬといつても、人間はそれで實行する氣分になるものではない。歴史や地理で、ある事項を説明すると同じ氣分で道德現象を説明するのは、社會的道德學の仕事であり、それは修身とは全く別のものである。私はわが國の修身教授が社會的道德學に墮し、その結果、何等修身教授の目的を達してゐない現状を見て、痛切に修身教科書の組織變更の必要を感じる。本巻はかゝる氣分で編輯した積りである。

第一課 生のありがたさ

第二卷の教授法 生徒の程度にもよらうが、第二年から一年とは違ひ、一々生徒に讀ませせず、教師に於て

大體の話を一節毎に聴かしてよからうと思ふ。そしてその話について、何が一等大切かと生徒に考へさせてもよからう。又は教師自身それをもよからう。大體私の本は、要點だけ覚えればそれでよい様には作つてない積である。多くの課に於ては、一課を通じて是非覺えるべき事が一つか又は二つ三つ述べてある。又修身といふものは、一課の要點を覺えるよりは、その課全體を讀んでその中に浮んで、來る一種の氣分が大切なのである。この氣分を生徒の心に浮べさすのが修身教師の特能である。覺えるといへば、課の中で○○○をつけた語、その他目星しい確言めきた語は、覺えて置いた方が一生の心の養とならう。修身に於て一課の要領を別けて、第一何第二何と列挙して覺えさす如きは、全く修身教授の精神に合はぬものである。修身は社會學を講ずるを目的としない。又他の所謂語記物と同じ學科ではない。

この課から第五課 までは主として孝を説いた。なぜ孝がなすべきかなどと民族的慣習にしひて理由をつけるとも、その効は少ないこの五課に於て自然に孝がせねばならぬ氣持をもたせ、又その仕方を示すのが本書の目的である。孝といつても、その精神及び仕方に於ては固より親に對することに限らず、推して一般の人に及ぼしてよい事がある。孝が日本の主徳であるといふのは、親に

對して孝さへ行へばよいといふ事ではなく、社會に感恩の空氣があつて、それが親に對して最もまじめに行はれ、又親に孝するによつて、社會の各方に對して感恩の空氣及び實行ができるのである。孝といふ一章を作つて、そこで親に對する心得のみを事々しく説くのは、實は日本の孝を十分に理解しないのであり、又かゝる方法で日本の孝をわからせることはできぬ。教授要目の説明だけでは修身を成さぬ。

震火 としたのは、大正十二年の禍災は地震一部、火災一部であつたので、あの大災はたゞ地震のみから起つたのではなく、中には全くの放火さへもあつたとの疑もあり、その損害賠償の訟訴が起つたが、明かな判決まで進まなかつたかと記憶する。

恩 とは自分の存在の原因が外物にあるとして、その外物に對する感謝の氣持を全部まとめていふ。自分の存在の原が自分の權利とか本來の性にあると見て、自分のみで存在ができたと見るのは寧ろ西洋風の考へ方である。故に西洋思想では恩の考がない。理論上寧ろ日本即ち東洋の考へ方がよい。

父母の生の恩 父母が勝手に生んだのだなどいふ子供がこの頃は可なり多いと聞いて居る。父母がいかにして生んだのであらうとも、父母が生ましてくれたればこそ、

一人の人間と生れ、人間なみの判断もできる様になれたのである。自分が何、かれと判断する前に、まづこの判断する自己、判断する力をどうして得たかと考へねばならぬ。

人々の恩 自己の言語、考へ方、衣食住は父母だけから全部得るのではない。

妻りに殺さず 殺すとはその物の目的を達せしめぬこと。その用を十分に果さしめない事。

宇宙の恩 などといふ事は、維新後に佛教を破壊しようとしてから、一般に邦人の頭からなくなりかけた。しかし今でも佛教信者の家では、多少その面影が残つてゐよう。ヤソ教では一切を神に歸するために、宇宙の恩といふ事に氣づかない。そして神の愛といふ事に重きをおくために、わが邦の歴史的の氣分とは少し違つた氣分しか與へ得ない憾がある。宇宙の外に、別に宇宙を創造した神の存在を認めるのは、東洋の大體の考へ方とは違ふ。**宇宙と助け合ふ** 宇宙を自分と同じ人間の如くに考へ自分と共に大團體を造つてゐるものと思ひ、自分の姉妹の如くに考へる。これが、東洋の思想である。これがあるから、人間は宇宙と共に和合せねばならぬ、人間同志も和合して行かねばならぬ。かくして宇宙を大きな和合の場處と思ふ。自分と他人とは全く別の物で、互に争闘

争するなどは、子供に取つては花々しく見えもしよう。しかしそれ等は女子の使命から見ると何等價値のないもの學校でも自校の評判のためにそんな事を奨励してはならぬ。評判などを眼中におく如き教育法は、それ自身教育の目的に反く。

第三課 細やかな氣持

理屈 と道理とは違ふ。理屈とは道理のほんの一部分のみを見てそれを主張する場合に用ひられるもの。友人がナイフで手を切つた。刃物で手を壓すれば血が出るのは當前といふのは理屈。痛い事をしてさぞ本人は困るであらう、氣の毒だと思ふのが道理。理窟が本字であるが、本書の著者はなるべく畫の少ない字を用ひる主義からして理屈の字を用ひた。

親が寝て 居られる傍を通る時には、すり足をして、なるべく音を立てない。これは夜のみではなく、又誰の寝てゐる處でも同じい。

親に對する 本課に列擧した様な細事を昔は親が教へたものであるが、今は學校も親も共に教へず、そのためわが民族がひどく粗野なものになりかけてゐる。これ等の事を親に對してすることを覚えれば、自然に推して

して權利を主張せねばならぬといふ西洋思想よりは、遙かに合理的である。

第二課 親

空氣 のない處。潜水艇に乗つて海中に入るとき、又は小さい室に非常に大勢の人がつめこんだとき。

光線 のない處。鑛山の深い坑中に入つたとき。**自分の身體の一部分** 母の胎内にあつたときは全くその一部分であつた。生れた後も母にはこの氣持がとれない。

孝子愛日 愛は惜むとよむ。一日でも親に多くよい事をしてあげたいと思ふから。

大活動 フランズのジャンダルクといふ女は、二十にたるかならぬかに、佛國を攻めてゐた英國軍から母國を救はうと思ひ、神からその命を授つたといふので、自ら軍を指揮し、その氣力によつて佛軍は終に英兵を逐ひはらつた。しかし自分は捕はれて燻刊に處せられた。これは誠に大活動である。しかしそれは各女子が必ずしも望むべき事ではない。

花々しい仕事 水泳で日本の代表となり、外國人と競

他人にも及ぼす。それを孝は徳の本なりといふ。親に對する道を教へぬと、他人に對する道もわかるはずがない。

第四課 作法

仕事 をすると、それが主になり、それに全心をとられ、やゝもすると、人にどういふ氣持を與へるかを忘れ易くなる。勿論忘れないのがよいが、仕事に熱中すると、さうなる恐がある。

道徳の維持者 が女子であるとは西洋の本にもかいてある。道徳に於ても、さういふ場合はあるが、作法に於ては全くさうである。男子が無作法であつてよいわけではないが、女子は更に作法を大切にし、社會にそれを普及する位の氣持がなくてはならぬ。

男女相補ふ この氣持が今の女子に著しく少なくなつた事は、教育上注意すべき事である。

茶の湯 足利時代には禪の勢力が非常に大きかつた。禪をすれば自分の心を十分に強め、引き締め、そしてそれをなるべく外に表さぬ様になる。茶の湯も足利時代にできたものである。その中頃から色々な傾向の茶の湯の流はあつたが、それを足利の末になつて千の利休が統一

し、深い精神的のものとした。身體の振でも手脚指頭の働でも、最小限度に於て最も有効の使ひ方をする。手脚を最小に最有効に使ふには、内の心が十分に引き締まつてゐねばならぬ。最小で最有効に使ふには順序が正しくなくてはならず、ムダがあつてはならぬ、徒らな摩擦が少しもないやうにしなければならぬ。そのムダがない順序を考へつめて今の茶の湯となつてゐる。茶の湯といへば、道具ばかり立派にすればよい、宗匠のまねさへすればよいと思ふのは、茶の湯の末にすぎぬ。

挿圖 は岡倉覺三氏の英文 Book of Tea から轉載した。この書は日本の精神主義を世界に紹介した最名著の一人で、世界數ヶ國語に譯せられてゐる。但しこの圖は茶の湯の説明としては少し不十分な點がある。外によいのが見當らぬので姑く存した。

第五課 尊敬

立派な行の人の方が立派な考の人よりは、人間として立派である。しかし眞に立派な考の人ならば必ずしも立派になるべきはずである。さうならぬのは、考が一方的であつて眞に深みに達せぬからである。

立派になりたい 立派な精神をもつてゐることが最も立派な事、最も尊ぶべき事との考は、子供の時から與へて欲しい。この觀念が今の學校では男女を問はず十分に與へてない。その結果、男子も女子も相率ゐて拜金宗、虚榮宗となる。

骨折 今の學校には點數や試験のための骨折は可なりさせるが、仕事その事のために骨折り工夫することはどうも少ない。そのために眞に人をえらく思ひ得る事も少ない。

下る程 人は見上ぐる藤の花。覚えさせてよい俳句である。かゝる句を覚えておくことが人の品位を高める。昔の「いろはがるた」には訓戒となる警語のみを含めてあつた。あれが何程邦人の品位を高めるよすがとなつたか知れぬ。維新の時佛教を排した、そして一切訓戒が社會から排されることとなつた。

第六課 同胞

最大幸福 といへば、一家互に心配も恥かしい事もなく、信用し合つて正しい生活をなし得ることであらう。私は金持の妻を何人か知つてゐる。それを決して皆幸福

卑屈な風 小商人が往々客に對して表面だけ丁寧にしよつとして、ひどく頭をさげたり丁寧すぎた物を言ひをするの類。

自分と同様な言葉遣 これは男子に於てひどく素れて居り、大學を卒業して職につくと、皆俄かに改めるのに困難を感じる。近來女子も男子のまねをして、粗末の言葉しか知らなくなつたのは、教育者に於て注意すべき事である。

尊ぶべき人 に對して敬語を使へないと、すぐ人から輕侮される恐がある。自分が粗末な語を使つても、人は必ずしも面と向つては何ともいふまい。しかし心の中では輕侮を感じ、對等の待遇をしてくれまい。

親を尊敬 尊敬といふ事を幼時から實行する場合は、まづ親に對してである。それから小學校の先生である。然るに近來尊敬をしなくてもよい親、よい先生が多くなつたのは、社會の組織として甚だ遺憾である。

御早よう のようは對等の語、敬語としては「御早ようございます」といふべきを、こゝでは略した。生徒には兩者の別を教へて欲しい。

外套をさせる 客人に外套をさせ、ぬがせることを知らぬ婦人が尙甚だ多い。これは男主人でもすべきことである。家に於て親に對して練習することが必要である。

だとは思はぬ。自動車に乗れる、よい衣服がきれる、生活に困らぬ。しかしそれだけが幸福とは考へられぬ。

わが身の小 できるだけ善い事をして、親の志に報いるのが子の本心であるが、それが十分にできないから、自分を小さく思ふ。人は希望が大きければ大きいだけ自身を小さく考へるものである。自分をえらく思ふのは志の小さい人の常である。

ラム Charles Lamb (1775—1834) ロンドンの人で論文家評論として有名である。二十二歳の時(一七九六年)姉のメーレが俄かに發狂し、母を撲殺したので、普通ならば姉は終身を精神病院で過さねばならぬこととなつたが、ラムの熱心な願によつて、平癒後はラムが責任を以て自宅へつれ歸ることになつた。しかし尙時々發作するので、その徴候が見えると、すぐ病院へつれていつた。その時のラムの心の中を察して、見る人は皆涙ぐんだ。それでも尙病氣が治ると家へつれ歸つた。有名な「シェイクスピア物語」(一八〇七年)は姉の發病後の兄弟の共著であつて、悲劇はラム、喜劇は姉の筆になつた。尙その翌年に姉を助けて「子供の詩」を發行した。

蠅よけの金網 米國では多くは窓の下半分金網をはつて、硝子板は二枚共上にあげる家が多い。
椅子の上に おいたのは、一は目立たぬ様にする積も

あつたかも知れぬが、大體外國では食卓をば清いものと
し、その上に食器以外の物をおくことを嫌ふ風がある。
食堂で帽子を食卓の上におくことなど、わが國ではよく
見るが、外國ではない事である。帽子は不潔な物である。
麥粥 オウトミール

次から次へ送る 食卓の禮として自分が砂糖牛乳等を
とつた時は必ず次の人に廻す。自分の前に止めておいて
は、人のとるのを妨げる。

第七課 長幼

われ等をかけさせ られるが、子としては親を立たせ
て自ら腰をかけてはならぬ。先生に對しても同様である。
様の敬稱 を子につけるのは、親の情とはいへ、善良
の風習とはいへない。子供を増長させ、傲慢にさす。事
實日本の子供は實に行儀がわるく、不謹慎である。幼少
からの仕附がわるいからである。

修學旅行 で教師が立つて居るのに生徒が腰をかける

釋の主義が第一階に於て祭祖の風をなくし、その後西洋
文化及びキリスト教がそれを第二に奨励する結果となつ
た。しかし今でも地方で佛教の盛んな處には尙普通通りの
祭祖はある。神道が祭祖を重んずべきはすであるが、久
しい間、祭祖の事が實際に佛教の手に渡つてゐたため、
佛教を破壊すると同時に、この慣習が破壊された。これ
は政府の一の思慮なき態度でも社會の根柢を破壊する好
例である。

年に二二回 佛教では春秋の彼岸に行つた、又盆にも
行つた。眞宗だけは年に一回報恩講を行つた類。

氏神 本は一部落同祖であつたため、その同祖の祖先が
即ち氏神であつたのである。故に氏の神といふ。今は住
民の出入が激しくて、昔の通りには行かぬが、それでも
氏神の祭をすることは全国的といつてもよい。同地の人
の祭る神を産土神、うぶすなの神といふ。

一切の男子をば生々の父と思へ 一切の女人をば生
々の母と思へとは、佛教の語。深く自己存在の源を考へ
れば、かうなるのは當り前である。しかしかゝる教は今
の修身にも多く忘れてゐるのに注意しなければならぬ。
日本の思想の根本がわからぬと、かゝる氣持はわかるま
す。

例は常に見る。これ等は小學校で訓育を誤つた結果でも
あらう。
堅苦しい禮 禮は形にあるから、形も大切であるが、
餘りに禮ばかりに力を用ひて心を顧みない仕附はよくな
い。氣輕い氣持で心から尊敬の禮をするやうにしたい。
しかし現時では、女學校でも、特に上級生になると、禮
を輕んずる風がある。それは下級の時に心にもない程度
の禮を強ひるため、上級に至つてこの強ひる力がなくな
ると、全く禮の氣分を失ふのではあるまいか。本當をい
へば、生徒が年が長けるに従つて心の禮は益々丁寧にな
るべきはずである。しかしそれは教師の態度が生徒を心
服さすに足りなければならぬ。

第八課 祖先

祖先の恩 を知らぬのは、その恩が現實に見えぬから
である。しかし人は眼に見えるものばかりに注意するや
うではいけない。眼に見えぬ處に、見えるより更に大き
い物があることを知り得る様にした。

祭祖 の慣習は西洋の昔にもあつたが、それを滅したの
はキリスト教であつた。わが國では、明治の始の廢佛毀

第九課 親族

民法上の親族 六親族以内の血族、三親族等以内の姻
族。親等を計算するには、自分と親等を今數へようといふ
親族が共通に出た本がある。自分からその本への等數、
その本から今數へようとする親族への等數を合計するの
である。姻族とは妻又は夫の親族。

慣習上の親族同様 のものとは、例へば自分の家の
昔い祖先から分家した家は、今では六親等以上となつて
ゐても、以前から親族扱ひをして來たのなら、矢張親族
同様にすべきである。分家が本家を親族扱ひにする美俗
は、わが國體の上から見ても必要なものである。民法は
これ等美風を破壊した。

親族を助ける義務 を民法では扶養の義務といひ、細
かい順番が定つてゐるが、畢竟近いものからすることに
なつてゐるのである。しかしこれも美風を破壊する害が
ある。

慈善 と世にいふのは多く米國輸入のもので、キリスト
教徒によつてまづ行はれた。これもわが美風とは必ずし
も一致せぬ。

國によつては 朝鮮などはこの通りであつた。その他

にもある。私がシンガポールに或る邦人で支店長の宅に泊つた。その家の自動車運転手は土人であり、月に六十圓の給料を受けてゐた。それが同族中の最大収入者であるので、同親族がよつて来てその衣食を受けるので困つてゐた。

煩瑣 度々訪問をしたり、贈物をやり取せねばならぬ如きをいふ。かゝる事は程度の低い階級程多いのではあるまいか。知識階級に於てはまづ少ない。一方が頻繁に来ると、他方へも行かねばならぬ。そのために必要な時間をムダにさかねばならぬ。もし行かぬと、かれこれ悪口をいふ。贈遺も同様である。かうなると交際が反つて不和の源をなす。

第十課 衆人

時代思想 何となく同時代の人が多く抱く思想。これは勿論漠然として、ゐてはつきり定まつたものではない。又時代思想が皆よいものとは勿論定まつてゐない。時代精神といふため、何か正しいものなどと思ひ違ひするが、必ずしもさうではない。

郵便配達人の恩 といふと變に感ずる人が多い位、衆

は日本の如き宗派の別はない。

第十一課 博愛

この課 にかいた事は幾度も出ますが、これ等方法は毎年くりかへして注意し實行させたい。

博愛 は勅語中の語であるが、勅語の中にあるから大切なのではなく、大切であるから勅語に御取りになつたのである。勅語の本文を語記さすも必要、しかしそれよりは勅語の教訓を實行する氣にするのが更に必要である。この間の關係が往々教育行政者や教育者に間違はれる。博愛とは誰彼一人一人を愛することではなく、宇宙有生の物全體を愛することである。する事よりも寧ろ心の徳として見たい。

藩と藩 との間が仲よくなると、合同して徳川に反抗する形勢を起し易い故に、徳川氏の政策としてはなるべく各藩が仲よくならぬ様にした。それが同藩内に於ても同結果をもたらした。

自分だけの力 でこの世に生活するといふ氣持は、中流以上のものに特に強い。成金だの華族だの、教養のよい高官の子に對しては特にこの點に重きをおいて教へぬ

人の恩といふことが忘れられてゐる。

勿體ない といふ語も、天地の恩とか、衆人の恩とかの考があると思われるが、明治以降外國思想にかぶれて、恩といふ事が忘れかけたため、勿體ないの語も忘れかけた。これは是非とも、せめては學校に於てなりとも教へてほしい。飯粒一つムダにしても勿體ない。

静かにわが務 を盡す。この静かにの語に特に注意させたい。外の事、外の人が何と思ふかはかまはず、たゞわが務と思ふ事に全力を注ぐ。静かの語は人間が義務に盡す最高の心持を表はす。

禪宗 では悟に重きをおく故に、この日を最も大切にす。しかし他の宗派でも必ずしも何の式をも行はぬといふわけではない。生徒には學校所在地か又は附近の禪宗寺の名を聞くもよからう、生徒にはせめて、禪、眞、法華三宗の内容の差別位は教へてほしい。日本人として必要である。

僧侶 京都では主として禪宗の僧侶。足利時代の學問は京都の五山に於てのみ存した様なものである。京都の五山とは天龍寺、相國寺、建仁寺、東福寺、萬壽寺であり、皆臨濟宗の禪寺である。五山はもと印度に五山があり、それが又支那にもでき、日本に於ても鎌倉にもでき、京都にもできた。日本のは皆禪宗である。尤も印度や支那に

ばならぬ。

聖徳太子 既戸皇子の事は歴史でも少しは教はつてゐようが、凡そ日本の國體の基を確定し、神を崇め、佛を尊び、皇室を尊び、神佛二道によつてわが國を精神的政治的に治めるべきと定められたのは太子であり、わが國體は實に太子の教によつて發展の基を得た。太子は日本歴史中の最偉人の一人である。佛教を用ひられたため、水戸の史派併びに國學者間には嫌はれて居り、そのために今にそれ程尊崇しない者もあるが、靜かにわが歴史の大流を觀れば、それは間違であり、太子がなかつたら、日本の地位がどうなつてゐたか明らぬ。水戸史流は皇室を尊崇した點のみに於て價值あることを忘れてはならぬ。

クリミア戦争 ロシヤがトルコの二州を取つたために、英國佛國が合同してトルコを助けた戦争で、一八五四年に始まり、五六年ロシヤの敗となつた。戦は主としてクリミアで行はれた。この時英軍は給與品も不十分、醫療の方が非常に行届かず、負傷兵苦難の報が頻りに至つたので、政府からナイチンゲール嬢に看護婦長として赴き助けることを請ひ、嬢はそれに應じて行き、非常な功を立てた。嬢がその貴族的上品さを以て傷病兵に對すると、どんな苦しい手術でも我慢して受けた。其の頃は手術のための麻酔劑はまだ極めて不十分であつたので、

手術は非常な苦痛であつた。嬢は軍醫が見込ないと捨て、おいた兵を看護によつて回復させた。嬢が病室を通ると、病兵はその影に接吻した。嬢は看護が上手であるのみならず、病院内の整理から兵の家族の職業までも整頓し、その組織の方によつて非常な助をした。特に感心なる事は嬢が、始め看護婦を率ゐてロンドンを出發した時も、功成つて歸國する時も、一切その時刻も自分の名をも知らさず、人知れず出發し、人知れず自宅に歸つた。かゝる申かしい心持は獨り日本婦人の所有かと思はれる位である。

泣いて後影を拜むことはたゞの善い事ではできぬ。かくさすには心から人を感動せねばならぬ。われ等もかゝるよい事をしたい。

第十二課 常に他人に氣をつける

咳を するには電車中でもどこでも必ず口に手をあてねばならぬ。咳で出た病菌は三間ばかり先まで行く。そして之れが人の口に當れば病氣を傳播さす。

汽車の棚 私が房總鐵道に乗つてゐた時、他人の大きな風呂敷包が頭の上に落ちました。可なり痛かつた。しかし私は一言も言はず、その方を向きもしなかつたら、

その持主(婦人)は終に一言の詫をもしはなんだ。これ等は日本人間にも少ない無禮であるが、戸や窓をあけたまゝしめない人は常にある。自分があけた戸や窓をしめるのが他人の務とでも思ふやうに思はれる。

修學旅行の時の女生徒の無作法は實に甚だしい。(一)私が日光の宿屋の三階に泊つた。その下の二階の室に埼玉縣の公立女學校の修學旅行生が泊つた。私は始から騒がしからうと思つて睡眠劑を飲んで寝たが、それでも午前二時前に下の話聲で眼がさめ、終に睡つくことはできなうだ。その翌夜には女生徒が夜深くまで階子段で捕へ合をして居り、二階の客などは大閉口した。その生徒は自分の室では、上に被る夜具の上に數人があぐらで坐り、話をしてゐる。全く下等社會の生活そのまゝである。これは私は餘りひどいと思つたから知事に注意書を出しておいた。(二)私の學校の高等科生徒が修學旅行で三重縣の龜山で東京行の汽車に乗りかへた。そこに山田からの東京の一女學校生徒が同じく修學旅行で乗つてゐた、私の學校生徒は數日の疲労もあり、又車内の作法は教へてあるので、靜かに眠る積であつたが、その女學生が終夜大聲で騒いでゐて、全く眠れなかつた。しかもその生徒には教師もついてゐて、一向抑制しなかつたとの報告であつた。(三)尙楚人冠か朝日グラフにかいた一文を同

様の例として轉載する。これは昭和八年の事である。「十月二十一日のことであつた。熱海發午後四時二十五分發の準急行に乗らうとしたら三等車はいづれも一杯の客であつた。一番前の二車はどこかの女學生で一杯であつたが、少しは空席もあるらしいので、中へわりこんだ。ところが、空席と思つて腰を下さうとすると、そこには誰とかが來るとのこと、意地悪く一々文句をつけて、人に腰をかけさせまいとする。忌々しいから、かまはずその一つに腰を下して、人が來たら出て行くから、それまでおいて下さいと頼んだ。列み居る女生徒一同はさもいやさうに變な一種の笑ひ聲を上げた。

「列車が出發して、二停車場も過ぎたが、私の坐つた席へは誰も來ない。「それ御覽なさい」といつてやつたら流石に極り悪さうな顔をしてゐた。「席がなくて困つてゐる人があつたら、自ら進んでも席をあけてやる位の心がけがあつても然るべきところを、わざ／＼空席を空席でないと偽つて、人を迫り立てようとするなどは、教育のある婦人のすべき事ではありませぬぞ」と、誰にいふともなくいつてやつた。これを聽いて恥ぢ入りでもすることか、一同はさも人をさげすんだやうな一種の笑ひ聲を又もや立てた。

「兎角する内に、今度は學校の職員と覺しき五十年輩の

男がこゝに現はれた。「この車は貸切だから、どうか學校外の人は出て下さい」といふのである。さうかと言つて立ちかかると、私の側に三四人あつた。が私は立たなかつた。「貸切ならば車の表に貸切の札を下げるべきはずです。それをせずにおいて、安心して乗つてゐる乗客を追ひ立てるといふ法はありません」とやつてのけた。この車はこの女學校の爲に便宜増結したものかも知れぬが、萬々貸切でないといふ確信してゐた。兎もすれば、かういふ車は貸切と稱して無邪氣に乗り合せた乗客を追ひ立てる者のある事を、私はよく知つてゐた。だから、私がこの車を「貸切ならば」といつた一言で、件の學校職員は急に狼狽して、「いや決して出て下さいとは申しませんと訂正した。出るといはぬならば強て争ふこともないと、私はそのまゝ黙つてゐた。かういふ意地の悪い女學生の出來たのは怪しむに足らぬ。後に分つたことだが、これは横濱の某女學校の職員生徒の一晚どまりの修學旅行であつた。

「かくて四人席の中に私が一人坐つたので、あとの三人の女生徒は烟たさうに私を見て、何を尋ねても一切返事もせず、双方敵同士のやうに白眼合つてゐたが、その内女の手で窓の開閉に困つてゐるのを私が二三度手傳つてやつてから、やつと禮をいふ位の口をきくやうになつた。

それから彼等の心もや、解けたものと見えて、いよ／＼横濱で下りる段になつて、三人は丁寧に「さよなら」「失禮いたしました」「お休みなさい」など挨拶して行つた。

「やつぱり女の兒であつた。」これ等によつて、如何に女學校に於て修學旅行の作法が教へてないかがわかる。私はかゝる事が平氣で許されてゐるのは、全く文部省の責任であると考へる。

文明人と未開人 昭和九年八月ドイツの前皇太子が、歐洲の高級文明によつて東洋の低級文明を抑へねばならぬといふ意味の事をいつた。他人の事に氣をつけぬ點に於て、われ等を未開といはれても、それなら遺憾ながら一言もない。しかし他の點に於て東洋を低級文明といふのは間違つてゐることは言ふまでもない。

第十三課 和を貴しとす

あてこすり は男子もするが、女子が更にひどいではないかと思はれる。婦人の會に出ると、可なり高等社會の婦人であつても、まゝあてこすりを耳にする。それはわれ等男子同志の會にはないやな氣持を與へる。
賤しい身なり 男子は賤しい言語動作を見ると輕蔑の

風をする。女子は賤しい身なりを見ると輕侮する。尤も男子でも宿屋の番頭などは男子であるが、賤しい身なりの人を見ると輕んずる風をする。

他人より優つてゐる 點もあらう。しかし人には又自身より優つた點があるに相違ない。一點を見て人を輕蔑するのはよくない。

人の帯の邊を 見て談話をせよといつたのは昔の禮。私は私の方を見ないで物いふ人に對しては相手にならぬ事にしてゐる。

膳部を賞める ことは昔は禮儀となつてゐたが、今はさうは見ない。尤も珍品があつたら、どこから来たか、珍しいものだと、事實だけいふのは別に諂ともならぬ。諂をきいて喜ぶとき、主人はそれだけで品を落す。

嫌ふ まづい者があつても嫌つた風は勿論しない。昔岡山中將が客をした。その中の一人、たしか井伊侯かと思ふが一寸腕の蓋をとつたまゝで、腹痛がするといつて坐を立つた。程経て歸つて来たから、もう冷えましたらうからかへましようと思つた。いふままに腕をかへさせた。臺所でその蓋を取つて見ると、布巾が入つて居た。それを荒だ、せては主人の恥辱、料理人の不調法となるのを、それと言はないでたゞ自分の腹痛に托して救つた。

第十四課 外國人

わが國に來往する外國人 例へば世界赤十字社大會や太平洋宗教大會の如き大會が續々わが國に開かれる様になり、一回に數百人來るので、東京にホテルが不足するといふ有様である。その外、留學生では海外人は非常の數に上り、その外支那、印度、ジャバ、フィリッピンからも相當に來て居る。歐米から東洋の學術研究には今までも少數は來てゐたが、西洋に於て漸次東洋文明の價値のわかるにつれ、研究者が益々殖えることは明かである。

地位ある老紳士 とは私がシカゴの共和黨のクラブでの實例である。私が約束の時間に約束の席へいつたが約束の人が來てゐない。そのまゝ一人で待つてゐたら、立派な老紳士がきて、誰を待つてゐるか尋ねる。その名をいふと、それなら直今までゐたから探さうといつて館内を探しまはり、終につれて來てくれた。

純粹米人 とは國初英國から移住した人の子孫である。今の米人の中にはその後歐洲各國の移住民及びその子孫が非常に多くなつてゐるが、しかし米國人の品位を維持

する者は右の純粹米人であり、その多く住んでゐるボストン近邊へ行くと、人間の品が違ふ。米人も亦自分はボストニヤン（ボストン人）だといふことを矜としてゐる。

感情を外へ表さぬ から、餘り飛びついて親切をしませうといふ風は見せぬ。しかし眞に親切な心はもつて居り、殊に一度親しく交ると、後々までもその交際を續ける。

一女教育者 奈良女子高等師範學校の今は一老教授。

佛人 は實に愛嬌たつぷりで、誰にでも飛びつきさうな風を見せる、しかしそれが英人程に永續きするかどうかは疑はれてゐる。

わが國に來遊する 外人の中で、支那人は一時非常に多數ゐた。それが歸國すると、大抵排日になる。これは支那人の性質にもより、その國の政治事情にもよらうが邦人の支那學生待遇の態度についても考へねばならぬ事がある。

第十五課 他國學生

或る國 米國を指していふ。米國ではクリスト教青年會

Y. M. C. A. (Young Men's Christian Association) があり、その本部をニューヨークにおいて全国に支部を有し、本文にかいた世話をする。その長は米國の外務總長よりも勢力をもつてゐるといはれてゐる。

わが國の家 では一家一室全くきつてなく、家族だけが住する様になつて居る。従つて外國の客をおき得る程各人の秘密が保てるやうにできては居ない。又ベッドがない事、便所の差異など大きな障害である。

生活が違ふ といふが、食事の如き、時には日本流の物をまぜて與へ、又は全く日本風にすることもあつた方がよからう。

不合理な要求 フキリツピン人に對して女學生が安りに親しくならうとして、その貞操をさへ賣つた者が多少あつた。これ等は眞に不心得である。何のためにわが女子がかゝる氣持になつたのか、殆ど正氣の沙汰とも思へない。これは畢竟學校で貞操といふ教育が不十分であつたためと思はれる。學校の修身にはたゞ色々の事を通り一遍に物理化學同様に教へこむことを止めて、大切な事には特に力を用ふべき事が、あの事件ですつかりわかつた。わが女學生から、かれ等外人に進んで迫り、そしてその玩弄物となつた女學生について、外國人は、日本の女子程貞操を輕んずる女は少ない。一度貞操を破ると、

どんな虐待をしてもそれを不思議に忍ぶといつて嘲笑してゐた。

第十六課 他國に對する同情

ニューヨーク は米國の東岸で、その中程にあると知れば十分である、歐洲から米國通ひの汽船は大抵こゝへつく。

報恩 と米人のいふのは返報の意味である。邦人の、わが存在の本を他人に求める恩とは性質が違ふ。

東京の友人 故澁澤子爵。

東洋の事變 昭和九年六月頃かと思ふ、印度の北、ネパールに大地震があつた。邦人で義捐金募集があつたが、應ずる者は少なかつた。七年に支那に大洪水があつた。これは時の政治上の關係もあつたが、日本の義捐金を支那で謝絶した。これは支那人の氣分からであるが、東洋全體の災害に對して日本人が今一層注意する必要がある。

第十七課 わが君臣

本課 について特に注意すべきは、元來恩といふ考、自己存在の源が他人にあるといふ根本的思想、これが本になつて、皇室の恩の考も始めてはつきりするのである。然るに明治以降この恩の考を止め、佛教の排斥によつて恩の考の社會的實行を廢し、そして獨り皇室の恩のみを説くとも、そこには背景のない思想の強賣の如き感がある。本書は恩の考を中心とし、出發點とし、その上に皇室の恩を説いた。これがわが歴史上の事實であり、この説き方によらずして皇室の恩を説くと、勢、西洋の君王に對すると同じ考になり易い。本課を教授するには、まづ今まで教へた恩の考を反復し、生徒にその觀念がはつきりしてゐるのを確めて、然る後本課の本體即ち皇室に入るべきである。

民族の長 神武東征に何年かゝつたかは實は不明である。日本書紀に従へば四年目に今の大阪につかれた。古事記によれば、九州に一年、阿岐(安藝)に七年、吉備(岡山縣)に八年で、計十六年となる。今の如く軍艦があつたわけではなく、恐らく木をほつた丸木船であるまいか。それが十隻積くとしても百人以内の兵數であつたらう。兎に角少數の人數で東征せられたに相違ない。その集團が浪速につき、大和に入らんとして長髓彦と衝突し、紀伊に入り舟に乗してその南岸に渡り、それから上陸して

北行し、大和に入られたのである。この海には瀬岬の難航がある。瀬戸内海の潮と黒潮との衝突點で、今でも汽船が相當に動搖する。南紀から大和に入るには連山重疊、今でも歩行に相當に困難である。況んや當時未知の地で、他民族の住居地であるから、それを平けての北上は非常に困難であつたに相違なく、たゞ優秀民族であつたためにその目的を達し得たのであらう。

數多い臣民 平安朝の始に當時の、たしか朝臣かと思ふが、皇別即ち天皇から出た家と、神別即ち天皇以外の名門から出た家、及び蕃別即ち外國人の子孫との統計が姓氏錄に出てゐる。これによると、皇別三三四、神別四〇二、蕃別四四六とある。

忠孝一源 本家の長は親を延長した者、これに對しては孝の延長で盡す。そしてそれが皇室即ち君であらせられるから孝の延長が即ち忠となる。

未開時代 や野蠻時代に於ては一般人民と指揮者との遠がひどい。釋迦の教は今尙十分にはわからぬ位高い。しかしその時の一般人はとも今の民衆の百分の一の知識もなかつたらう。極えらい人は昔も今も餘り能力に相違はないかも知れぬ。しかし普通の人は非常に違ふ。その差によつて文明時代と未開時代とが違ふ。その卓越した者が指揮した族が發展したのである。これは今でも或る度

に於て同様である。

神武天皇 がもしあの様にえらくあらせられないで、大和民族がわが國を統一できなかったとしたら、どういふ國ができたか知れず、われ等が生れたか、どうかもわからず、固より大和民族文化の如き者はできなかつたであらう。これは想像ではなく事實である。この文化、この國威の恩に浴する者は、どうしても神武天皇の恩を知らねばならぬ。この考へ方が今までの歴史でも修身でも十分に教へこまれてゐなかつた。

神宮 の諸役人はよく一般人民の考を理解し、自己の職務の性質を考へ、妄りに傲慢不遜の態度を取つてはならぬ。神宮は決してその關係役人使用人のもではない。かれ等の態度のために少しでも人民が神宮に對して平生からもつてゐた考を變へしめる様な事があつては、それは不忠の極である。

皇室に關する事柄 昔は皇室の事をいふと口が曲るといつた。これは歴史的の國民の氣分であつた。宮内官や内閣員はよくこの氣分を理解して、その態度に於て深く謹慎恐懼し、萬に一も間違があつてはならぬ。皇室は官吏や宮内官だけに國を御任せになつてゐるのではなく國民全體をしてこの國全體をよくさする御考かと拜察する。官吏ばかりが國家の用をなすものとの態度を取つた

天照大御神——忍穗耳命——日子番能邇々藝命——

日子穗々手見命——鶉葦草葦不合尊——神武天皇

即時御踐詐 葉山に於て。

三種神器 誰も知る寶鏡即ち八咫鏡、寶劍即ち草薙劍、及び神璽即ち八坂瓊曲玉である。寶鏡は須佐之男命が天照皇太神に對して種々の惡態をせられたため、太神が天石屋戸に御隠あそばされたので、八百萬神が天安之河原で會議して、鏡を作らせ又八尺句瓊の玉をも作らせ、眞賢木の上枝には玉を、中枝には鏡をかけて禱つた。その鏡が即ち寶鏡、その玉が即ち神璽である(「古事記」)。須佐之男命が出雲國肥上河の邊で櫛名田比賣の命を救ふために八俣遠呂智(大蛇)を殺し、その尾の處から得られた劍が即ち寶劍である(「古事記」)。天照太神の御孫邇々藝命が葦原中國に降らせ給ふ時、太神が瓊、鏡、劍を賜つて「如邦吾前」と仰せられた(「古事記」)。崇神天皇の朝に至つて、同殿安らすと思し召され、別に鏡劍を造らせられ、倭の笠縫邑に天祖の賜つた鏡劍を遷し奉られた(「古語拾遺」)。この御鏡は伊勢神宮の御正體で、御劍は熱田神宮の御正體である(「古事類苑」)。三種の神寶の中神璽は天孫降臨以來の舊寶である。寶劍は壽永年間に平家没落の時海底に沈み、一時畫御坐御劍を以て之に替へ、後又祭主が奉つた神劍に引き替へられた(「古事類苑」)。

り、さる法規を設けておいては皇室に對して恐れ多い。**日本人** と非日本人の別は、皇室が大本家であると思ふ情のあるかないかによつてきまるといつてよい。學校ではよくこの氣持が理解できる様に力を用ひねばならぬ。どうもこれが今の學者にも役人にも腹の底まで徹してゐない者があるのでないかと危ぶまれる。又この考を國民一般に徹せしめる様に、役人等に於て考ふべき方法は多少あらう。とにかく日本人とは何かとの明瞭な觀念を各生徒にもたさねばならぬ。

第十八課 皇位

天照大神の神勅 大神御子忍穗耳命をこの國に降さんとし給うたが、まづ國勢を見せしめんとて、種々の使を下されたが、大國主命が全土を治めて居り、中々に勢力が強かつたので、すぐ御降しの御都合には參らず、やがて尊に御子彦火瓊杵尊が御生れになつたので、大神は天孫を御降しになる時、この神勅を下された。

天祖 即ち天照大神。皇祖といへば神武天皇の事となつてゐる。しかしこの用語には古來多少の異見もある。序

劍璽渡御

御父陛下崩せられて、皇室典範第十條の定むる所にしたがひ、即時萬世一系の寶祚を踐み給へる新天皇陛下には、まづ登極令第一ノ條により踐祚の式を行はせ給ふため、劍璽渡御の儀を大行天皇崩御の御邸において午前三時十五分より擧げさせ給ふ。測らずも天地諒闇に際會して、心も空に、早急葉山に馳せ集まつた大勳位、首相以下各國務大臣、樞府議長等、親任の文武臣僚各元帥等は式部官の案内に新陛下の便殿へ參集す。諸員通常服姿にて端然整列して出御を御待ち申あける程もなく、我第百二十四代の寶祚を踐み給へる新天皇陛下には侍従長・侍従武官長・宮相以下臣僚を従へ、式部長官の御先導により靜かに出御あらせられた。龍顔いと厳肅に正面玉座に上らせられた。御年二十六歳。各皇族ことごとく御侍立あり。程なく式部次長、内大臣、續いて劍璽は侍従奉持、國璽は松井内大臣秘書官奉持、玉座前に參進した。こゝに内大臣は諸員最敬禮中に侍従の捧ぐる劍璽を拜受し、御前の案上に奉安、更に國璽御璽を劍璽と同じく案上に置き奉る。こゝに劍璽渡御の儀は終らせらる。(東京朝日縮刷版)

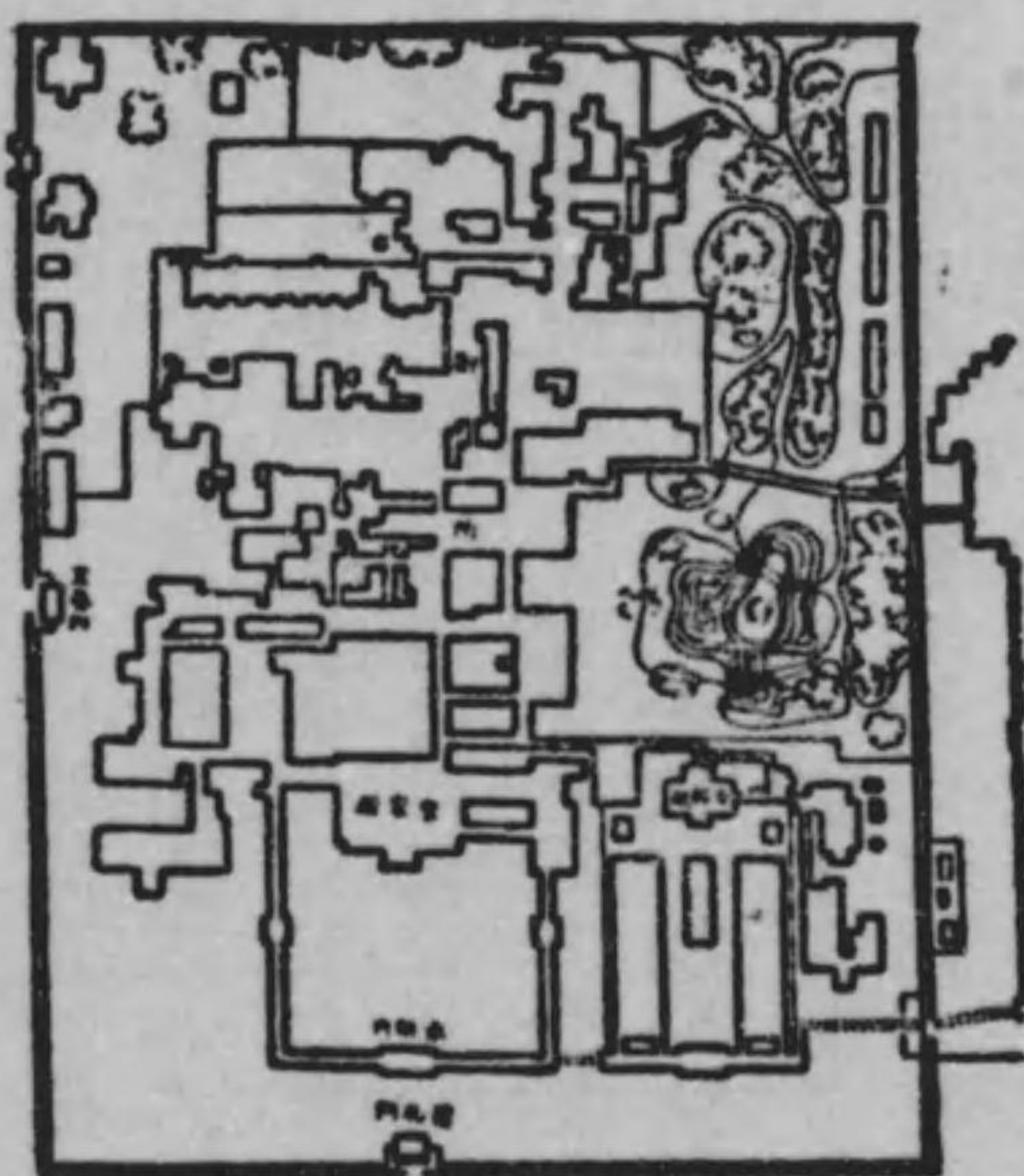
朝見の御儀 天皇陛下には昭和元年十二月二十八日もつて三百の臣僚を宮中正殿に召給ひ、午前十時三十分登極第一の大儀たる朝見の御儀を擧げさせらる。この朝

新帝陛下には宮中正殿に出御、親しく勅語を賜ひ、大統御繼承の旨を宣布せられた。この日天皇皇后兩陛下には十時赤坂離宮より宮城に入御、宮中豊明殿においてまづ各皇族および宮内高官に謁を賜はつた。この日歴史的榮典參列の光榮に浴した東郷大勳位、若槻首相、倉富樞相、元帥、國務大臣、樞密顧問官、貴衆兩院議長、勳一等待以上の者並びに同夫人、その他合せて凡三百名は大禮服正装又は通常禮装、婦人は中禮服にて十時までに續々參内、朝集所に參集、やがて式部官の前導にて正殿に參進、威儀を整へて本位につけば、正に十時半式部官警蹕を稱へ、式部長官と一木官相の前行にて天皇陛下には正殿に向つて右側の御とびら口よりぞ出御あらせらる。侍從御劍御璽を捧持して陛下の御後に從ひ奉り、侍從長以下各侍從、武官長以下各武官その後候し、その後より各皇族供奉させ給ふ。

かくて新帝陛下には大元帥の御正装で階上向つて左の玉座に着御遊ばされるれば、侍從は玉座の右左にそれぞれ劍璽を捧じて侍立。次いで向つて右方の御とびら口は開かれて皇后陛下には皇后宮大夫の前行にて出御あらせられた。やがて新帝陛下には立御あらせられ、勅語を御朗讀遊ばされた。諸員最敬禮中に終らせらるれば首相は玉座程近く三步を參進こゝに御奉答文を奏し奉つた。十一

時五分にして式御終了、兩陛下御退出。(東京朝日新聞) 諒闇 皇室服喪令によれば、第十九條 天皇(が)大行天皇(即ち崩御された先帝)、太皇太后、皇太后、皇后の喪に丁るときは大喪とす。第二十條 天皇は……大行天皇及皇太后の爲には一年の喪を服し、太皇太后の爲には百五十日の喪を服す。第二十一條 大行天皇及皇太后の爲にする大喪を諒闇とす皇妣たる太皇太后の爲にする大喪亦同じ

京都御所の圖 この圖は全部が御所であるが、御大禮を行はせられる所である紫宸殿及び賢所(即ち寶鏡)奉安の春興殿を示すの目的とした。御所とかいたのは筆生の誤で、あの邊が大奥である。即ち陛下御駐蹕中に御駐まりになる處である。春興殿の下即ち南の方に細長い建物があるが、あれは御大禮の時のみ建つたのであつて、平時は取拂はれる。尙序を以ていふが、紫宸殿の左上に細長い部分がある。あれが清涼



南方外陣との境に御幌を垂る。内陣の中央に御座の御疊を、其の東方に皇后宮御座の御疊を鋪き、西に劍璽案を置く。南廂の四面には御簾を懸け、左右兩側に薄疊を布き、右方は皇族及王公族の御著座とし、左方は皇族妃、王族妃の御著座とする。天皇陛下には、當日早且御起床、御潔齋等の御ことありて、今日の吉き日を以て御一代無二の大典を擧げさせ給はんとす。八時三十分御學問所に出御あり、乃ち侍從大禮使事務囑託奉仕、御東帶帛御袍を供し奉る。訖りて御手水・御笏を供し、九時四十六分御學問所より宣陽殿に出御あらせられ、十時四分春興殿に出御、寶劍を御前に神璽を御後にして、天祖に謁し給ふ。まづ御座の東方に著御あらせらるれば、御裾の女官、南廂外陣の東に退下し、親王妃以下の供奉員、各々南廂左方の本位に就く。尋いで掌典長御玉串を捧げて内陣に參入、之を聖上に奉れば、聖上執らせ給ひて、親しく御拜禮あらせらる。時に十時十二分。鐘一下して諸員起立訖りて御告文を奏せさせ給ふ。

殿で、大昔には天皇の御座所であつたが、今は何にも御用ひにならぬ。御所に御入遊ばされるのは天皇陛下皇后陛下のみであつて、皇太后がもし京都に御出の時は大嘗祭の建つ傍の大宮御所に御入りになり、皇太子が御出の時は、二條離宮(昔の二條城)に御入りになる。賢所御移り及賢所御大前の儀 御鏡はその奉安の場處によつて賢所と申し、御鏡などとはいはぬ。昭和三年十一月六日今上陛下御大禮のため宮城發御に先ち、温明殿賢所御前に於て御祭典を行はせられた。御祭典後掌典長は下僚を率ゐて内陣に進み、移御の準備を整ふ。六時三十分、駕輿丁八瀬の童子十七名の手舁に依りて、御羽車を温明殿の南階に着すれば、簀子に候する掌典補等之を受け、昇ぎて外陣に安く。掌典長部下を隨へて、諸員敬禮の間に、賢所を御羽車に移し奉る。掌典補之を奉昇して簀子に到れば、駕輿丁之を受け奉り、茲に賢所出御あらせらる。此の時官殿に在らせらるゝ天皇皇后兩陛下には、侍臣の奏上により、内庭に下り立たせ給ふ。之を庭上下御の儀といふ。賢所天降りますに際し、兩陛下も亦御親ら地上に下らせらる。畏敬の意を表し給ふのである。御羽車は陛下御入浴の時同列にて御移りになり、京都御所内春興殿に入らせ給ふ。さて賢所大前の御儀を行はせらるべき日には、春興殿内陣の左右兩側に御簾、

挂卷 母恐俊賢所乃大前爾恐美恐母白左高天原爾事始米遠
天皇乃御世御世彌高 爾彌廣 爾傳給倍 天津高御座乃業平
皇祖考乃彌張利張利彌進米進米神奈賀良天下 乎調給比
又皇考先朝乃御心乎 御心止氏皇風 乎異域爾及志給比御
名寡德身乎以氏比乃大御業乎承繼今 伎日乃生日乃足日爾

即位禮平布止大前平齋伎祭留事乎平久良氣安良氣聞食
志氏天津日嗣乎萬千秋乃長秋爾大八洲豐葦原乃瑞穗國乎
安國止平良氣知食左米給倍白須事乎聞食止恐美恐母白須

訖りて皇后陛下、御拜禮。續いて皇族以下供奉諸員一齊に再拜す。十時二十六分入御。(昭和典禮要録)

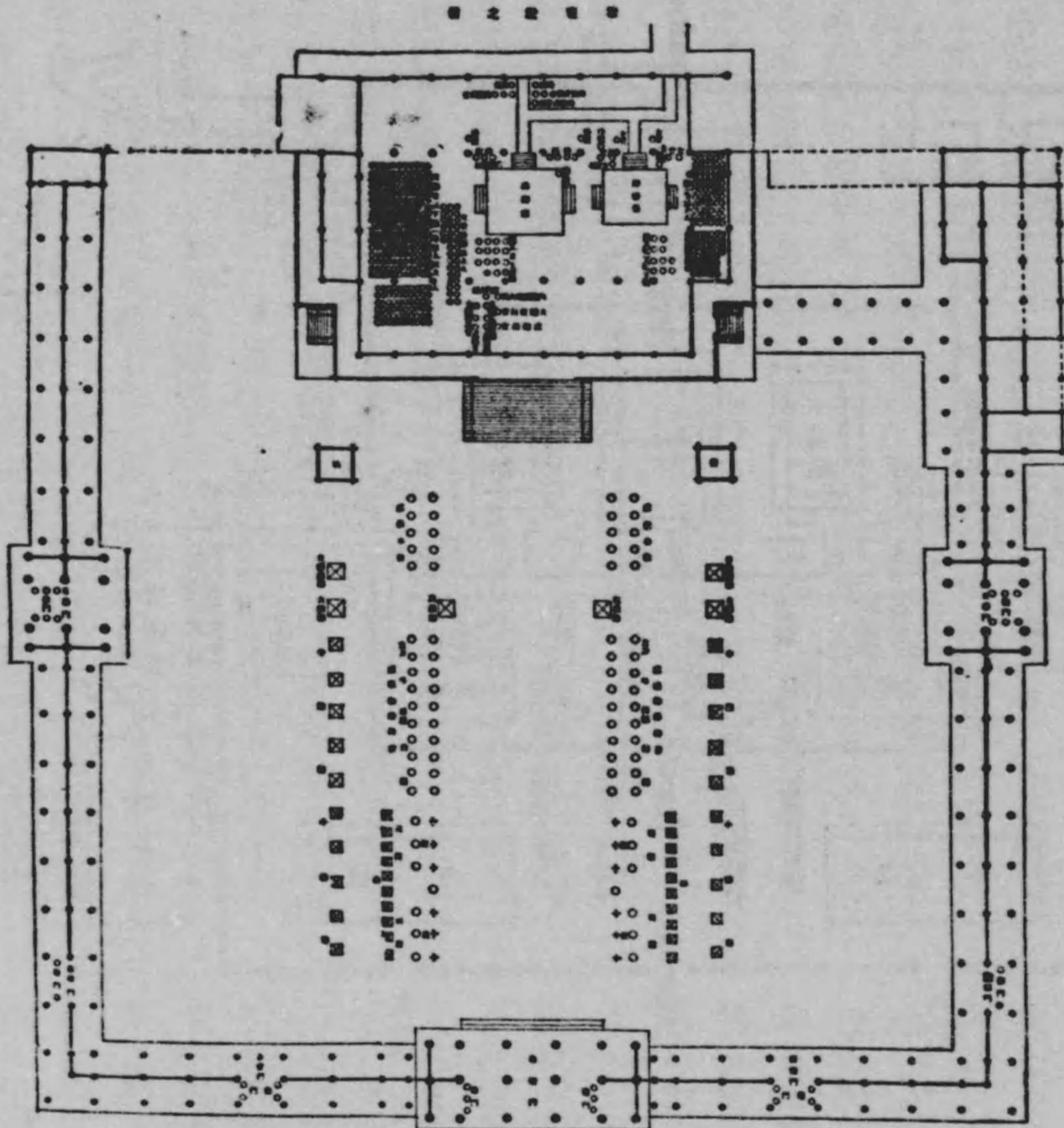
紫宸殿の御儀 午後二時二十五分雅仁親王以下男子の殿下は北廂より大使・使節の前を過ぎて御參進、高御座の下正面約三分一の點より西寄に、四列に東面して侍立せらる。同時に、雅仁親王妃以下女子の殿下には、御帳臺の東側に沿ひて御參進、御帳臺の下正面約四分一の點より東方に三列に西面して侍立せらる。天皇陛下には北階より高御座に昇御、侍從寶劍神璽を御帳内の案上に奉安す。續いて皇后陛下御帳臺に昇御あらせらる。尋いで内大臣は高御座御帳外東北隅に候し、其の他の供奉員壇下後方に侍立す。鉦二下すれば諸員最敬禮を行ふ。此の時天皇陛下には福頼の御笏を端し給ひ、立纓の御冠、黄櫨染御袍の聖姿今更に仰ぎ奉るも尊し。内閣總理大臣は殿の西階を降り橋樹の北を経て南階の下に至り、北面して立つ。内大臣御前に進み、畏みて勅語書を奉る。鼓一下諸員齊しく頭を垂る。天皇陛下、茲に勅語を宣らせ給ふ。朕惟フニ我カ皇祖皇宗惟神ノ大道ニ遵ヒ天業ヲ經綸シ

萬世不易ノ丕基ヲ肇メ一系無窮ノ永祚ヲ傳ヘ以テ朕カ躬ニ速ヘリ朕祖宗ノ威靈ヲ頼リ敬ミテ大統ヲ承ケ恭シク神器ヲ奉シ茲ニ即位ノ禮ヲ行ヒ昭ニ爾有衆ニ誥ク皇祖皇宗國ヲ建テ民ニ臨ムヤ國ヲ以テ家ト爲シ民ヲ視ルコト子ノ如シ列聖相承ケテ仁恕ノ化下ニ洽ク兆民相率キテ敬忠ノ俗上ニ奉シ上下感孚シ君民體ヲ一ニスレ我カ國體ノ精華ニシテ當ニ天地ト竝ヒ存スヘキ所ナリ

皇祖考古今ニ鑒ミテ維新ノ鴻圖ヲ闢キ中外ニ徵シテ立憲ノ遠猷ヲ敷キ文ヲ經トシ武ヲ緯トシ以テ曠世ノ大業ヲ建ツ皇考先朝ノ宏謨ヲ紹繼シ中興ノ丕績ヲ恢弘シ以テ皇風ヲ宇内ニ宣フ朕寡薄ヲ以テ忝ク遺緒ヲ嗣キ祖宗ノ擁護ト億兆ノ翼戴トニ頼リ以テ天職ヲ治メ墜スコト無ク愆ツコト無カラムコトヲ庶幾フ朕内ハ則チ教化ヲ醇厚ニシ愈民心ノ和會ヲ致シ益國運ノ隆昌ヲ進メムコトヲ念ヒ外ハ則チ國交ヲ親善ニシ永ク世界ノ平和ヲ保チ普ク人類ノ福祉ヲ益サムコトヲ冀フ爾有衆其レ心ヲ協ヘ力ヲ戮セ私ヲ忘レ公ニ奉シ以テ朕カ志ヲ弼成シ朕ヲシテ祖宗作述ノ遺烈ヲ揚ケ以テ祖宗神靈ノ降鑒ニ對フルコトヲ得シメヨ勅語訖れば、内閣總理大臣南階を昇り、南榮の下に直立し、笏を正して再拜、恭しく壽詞を奏す。奏し了りて

階を降り、萬歲旛の前面、中央に至り北面して立ち、萬歲を三稱す。諸臣皆之に和す。

みて高御座御帳を垂る。此の時鉦一下諸員敬禮す。天皇陛下劍璽と俱に高御座北階より下御。此の時式部官警蹕を稱ふ。即ち鉦一下、諸員敬禮の裡に入御あらせらる。(昭和典禮要録)による)



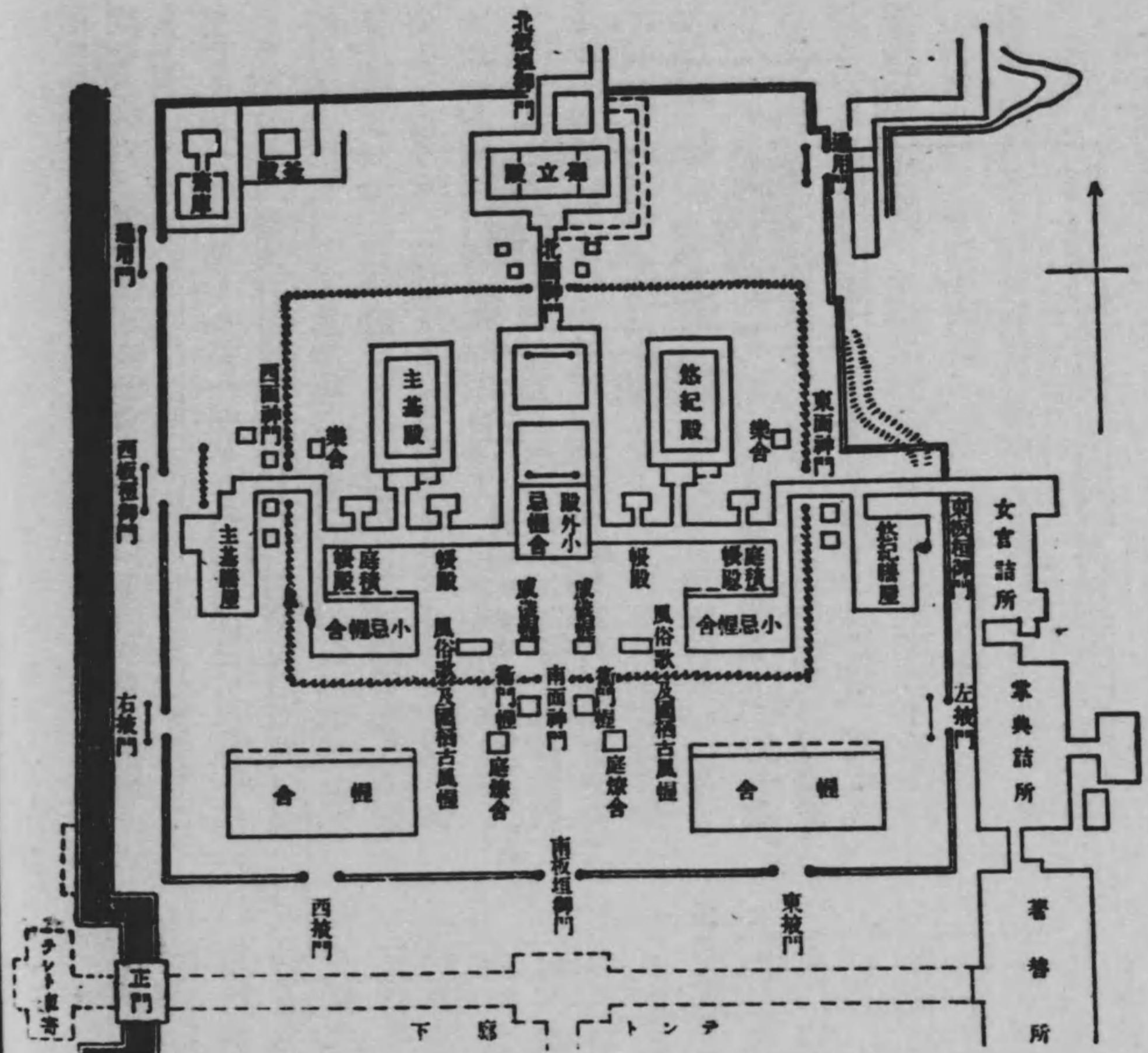
内閣總理大臣復び西階を昇りて原位に就けば、侍從進

嘗祭の記事によつて伺ふべきである。

紫宸殿之儀の圖 この圖により、高御座が殿の正中にあることに注意すべきである。天津日嗣の御位に御つきになるのは天皇陛下御一人である事は申すまでもない。この點に於てもし聊でも心得違があつては、それはわが國體を辨へぬものである。女學生には殊によく教へこまねばならぬ。

第十九課 大嘗祭

天神地祇 天神とは天祖と共に天降りし大和民族、地祇とは以前よりこの地に住したる民族(又はその大人物)と考へてよからう。
請饗 下々の習俗に直していへば、貴客を招いて共に會食する事にも當らうか。しかしたゞの會食などと心得てはならぬ事は、次の大嘗祭の記事によつて伺ふべきである。



大嘗宮の造營 は昭和三年八月一日より起工し、十一月十日竣工す。仙洞御所正門内北
方松蒼く砂清き處、方六十間を劃し、その東
北隅 東西約八間 の地を除き、繞らすに高
九尺の板垣を以てし、南面中央に南板垣御門
其の東寄及西寄に東掖門・西掖門、東面南寄
に左掖門、北寄に通用門、西面中央に西板垣
御門、南寄に右掖門、北寄に通用門を開く。
何れも神明鳥居造なり。東面各門内及西面各
門外には、高さ九尺の蕃塀を樹つ。これを大
宮神域の外廓となす。板垣の内、更に東西四
十間南北三十間を劃し、萩・躑躅等取交ぜた
る高六尺五寸の柴垣を繞らす。この中こそ畏
くも大嘗の大祀を親祭あらせらるべき神域に
して、更にその中央を南北に柴垣を設けて二
分し、東を悠紀院、西を主基院となす。四面の
柴垣及中垣の中央には、黒木造、櫨の皮附の
まゝなる高八尺鳥居形の神門を設け、中垣の
神門を除くの外、何れも扉を附す。東・西面
兩神門外に各々屏籬と呼ぶ高六尺五寸の目隠
の柴垣を結び、中垣の南北兩端に更に丁字形

に柴垣を作る。柴垣中垣及屏籬には外面に「椎の和惠」として處々に椎の葉附の枝に紙垂懸けたるを挿む。悠紀・主基兩院の各中央北寄に悠紀殿と主基殿とあり、その廣さ各々東西二丈七尺南北四丈五尺。これ皇祖を始め奉り天神地祇に御饌・御酒を親供し給ふ處、何れも盡く黒木造、柱は皮附の櫨を用ふ。承塵・壁及扉は近江表を張り、地には阿都賀草てふ生茅を敷き、床は竹を以てし、その上には近江表を敷敷す。各殿の四周には竹の簀子を繞らす。寔に簡古素樸にして、神州の古俗を現はし、太古のままの宮居なり。萱葺の屋根の棟上高く、松の黒木の千木・勝男木、緑の松の樹の間より、天高く仰がる。悠紀殿の千木は、上端を水平に切れる所謂内削、下端を垂直に切れる所謂外削に作れるも、主基殿のは正に之に反して造れり。破風の拜も亦兩殿相反し、悠紀殿は西方を上とし、主基殿は東方を上とせるが、その他は兩殿ともその様式全く相等しく、何れも殿内を二室に分ち、北を内陣、南を外陣とす。内陣は方二丈七尺、正南一丈一尺を入口とし、外陣は東西二丈七尺、南北一丈八尺、南方の西寄を入口とし、扉を附し、簀子に階を設く。又西方南寄に扉を附し、簀子を隔てて階に通ず。(昭和大禮要録) 大嘗宮の儀 十一月十四日午後四時二十五分天皇皇后兩陛下には御同列にて鹵簿を整へさせられ、頓宮なる大

宮御所に行幸啓あらせられ、天皇陛下には大忌御湯の御儀あり、賢所大前の儀に召させ給へると同じく、帛の御袍を召させ給ひ、六時十分頓宮より廻立殿に渡御あらせられ、中央の御間なる御座に著御。尋いで小忌御湯の儀あり。かくて生絹の御祭服に召し替へさせ給ふ。御祭服は御神事の御服中、最も神聖なるものとも申し奉るべく、御冠は御幘、御袍は御齋衣、御下襲・御祖・御單・御表袴・御大口・御組帯・御石帯・御襪・御挿鞋・御檜扇・御笏・御帖紙より成る。御祭服を召させ給へば、侍從御手水を、次に他の侍從御笏を供し奉る。天皇陛下御祭服神神しく、廻立殿より悠紀殿へと玉歩を移させ給ふ。幄舎の諸員一齊に起立。式部長官、宮内大臣前行し、侍從左右に脂燭を乗り御路を照らして進む。侍從の捧持する寶劍・神璽の御後に、陛下には御機のまま葉薦の上に玉歩を運ばせ給ふ。一侍從御裾に候し、他の侍從御菅蓋の長柄を執りて、斜御後より翳し奉る。御菅蓋は菅にて一文字形に作り、頭部に彩色したる鳳凰あり。長柄はその下に續き、又二條の御綱を垂れ、侍從二人御左右よりこれを張る。玉歩を進ませらるるに従ひ、侍從二人寶劍の前に位置し、膝行して剌廊の御路、布單の上に葉薦を舒べ、侍從二人御菅蓋の後に在りてこれを巻く。進御に隨ひて舒ぶれば隨ひて巻き、至尊御一人のみ葉薦の上を進

ませらるるなり。雍仁親王殿下を始め皇族・王公族各殿下、内閣總理大臣・樞密院議長・各國務大臣・内大臣・大禮使長官何れも小忌衣を加へたる束帯又は大禮服・正装にて供奉す。仰ぎて、闇の中、御前と御後と脂燭の火影二つに浮き出でたるが如き黒木柱の長廊を、廻立殿より北面神門、中垣の御門を経て悠紀殿へと、神さびたる御列の静かに進ませらる。

既にして御列悠紀殿前に到るや、寶劍・神璽奉仕の侍従まづ南階を昇りて外陣に参入し、劍璽を案上に奉安して、西簀子に退き候す。陛下南階を昇らせられ外陣の御座に著御あらせらる。

柴垣内にて大禮使參與官の率ゐる樂官國栖の古風を奏す。

かしのふによくすをつくりよくすにかみしおほみき
うまらにきこしもちをせまろがち

笛拍子に合せて二度繰返し歌へる謡聲、神苑のしじまを破り松の木の間より洩れ聞ゆ。「國栖の古風」といふは、大嘗祭豊明の節會に吉野の國栖が都に上り、その國風を奏したる風俗を傳へしものにて、その昔應神天皇の吉野宮に行幸あらせられし時、國栖は大御酒を醸し獻りて歌ひしに始ると傳ふ。續いて悠紀地方長官の率ゐる樂官悠紀地方の風俗歌を奏す。

たみのわざすすめますよといほはたのおとぞにぎは
ふながはまのさと

笛・箏・琴につれて節面白く歌ふ。

これより本殿南庭の廻廊に、神饌を行立す。悠紀の膳屋より悠紀殿へ、闇に浮く一筋の廊下に、掌典補二人の左右に乗る脂燭の火の闇を縫ひてゆらめけば、掌典及び女官など長十間に餘れる神代ながらの行列、黒木の柱の間を縫ひて静かに進む。行立進みて悠紀殿南階の下に到るや、乗燭の掌典補二人、各々東西兩側に分候し、掌典一人は南階の下に進みて、「オーシー」と警蹕を稱ふれば、諸員一齊に敬禮し、樂師神樂歌を奏し始む。この時天皇陛下には外陣より内陣の御座に進御あらせらる。掌典長掌典次長外陣に参入して奉侍し、侍従長外陣に参入して東方に候す。女官内に参内入して御手水を供し奉り、終れば、これより此の大祀中最も森嚴なりと申し奉るべき神饌御親供の儀に入る。晩秋の夜氣身に迫るの時、陛下には唯御一人内陣の中、半帖のみを敷かれたる御座の上に儼然として端座あらせらる。女官神饌を陛下に供し奉れば、畏くも神前に御親供あらせらる。御親供訖らせ給へば、御拜禮の後御告文を奏し給ふ。時に八時四十分。次に御直會の儀に移る。即ち神に捧げ給へると御同様の御食・御酒を陛下御躬らきこしめし給ふ。此等の御食・御

酒は悠紀齊田の齊米もて造られなり。

訖りて女官神饌を撤下し、次いで御手水の儀あり。

陛下には内陣の御座に御端坐あらせられ、長くも二時間半の長きに亘りて、皇祖、天神、地祇を饗請し給ふ。御儀愈々訖れば、諸員敬禮の裡に悠紀殿南階を降らせ給ひ、九時二十三分神神しき御列前の如く、廻立殿に還御。此に悠紀殿供饌の儀訖る。〔昭和典禮要録〕

第二十課 儀式

引しまる。ことが今の學校には極めて少ない。小學校で子供本位などといつて、謹嚴の態度を取らせる事が少なくなり、中等學校がそれを引きついで同様にすると、終に謹嚴靜肅な氣分を養ふ機會がなくなる。中等學校の校長はよくこの邊に心を用ひ、自分が嚴肅な態度を心の底にもつて、それで式全體が感化せられるやうにせねばならぬ。もし式が嚴肅に行かぬならば、その點だけで校長を止めるべきものであらう。これは文部省で最も注意すべき點の一つである。

何年級の生徒 自分、自級、自組が全體を造つてゐる一要素であるとの感、これは各自の覺悟を定めるに最も

大切な氣分である。

一生の何分の一 が減つたといふ感じは、一生を見
廻す氣持を起す。

卷三

編纂趣旨

本巻に於ては、まづこの年級の頃に始まる青年期の新變化について注意を與へた。その注意事項の始には、身體に關することを與へた。身體に關する注意でも、西洋風のはとかく物質的の見方に立脚し、心によつて身體を守ることを忘れる傾がある。わが國にもかゝる見方が可なり強く行はれて來たが、物質は物質ではよくならぬ。眞の強健法は、東洋風に心の持ち方に基礎をおかねばならぬ。本書はその點に重く注意を向けた。

次に青年期の心の持ち方として、從來わが國に於て尊んで來た徳目を説いた。それはたゞの徳目の列擧ではなく、現代の青年期女子が最も陥り易い欠點を矯正するのに重きをおいた。一の徳でも、その説き方によつては日本的ともなり、西洋風ともなる。西洋に於て行はれる通りの氣持で、西洋と同じ徳を形の上に於て行はしめるのは眞のわが國民の修身の道ではない。たとひ外に表はれた行の形は同じであるとしても、それを行ふ心持は東西に大差があり、學校の修身はそれに注意せねばならぬ。然らずば生徒の胸にこたへしめることはできぬ。

かく日本の徳目を説いて、更に日本人とはいかなるものか、いかにすれば眞の日本人たり得るかを説き、歴史の尊重に注意を向け、その歴史によつて確立したわが文化を説き、わが文化の尊重からして愛國心に説き及んだ。しかし愛國とはわが國の立派さに於ることではない。この國の文化を進めるには、世界の長處をも謙遜に取り入れねばならぬ。他人の人格をも尊重せねばならぬ。これが本巻の大旨である。

第一課 一生の階段

本課の目的 第三年級になると、月經の始まる頃であり、性の意識が次第に始まる頃であるから、その心身上の注意を與へるのを目的としてあるが、しかし生徒に對してそれを明らかに説き得ないので、極めて抽象的の言語を用ひた個處が多い。性の意識のないものに性の注意を與へるのは、反つて他の惡果を生ずるから、この抽象的の態度は益々必要となる。教師は生徒間に兩様の階級の者のあることを考に入れて、兩方に有益な様に考へねばなるまい。

厄年 昔は七歳、十六歳、二十五歳、三十四歳、四十二

歳、五十二歳、六十一歳を厄年として一年間謹慎した〔和漢三才圖繪〕。その後男女の厄年が別となり、男は二十五歳、四十二歳、六十一歳、女子は十九歳、三十三歳、三十七歳を厄年とし、その中、男の四十二歳、女の三十三歳を大厄とした。固より大した根據はなく、四十二は死にを忌み、三十三はさんさんを忌んだのであらう。たゞ青年期から成年期に移る時に身體に變化が起り、その變化に應じ得ないために病氣になる事もあらう。固より何歳と定つたわけではない。女子は四十歳代で月經が休止し、男子は六十歳代で生殖能力が著しく減少する。殊に五十出などと稱する一種の神経痛の病氣が男女を問はず、五六十歳頃に往々起ることがあり、それが如何

なる治療でも効なく、そして約一ケ年で自然に治る。女子に厄年などいふ事を教へて恐怖心を起さしてはならぬ。寧ろその反對に、何等恐るべき事はないと教へる方がよからう。

無理な仕事 の中には勿論無理な學課の壓迫を含む。今の學校に於て、日々生徒に何程の時間が復修に必要、復習に必要と考へて課業する事はどこにもできてゐない。しかしそれが如何に生徒の心身を壓迫し、國民の健康を害し居るかは教育者に於て深く考へねばならぬことである。況や競技などと稱し、營利を主とする新聞紙の煽動などに乗つて過敏な運動を強ひる如きは、最も國民健康に對する不忠實な態度である。營利を主とする新聞の立場から何を企てようとも、教育者には國民の健康に對する固い信念がなくてはならぬ。競技が健康上いかなる結果あるかを考へず、漫に生徒の名譽心を刺戟する如きは、人の子を預る者の態度ではあるまい。

苦慮煩悶 これも過激な學習から起ることが頗る多い。教師が教室で、できのわるい生徒を輕んじ賤む如き態度をとつては、神経過敏な年齢の女子の苦悶を増すことは殊に強からう。これは男子教師と同様か、更に多く女教師に於て注意せねばならぬことである。

今までなかつた氣持 男性に對する注意力、その準備

動作を見るべき、わが身なりに對する注意の類。その外男女共通なのは、自分をえらく思つたり、人を賤んだり、人を妬んだりする事もこの頃の一特性である。

抑へねばならぬ慾望 他性に對するあくがれの類。それに附帯した種々の慾望。これについては現在米國の不良映畫が可なり幼い時からして性の知識を與へ、又不謹慎な文藝類が自由にそれを説く事などがあるために、性に對する極めて曖昧な慾望は可なり小さい時からもつてゐる子供の多いことに注意しなければならぬ。私の學校の一生徒が或女學校の生徒から、今晚一夜中思ふ存分にあなたと寝て見たい云々の手紙を受けとつた。それを調べて見ると、十五歳高等女學校三年級の生徒であつた。寢るといふ事の内容を十分知つてか知らないでかわからぬが、かゝる知識をもつてゐることは不思議な程である。これは決して右の一女生徒に限つてゐるとは見難い。

第二課 屈惑

屈惑 は現時屈托とかくが、クツワクを音便でクツタクと讀むために、いつの頃にか字が變つて來たのである。屈惑は佛語で古くから佛書にある。托の字では意味が眞

にわからぬ。

栄養品 を妄りに主張するのは物質思想の一結果である。強ひて栄養品ときめなくとも、この民族が昔から取つて来た物を偏食せず取ればそれで大過はあるまい。卵や肉の類を餘り多く取ると、この年齢の性的欲望を刺戟することは外國の學者さへ定論としてゐる。事實外國の子供には邦人が思ふ程多くの肉などを與へはせぬ。**屈惑をする** と神経の働きが鈍くなり、そのために各機關に十分に動脈血がまはらなくなることさへ常である。

冷水摩擦 第一卷第十七課備考参照。

静座 とは兩足の親指を重ね、脊柱をまっ直にし、顎を後へ引き目にし、兩手を組んで腿の上のせ、何も考へないで自分の呼吸を數へる氣持になること。決して深呼吸をすることではないが、靜かに呼吸をすると、自然に腹で呼吸する様になる。健康になる術の一として、鼻の先に紙をおいても、それが動くか動かぬか、わからぬ程度に呼吸をすることがある。これ等は西洋の衛生法ではいはぬ事であるが、眞の健康術は東洋にある。

すべきだけの勉強 日々歸つて、學校で教はつた事が眞にわかつてゐるか否かを調べ、わからぬ事をなくしておけば、新しい復習にも大した力や時間があるわけが

カント Immanuel Kant, 1724—1804 ドイツの大哲學者。當時の英國哲學と大陸の唯理説とを綜合して歐洲の哲學を一新した。八十歳の高齡で、終身結婚せず。時間を守ることを極めて嚴密なので、近邊の人はカントの散歩して來るのを見て時を知つたといはれてゐる。

第三課 忠 實

忠實 とは、すべきだけ、できるだけする氣持。

十分に念を入れ これが今の學校教育では著しく欠乏してゐます。それは無理な課業を與へるために、生徒は十分に念を入れる暇がない。學校でしかられぬだけの形がどうかできれば、それで學校へ飛んで行く。教師も多數の生徒を預つてゐるため、各生徒が果して十分念入りに勉強仕事、したかどうかを調べることができぬ。それが集つて、十分念入といふことを一般生徒になくする。畢竟學校が國民を悪くする實果を生じてゐる。こゝに學校制度大變革の必要がある。

重ねて手のかゝらぬ様 人にナイフを渡す。向の人がもちよいやうにして出せば、それで手はかゝらぬ。逆まに出すと、向の人が受取つてから持ち直さねばならぬ。

ない。尤もそれは教師の教授が全生徒がはつきりわかる様にできて居り、本の程度が順當に進む場合の事である。**競技の選手** 一例でいへば、わが國で水泳の世界的選手といはれる人々(男女)の體格をレントゲンにとつて見た結果を見るに、いづれも足の或る部分の骨が變化して居り、最も有名な女生徒などは、背の肋骨がはづれて他の骨の上にかゝつてゐる。本人は知らぬが、それが後になつて故障を起さぬはずがない。何種の競技でも、選手となつて大活動をした者には、まづ正常の體格はない。これはレントゲンの結果である。

心配 とは徒らにくよくよ思つて心を痛めることである。過去の事について心を痛めても何の効もないことは、誰が考へてもわかる。間違つた事をしたら、その起つた原因、それをする様になつて心の向き方を調べ、それを如何にすれば去り得るか考へねばならぬ。そして再びその間違をしなかつたら、それで自分が一步でもえらくなるのである。たゞ心配しても、少しの改良も進歩もできぬ。

うるはしい氣持 残念な事をした、惜しい事をした、なぜもう少し前に氣がつかなんだかと思つて、丁度別を惜む様な氣持になるのは、氣持としてはうるはしい。男にも女にもかゝるうるはしい處はあつてほしい。

即ち重ねて手がかゝる。

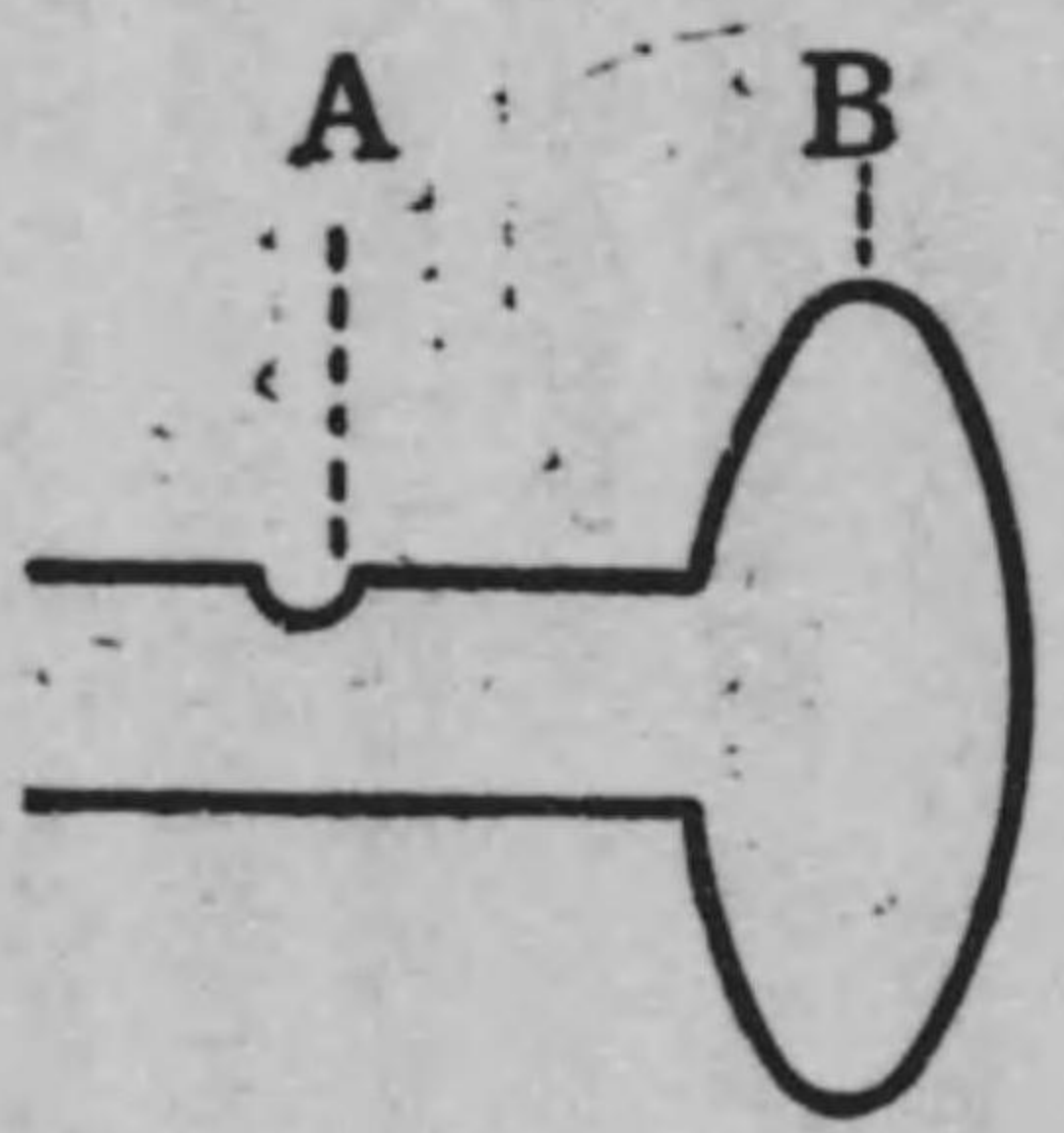
醫師の不忠實 のために人の健康を悪くし、果ては命を取ることは可なり多からうが、それを事後に證明することも猶困難であり、刑法に誤つた處置をした者を罰する法文がないので、不忠實な醫者でもその位地を保ち得る。

第四課 つゞまやか

わが務 だからする。人のためにするのではない。何でも仕事をするには常にこの心がなくてはならぬ。

戸の引手

がいたむことは實にひどい。その製り方のわるいによることが多い。



引手のAの處に少し凹みをこさへてあると、その上から鉄をさしこんでしめればよいのに、その凹みをつけないのが多い。そのために、上からさしこんだ鉄がたゞ横軸の上につてゐるばかりだから、少し使ふと、鉄がすぐゆるんでしまふ。圖のBは外に出てゐる引手であり、Aの邊はす

べて戸の木の内にはいつてゐて、見えない部分である。
コンクリート はセメント一、砂二、砂利三とわかり
易いやうにきめてある。その分量が違ふとよくできぬ。
もし砂が泥がまじつてあつたり、砂利に泥などがついて
ゐると、コンクリートのできがわるい。造つてすぐひど
が入るのはそのためが多い。

練り方 右三種が十分に混り合はぬとよくない。

人の見えぬ處 私の學校を建てた時は清水組といふ有
名な請負會社の手になつたのであるが、屋根の水を流す
戸桶が屋根から地面まで来て居り、その地面に接する處
から、土管で地中を流れて數間先にマンホールといふ四
角な水溜があり、そこへ水が一應溜るはずである。然る
に戸桶が地面に入る處からそのマンホールまでの間には
土管が入れてなかつた。見えぬと思つて手を抜くのはわ
が國の請負師には可なり多い。清水組といへば日本で一
流の大會社であることに注意せねばならぬ。

椽の下の力持 椽の下で何程大力を出しても、上の人
にはわからぬ。そのために椽の下の力持といふ語をムダ
仕事といふ意味にとる人が可なり多いが、それは甚だし
い心得違である。世の中に椽の下の力持程尊いことはな
い。舞臺の上で役者は躍る。しかし役者を躍らすために
は舞臺の後や下に無数の人が働いてゐる。その人こそ役

自由を我慢しても人に自由を與へる所にある。

あの人なればこそ と、こそを人につけてさへ居れば
わが心は常に楽しい。自分が人から何か受ける権利があ
ると思へば、何程幸福になつても満足はできぬ。自分は本
來無一物のもの、人の恩によればこそ生きて行ける、樂
んで行けると、常にこそを人につけるのは、わが心を安
怡にする本である。これは今の女子の最も注意すべき一
の點である。

或る病院 これは須磨の呼吸病患者専門の病院。患者
とあるのは神戸市長や東京高等商業學校長をした坪野平
太郎氏。坪野氏は若い時から呼吸器を痛め、可なり重患に
陥つたが、精神修養でそれを抑へ、七十餘歳の長命を得
た。

知らぬ他人へ親切 これは本書には度々出す。邦人の
これに對する態度が餘りによくはないから、どうでもして
よくしたいから。

第六課 喜ばすよりよくする

老婆親切 とは佛教によく使ふ言葉であるが、老婆は孫
の可愛さに、すまじい親切までしてやつて、そしてその

者より何倍尊い人である。戦争で功をあげる上の方の將
校の名は社會にもてはやされる。しかしその功をあげる
ためには、誰にも名を知られぬ無数の兵が命がけに働い
たのである。この兵こそ有名な大將よりも遙かに尊い人
である。「一將功成萬骨枯」人はその萬骨の尊さを忘れ
てはならぬ。
世界の大事業 例へばわれ等が食ふ米を誰が發見した
か、誰にもわからぬ。そしてわれ等はその恩によつて生
活してゐる。

第五課 親切

行届く といふことが中々むづかしい。一事に行届け
ば他の事にも行き届く。今の様な、どの本もどの課も眞
に行届く様に勉強できず、追はれ／＼て日を送らすと、
決して行届いた仕事をする気分にはなれない。今の學校
生活そのものを改めないと、學校で行届いた気分を養ふ
わけにはゆくまい。教師にしても、只今の制度では、生
徒一人一人に對して行届いた世話をして、行届く實例を
生徒に示すことはむづかしからう。

わが席を譲つて も坐らせる。すべて親切は自分の不
結果は、孫を増長させ、傲慢にするばかりである。老婆
親切は有害な者。

人の機嫌を取る ことは、私自身は可なり所謂社交婦
人から受けます。中心さう思つてゐないことが見えすい
てゐながら、齒の浮く様な阿世辭をいはれるのは不愉快
なものである。そんな事をする人は教養のある人からは
輕侮される。

すまじい事 の中には色々あらう。しかしこゝで私が
心の中にもつてゐるのは、貞操を破る事、身を汚す事
である。今の女子にはこれに關して餘りに安く考へすぎる
者があるやうに思はれる。

善惡 の學問上の説明は種々仕方がある。しかし實際に
於て善とは何かといへば、いつまでたつても自他に害の
起らぬ事、又は利益のみを與へる事といつて間違はある
まい。勿論その害とか利益とかいふのは、金錢上、物質
上のみではない。

未來を考へる 一ヶ月先はどう、半ヶ年先はどうと、
先を考へて今の仕方を定めるのを見通しのつく人といふ
女子はこの修養が非常に必要である。目前の小事を大事
と考へ、そのみに氣を取られると、後に大損失がくる。

秘密 を洩らす中でも、刑法第三百三十三條 故ナク封緘
シタル信書ヲ開披シタル者ハ一年以下ノ懲役又ハ二百圓

以下ノ罰金ニ處ス。第三百三十四條 醫師、藥劑師、藥種商、產婆、辯護士、辯護人、公證人、又ハ此等ノ職ニ在リシ者故ナク其業務上取扱ヒタルコトニ付キ知得シタル人の秘密を漏泄シタルトキハ六月以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス。宗教又ハ禱祀ノ職ニ在ル者又ハ此等ノ職ニ在リシ者故ナク其ノ業務上取扱ヒタルコトニ付キ知得タル人ノ秘密ヲ漏泄シタルトキ亦同シ。その外軍事に關する秘密については種々嚴重な規定がある。法令に禁じてなくとも、漏すべからざる秘密は極めて多い。昔から婦人は往々秘密を守り得ないものと考へられてゐるから、よく注意し、さる事のない様に修業する必要がある。

第七課 應 否

心變り といふが、その實はどうであつたかよくわからぬ。昔兩方が敵味方となつて對立する時、どちらが勝つか實はわからぬ。全家をあげてその一方へつゝいては、反對の方が勝つた時には、家が亡びるから、一人は一方へ、一人は他方へつゝいた事は珍らしくない。これは家を亡ぼすまいとの戦時の心理状態である。今の様に皇室が君と定つてゐる時代の考では、戦國の事はわかり難い。

本多忠勝 平八郎といひ、徳川家康の臣。百戦一敗せず、小田原の役、秀吉その功を賞し、佐藤忠信の甲冑と稱するものを出し、方今天下この甲冑をきるべき者汝一人なりといつて賜はつた。秀吉は種々の方法で忠勝を部下につけようとしたが、終に應ぜなんだ。伊勢桑名城十萬石を食んだ。慶長十五年六十三で死んだ。

然り と答へるまでには十分に考へ、萬に間違のないことがわかつてからでなくてはならぬ。
日本の驛員 は他の一般の役人と同じく餘りに規定の文字に拘泥し、實際の便を考へる力が少ない。これは一は、役人は人の便利を計る役ではない、規定を死守すればよいものであるとの官僚思想にもよらうし、今一は、學校時代からして物の眞の目的を考へる常識を與へられてゐないために、規定を笑しい位までも墨守し、鐵道が旅客貨物を運搬する目的に反しても、法規さへ守ればよいと思ふことによるのであらう。今少し自分の取扱つてゐる事務の目的を考へる力を、一般の人に對して養ふ必要がある。かゝる力は女子に於て最も養ふ必要を感じる。女店員などが、わかりきつた事を自分で判斷し得ず、一々上役へきゝに行くのは、見てゐても可笑位である。この點は遺憾ながら外國の同地位の婦人と違ふ様に思はれる。

延陵の季子 支那春秋の頃の吳王壽夢の子で、本名は季札である。壽夢に子が四人あり、季子は最も賢なので、位を譲らうとしたが、どうしても聽かぬので、長子の諸樊を立てた。諸樊は一旦位についたが、父の喪があけると同時に季札に位を譲らうとしたが、遂に辭してつかなんだ。吳の人が是非つかせようとしたので、家を出て耕してゐた。延陵といふ處に封ぜられてゐたので延陵の季子といはれてゐる。嘗て命を奉じて上國へ使した時、徐の君を訪ねた。徐の君が季札の劍を見て欲しく思つた。

季札は心の中でそれと氣づいてゐたが、今は君命で使する處であるから、歸りに贈らうと思つた。歸りに立ちよれば、徐の君は既に死んでゐたので、その劍をとつて徐の君の家の樹にかけた。季札の從者が、徐の君は既に死んだのに誰に御與へになるのかと聞いたれば、「否、吾が心で始めに贈る氣になつたのであるから、死んだからとて吾が心をかへてはならぬ」といつた。
求むまじい事 よくない結婚もさうであらう。一時の弄物となれよとの勸も最もさうであらう。

第八課 はつきり

第七課 應 否 第八課 はつきり 第九課 贈物

要點 例へば人を訪ねたら、その訪ねた用向があらうから、それを最も先にいふ。他の不用な事は後にするか又は全くいはいぬ。
男子の言ひ方 は理知的に分析していふ。男子の談には論理の明晰なのがよい。女子も理知がなくてはいけないが、そこに人情を加へ、圓く温くなるのがよい。
男子のまね 現代の女子の一般の知が男子には劣らぬぞよと示したい積りであらうと思ふが、それが男子のまねをして、それで喜んでゐる程度に墮してゐる。女子は男子のまねなどすべきではなく、女子自身の價值を發揮すべきである。

第九課 贈物

中元 の起原については、これは私の想像で、何等史實をあげ得るのではない。
心から贈りたくない 贈物とは、上役とか、子供の世話になつてゐる先生や、地位を進めてもらふための視學などに贈る場合をいふのである。これに對しても、少しは贈りたい念はあるかも知れぬが、しかしその物を自分が喜ぶと同じ程度に於て向の人を喜ばしたいとの念はな

いに相違ない。

手土産 の事を本課ではかゝるのだが、これも別に大害があるといふのではないが、社交を徒らに複雑にし、その競争を盛んにし、それがないと訪問できない氣持を起しなどするので矢張有害であるから、女學校などでは、なるべくしない方がよいと、この課に於て教へてほしい。
返禮 といつて物品を贈り返すと、兩人の間はたゞ物事交換となり、その間何等のうるほひがない。好意を受けたら、それに對して深く感謝して頭の中に入れておく、もし他日向が自分に物を贈つたと同じ場合が向に對して起れば、或は何等か祝賀とか慶吊とかの意を表してもよい。すぐ返禮をするのは如何にも輕薄な商人的仕方である。

中元歳暮 わが國の町人上りの大華族が經營してゐる或る大會社就業員の話であるが、その會社では、ボーナスの殆ど全部を上役に贈物とすることになつてゐる。それが無いと、眼に見える様に昇進などが後らされるらしい。社長の人物がそこまで響くのではあらうが、お中元お歳暮はどうもかゝる事になり易い。同じ會社でも使用人からの進物は一切受けぬのもある。勿論さうあるのが本當である。

土産物 旅行がたゞ遊びあるく目的のなら、土産物を考へる暇もあらうが、現時の旅行は多くは用事があつてすに恥づかしい。外國では化粧や容子でその身分職業がわかる。それを何も知らぬ日本婦人が無標準にまねするのは、見苦しい。必ず外國のまねをするなどとはいはぬ。まねをするなら、もつと詳しく調べて、可笑しくない様にまねをしてほしい。固より今のわが女子の多くは、その職業が何であつても、氣持は皆醜業婦と同一であるために、化粧なども醜業婦的なのが氣に入るともいはれるのかも知れぬ。

ある、なる、見える 立派に見えるのは何の價値もない。立派にならうと心がけたい。立派であるのは終局の成功である。

隠れたるより これは中庸の首章にある語。「莫見乎隠、莫顯乎微、故君子慎其獨也」とある。中庸は孔子の孫の子思の著書で、支那で最も深い哲學書の一である。光のあるもの美德のある者は、それを隠さんとすればその隠す行爲によつて益々内の美が顯れるといふ意味で私にはこゝに用ひた。

赤ん坊 には洗ひ易い綿の白衣が最もよい。

子供 に紋附をさせるのはわるい。子供はもとゞ禮や式といふ意識のないものであり、大人と共にかゝる處へ列せしむべきものでない。無標準の氣分がこゝにまで入つて、子供に大人と同じ禮服をきさすなど笑ふべき事では

るのであるから、その用事の傍、人々への土産物まで考へねばならぬとすると、實にうるさい。洋行などする時に、餞別品をくれる人は可なり多い。一々それに土産物を調へて来るなどいふ事では、とても敏活に本業の用務はできぬ。かゝる慣習もなるべく廢する様にしたい。女學校ではつきりその理由を教へておくと、たとへず實行はできずとも、長い間には生徒の頭を支配する時期が來るに相違ない。

第十課 身なり

頭を清めぬ これは主にわが婦人である。夏、電車内でくさい頭を鼻先へ出されるのは誠に不快である。京都の婦人は衣服を洗ふといたむので、水に入れぬのを着るために、極めて臭い衣服(しかし質はよい)をきてゐることが往々ある。

香水 類の香がぶんとするのは、それをつけねばならぬ悪臭があることを示す様にも思はれる。

頬紅や白粉 のつけ方がいかにもてか／＼しく、丁度パリ邊りの醜業婦のまねをして、それを恥と思はぬ若い婦人の多いのは、美的趣味の高尙な日本人としては、誠

ある。

流行 が盛んになるのは、一人だけ目立つのをさけるためと考へられてある。しかしもし流行が餘り強い力をもつてゐない處なら、各自自分の趣味で衣服をきるから、目立つ目立たぬといふ問題も起らず、固より流行も起るはずがない。流行の起るのは、流行を喜ぶ精神状態が本になつてゐるのである。東京には、流行といふものは比較的狭い範圍である。京都は滿都殆ど流行の全勢力の下にあるともいへよう。

誰にも知られずに よい事をする、これが日本道德の特徴であるから、本書には再三種々の形でのべた。

第十一課 正直

人の氣持 私が本年伊香保で名物笹粽を買はうとして、朝早く行つた。粽の笹の色が赤味を帯びてゐるので、これは今日のか昨日のかといつたれば、主人は、「あなたは粽を知らぬからそんな事をいふかも知れぬが」と、ひどい權幕でつきかゝつて來た。私は十年も同地に行き、粽はすきで毎年同じ店へ入つてゐるのである。向の人は許はいはぬが、今少しこちらの氣持を尊重してほしかつた

無分別 して、いつてよいかわるいか、よい場合か悪い場合かを判別できぬのをいひ、今はすべて没常識の語中に含まれてゐる。

詐 人をだます意志なくといふ詐は、さ程責めるに及ぶまいといふのが一體の女子の氣持の様であるが、だます意志の有無まで現代の人は考へる餘裕はない。事實ない事をいへば、その目的の如何を問はず、それは詐とされてしまふ。そして詐をいふ人として、將來取扱はれる。かりそめに、間に合せて、阿世辭にでも、ない事思はない事はいいない様にしたい。

第十二課 慎重に考へよう

本課 は實は近來著しく放漫に流れて來た男女の交際について述べたのであるが、それと明かに言ひ難いため、極めて一般的抽象的に説いたのである。課中「餘り交が長くもない人」など、明かにその積りである。

わが氣に入つた事 は固よりわがためになる事とは限らぬ。殊に性的本能のめさしかけてゐる時に於ては、わが氣に入る事は往々最も警戒を要する事である場合が多い。新聞紙上、女からして男に欺かれたとの訴が、無

第十三課 日本人

本課 は日本人の特性をその原因から調べたのである。平地 わが國の耕地は總面積の六分の一にすぎぬ。勤勉 と同時に儉約であつた。今でも儉約の風はあるが、明治以降米國の風が入つて、俄に奢侈な風が加つて來た。

衣服の美 は同時にわが婦人の衣服の價を高くすることを忘れてはならぬ。婦人の裾模様の如きは實に贅澤なものである。外國人に賞められ、呉服店に煽動されてあんな物を着るのは餘程考ふべきである。

遊い色 てかくせず、強く眼を刺戟せず、そして何となくしつかりした氣持を與へる。

歐米風の露骨さ 西洋音樂のみを學校で教へる結果、ダンスとなり、舞踊となり、そしてその結果は賣塚式の下品な露骨となる。あれは下品な、趣味の低い、肉慾の強い歐米人特に歐洲大陸人にすかれる風である。決して日本の國民性とは一致せぬ。

人肉 を食ふ事は支那には昔からある。

能樂 では一番の始から終りまで謡を謡ひ、笛、太鼓、大鼓、小鼓の囀に合せて舞ふ。その舞は極めて靜かな、

數に出てゐるが、欺く男もわるからう。しかし氣に入つた事をいはれて輕々に手を出す女も同じくわるい。或はその方が更にわるいともいへよう。それはわが身を大切にしないのであるから。

その求め 前述の意味を十分に含めておいた。

社會の事 から後は、近來女子をも陥れんとする共產的思想の積り。

思想 のみならず、宗教でも音樂でも美術でも法律でも皆それ／＼その特殊社會の必要に應じて起るものである。一の社會に起つたから、それが必ずしもわが社會に妥當であるとは限らぬ。その中にはわが國にも利益なものも或はあらう。故に深い學者批判者がそれを分析研究して判斷を下さねばならぬ。維新以降わが國には外國の物を無判斷に取り入れる癖がついた。そのために今に至つても、尙外國のものといへばすぐ取り込んでよいと考へる輕卒な學者等は、わが國には可なり多く、そしてそれが往々學者として立派な地位を與へられる。そのために青年男女がそれ等の輕卒な學者の言論を聞き、無判斷に信仰し、盲動的に働かうとして、そしてわが身を誤つた例は今までに可なり多い。

表情の少ない中に、最強の情を表す。少ない表情で強く表はさうとするから、内に非常に強い力が籠ることを要する。力は籠つても、それを外に表さぬ。これがわが舞の特徵であり、内に何の含當もない西洋風の舞踊と同日に見るべきものでない。歴史的なる日本人の氣分を得しめるには、生徒に謡曲の如きは是非とも味はずべきものであらう。そして能樂の如きも今少し容易に眼に入るやうにしたい。

第十四課 諸道と競技

花と同じ心 とは、やさしい花を見ては、われもやさしくなり、哀れな花に對してはわが心にも哀れさを催すの類。

姿勢正しくないと、外物がありのままに眞直に入らぬ。曲つた姿勢の人の心には外物が曲つてうつる。これは自分で深く經驗するとわかる。

西洋の家 は家と庭とがはつきり區別がついてゐて、決して室からいつの間にもやら庭になるといふ趣はない。聲の段階 謡曲では西洋音階の四分の一の差を謡ふ、

故に高音低音の差は少ない。しかしその少ない差で氣持を表す處に底の力がある。西洋音楽の如く浮いた調子を嫌ふ。殊に強吟といふものになると、西洋音楽にはない發聲法である。雜音を音楽に使ふのは謡曲の強吟のみである。強吟に於てはたゞ力があるのみである。謡曲の本は強吟であり、強吟に聲の變化を加へると弱吟になる。弱吟は樂音を用ひる。

或る學校 私の武藏高等學校。

第十五課 歴史

歴史 日本の歴史といへば、本の事ではなく、日本の経過して來た事實。

僧侶 わが國の文化の大部分は僧侶の仕事といつてもよい。上古には深山を開き橋をかけたのも多くは僧侶の手である。昔行者といつたのは皆僧侶であつて、それ等の人が深山幽谷を經廻つて、人の行き得ない處を開いた。寺を造り、大建築物を始め、佛像を彫刻したのも多くは僧侶である。傳教、弘法、法然、眞鸞、日蓮、白隱などの高僧は人知れぬ心の苦悶を経て、それ／＼一宗を始めた。その外無数の僧侶が道を求めるための苦心は、それ

こそ邦人の最大苦業であつたらう。その力によつて日本に佛教が力を得、人心を馴化したのである。日本で最も深い思想は佛教僧侶の思想であることは疑ない。日本文學の中で思想の最も深いのは佛教文學であるが、何故かそれを文學の中に入れぬため、日本文學は極めて淺薄輕浮のものとなつてゐる。

藝術家 日本の繪畫彫刻はもと支那から傳つたものであるが、日本人はそれを日本化して世界に比類のない立派なものとした。奈良朝、平安初期の彫刻はギリシヤなどに比して少しも遜色はなく、平安以後の繪畫には、とても西洋畫の及び得ない深さ、崇高さがある。

文人 の事は文學史や讀本に教へてあるから別に説くを要せぬが、その文學史讀本に佛教僧侶の最も深いものを一切省いてゐるのは、恐らく文部省の考の不足から起つてゐるのではあるまいか。

橋の圖 これは米國獨立戦争の發起點たるコンコードにある橋。川は隅田川の半分もなく、きたない水溜とも見えるが、その川が英米兩軍が對陣して戦争が始まつたのであるために、その橋を昔のまゝに改造し、木がコンクリートとなつて今に残つてゐる。形は昔のまゝである。

寺の圖 これはニューヨークのプロウドウエイ(本通)にある。その邊は全市の最も繁華な商店街で、何十階の建

築が軒をならべてゐる。その中に一の寺院が昔しながらの沈着な姿を保ち、その傍には墓場まで變造されずに残つてゐる。左の墓場に四角な石の見えるのは皆墓である。米國の墓は日本の如く石を立てず、平かに地面の上に置いてある。この寺の地面を買收しようとする資本家は無數にあるが、米人の歴史覺はそれを是認せず、商店街の眞中に二百年前の寺が靜かに残つてゐるのを米人の矜としてゐる。日本で少し繁昌になると、すぐ寺を買收して他へ移すのに比すると、天壤の差である。これでも歴史を重んずる國民といへるか。

時の知事 後に皇后宮大夫になつた大森鐘一男。

三條大橋 は豊臣秀吉の命で造つたものであることが、今も残つてゐる橋の擬寶珠の文字でわかる。三條通りが廣くなつたので、橋も廣くはなつたが、形は昔の通りである。その袂へ近頃高山彦九郎のいやな銅像を造つたので、風致は破壊された。風致のわかる京都人がなぜあんな事をしたのか。

五十三次 といふ數の起りは華嚴經の入法界品といふ篇にある。善財童子といふ順禮者が五十三の善知識(即ち高僧)を次から次へと尋ねたといふことがある。これから五十三次が起つたのであると傳へられてゐる。

新計畫 政府や府縣廳の技師共が何の歴史の考もなく、

無注意に史蹟を破壊するのは實に殘念である。實に歴史を知らず國體を知らぬ役人程、公然國民の歴史覺を破壊するものはない。今日知識階級といはれる多くの人は歴史を除いた外の知識のある人である。日本は歴史によつて立つてゐる國であることを考へたい。

修學旅行 に行つて名所故蹟に落書するのも亦歴史を破損するものである。

伊能忠敬の家 は千葉縣佐原にある。その室は昔のままに残つてゐるが、それが元から住宅―しかも台處―と接近してゐるので、甚だ危険であるが、それをよくしようといふ計畫はまだできて居ない。

本居宣長 の鈴の屋はその元の地から離して公園内に移された。室は火災から安全になつたが、宣長の居た眞の場處ではない。外國ではこんな保存法はしない。火事がこわかつたら、なぜ周圍の家を買收して毀たない。

史蹟名勝天然記念物保存法 これは大正八年四月發布の法律第四四號であり、かゝる法令があるだけでも、非常な進歩である。維新の始、城を壊ち、名園や池を畠にするのを能と思つたのに對しては、誠に喜ばしい。さりながら法令があるだけでは、まだ足りない。國民全體が史蹟等の大切さを知り、自らそれを大切にのみならず、他人が壊すのを見ては、それを抑へるやうにならな

ければならぬ。高山に登つて保護植物を最も荒らす者は師範學校の生徒だといはれてゐる。これは師範學校の教育がたゞ形式に走り、實質的教養を與へぬためである。私が伊香保遊園地で、その年にできたばかりの東屋の白ベンキに群馬縣の師範學校、中學校、農學校の生徒が、それ／＼徒ら書をして、恥しくもなく校名を書いてあるのを見て、各々校長に注意を與へた。中學校長は丁寧な返書によこし、師範學校長は禮儀を辨へぬ返事をよこした。農學校長に至つては、これが教育者かと思はれる手紙をよこした。かゝる教育者が學校長を勤め得る間は保存法が何程出ても實効は餘程むつかしい。英國の労働黨といへば餘り穩健な思想の者ではない。然るにその黨の名で嘗て、風致を害する如き廣告をなす店の品物は一切買はぬことにしようとの宣言文を大新聞にのせた。わが國の中等學校の生徒及びその或る校長に比して著しい差異である。

第十六課 愛國

わが國の歴史 明治以來萬事西洋を摸倣し、西洋の物ばかり立派と思つた。その氣分が學校内に充満し、わが

けないといふ事。底深く考へるには、まづ歴史的にどうなつてゐたかを考へ、邦人が昔から何をよとしたか、その理由は如何と考へねばならぬ。今の邦人殊に女學校ではその考へ方が著しく欠乏してゐる。若い婦人はパリ當りの女郎のまねさへして得々としてゐるのは、見る目も恥かし。

獨立國 とは特殊の文化をもつて始めてできる。それがなければ必ず文化のある國に併合される。他國が攻めて來る時、特殊文化が國人の頭の内にないと、決して敢然抵抗はできぬ。

第十七課 國の威光

國旗の歴史 嘉永六年ベリ條約の後、大船の禁がとけたので、薩摩藩で大船十二艘を造り、それに幕府の許可を得て白帆の真中に朱で大きな日の丸をかい用ひた。安政元年七月十一日(十二日ともいふ)その案を採用して、幕府で「異國船に不紛様、日本總船印者白地日の丸の幟相用候様被仰出候」と發布した。安政七年正月十八日正使新見豊前守、副使村垣淡路守一行七十六名がアメリカへ行く時の軍艦モウハタンには、艦尾にメリケン國

第十六課 愛國 第十七課 國の威光 第十八課 固有文化の發達

文化は皆賤しいもので、顧みるに足らぬとの考を養つたその結果、邦人の愛國心は著しく弱くなつた。大學教授は外國の學問のみを修めて日本の事は知らぬ。従つて中心、日本を尊ぶ氣分が頗る薄くなつた。大學卒業生は多くはその感化を受けて、中心から日本を重んずる氣持がなかつた。かゝる卒業生が地方學校の教師となり、地方の主な役人となり、非愛國的氣分は國內に横流した。その中に愛國の光の輝いてゐたのは國體、それを擁護する陸海軍と、そして高等教育を受けない衆民が主であつた。わが國がかゝる誤つた風から脱し來つたのは二三十年來の事である。この狀況については、私の「勅語四十年」(東京教育研究會發行)に事實について述べておいた。

すべての力 研究力、經濟力、製造力、輸送力その外社會のすべての力。特殊の文化 わが道徳、わが思想、わが宗教、わが藝術をすべて文化といふ。これは皆外國とは違つてゐる。諸外國でも皆同様であつて、佛國の道徳、思想、藝術等は英國とも獨國とも違つてゐる。邦人は往々その別がわからず、西洋といへば各國同一文化をもつてゐると思ふこれは大きな誤である。物理學の如き世界共通であるべき學問さへ英と獨とは違つてゐる。

心の底深く考へる とは、一寸の思ひつきでしてはい

族を、艦首には日の丸を掲げた。明治になつてから三年正月二十七日大政官布告第五十七號で正しい國旗を布告した。それが今の國旗の起原である。日の丸の國旗は、横三に對する縦二の割、日の丸の大きさは縦の五分の三、丸の中心は旗を四折にした中心となつてゐる。(東京日日新聞社編「日の丸由來記」)

世界の強國 とは世界の大事件を議する場合に必ず相談の中に加はる國をいふ。別に定まつたわけではないが、米國、英國、佛國、以國、その外獨國魯國などが通例強國と見られて居る。日本も勿論その一であり、國際聯盟からは脱したが、海軍々縮問題の如きは主として日英米間の問題とさへなつてゐる様なわけである。

不正を質す こゝでいふ官吏は通例領事總領事である。領事はその駐在國又は附近に於ける邦人の利害を保護し、又その邊の經濟狀況等を調べて本國に報告する任務のものである。

第十八課 固有文化の發達

應神天皇 以前に全く支那の書が來てゐなかつたかどうかは判然せぬ。多分來てゐたらうと思はれる。

論語 は誰も知る孔子及び弟子の言行等をかいた書であり、孔子の弟子の弟子が編したものであらう。儒教は孔子の教を中心とした説であり、支那の指導的教義である。わが國に於ても朝廷ではそれを重んぜられて来たが、殊に徳川家康はそれを國民修身の大本とし、後に聖堂が御茶の水橋にできて、そこで聖人の道を教へしめ、各藩にもそれに倣つて藩の學校を建て、儒教を教へた。儒教に於ては論語の外、大學、中庸、及び孟子を合せて四書といひ、又書經、詩經、禮記、易經、春秋を合せて五經といひ、それ等をわが國でも教へた。武士道などいふものも、論語の影響を受けた事は極めて大である。今日日本人の頭に浮ぶ道德的格言は多くは儒教の教であるといへる。今儒教や漢學を或る間違つた考で廢しかけて居るために、國民の傳説的道德思想も亦變らうとしてゐる。教育勅語の根據にいかにも儒教が入つてゐるかを考へよ。

子であるが、同時にわが國體を明立せられたのも太子である。太子の憲法は祭祖崇佛を明かにせられたものである。今太子の十七憲法の第一、第二、第三、第十七を擧げる。一に曰く、和を以て貴しと爲し、忤ふことなきを宗とす。人皆黨あり、亦達れる者少し、是を以て或は君父に順はず、乍ち歸里に違ふ。然るに上和らぎ下睦ひて、事を論ずるに諧へば、則ち事理自ら通ず。何事か成らざらん。二に曰く、篤く三寶を敬へ。三寶とは佛法僧なり。則ち四生の終歸するところ、萬國の極宗とするところなり。何れの世、何れの人か是の法を貴ばざらん。人として尤も惡なるは鮮し。能く教へざれば何を以てか狂れるを直さん。三に曰く、勅を承けては必ず謹め。君は天に則り、民は地に則る。天は覆ひ、地は載せ、四時順行して萬氣通ずることを得。地天を覆はんと欲すれば則ち壞れを致さんのみ。是を以て君言ふことあらば臣承け、上行へば下靡く。故に詔を承けては必ず慎め。謹まざれば自ら敗れん。十七に曰く、大事をば獨り斷すべからず、必ず衆と共に論ずべし。小事は是れ輕し、必ずしも衆と共にすべからず。大事を論ずるに及んでは若しくは失あらんことを疑ふ。故に衆と共に相辨すれば辭則ち理を得ん。

佛敎 は印度釋迦の教に本源を發する。
佛敎を採用 することを明かに定められたのは聖徳太子

法然上人 は淨土宗の開祖で、人が南無阿彌陀佛と念

すれば、彌陀が來迎して極東淨土につれて行かれると説いた。以前の傳敎大師の天台宗や弘法大師の眞言宗は戒や律を重んじ、非常にむづかしい行をしなければ佛の救を得られぬこととなり、その結果たゞ病氣の治療によつて人心を引きつけ、そして種々の迷信を生じた。そのむづかしい行等を一切廢して、たゞ念佛で救はれるとした處が、法然の大才である。然るに。

は悟を得しめ、人物を鍛へる點に於て世界各宗に類のない特徴をもつてゐるが、それは現在印度にもなく、支那にもない、たゞわが國のみに傳はつてゐる。それを傳へしめたのは徳川時代の

親鸞上人 は法然の弟子であるが、更に一步を進めて、阿彌陀佛を念すれば別に彌陀の來迎までもなく、既に救はれてゐるのであると説いて、他力宗の本旨を更に徹底させた。善人すら尙往生す、況んや惡人に於てをやといふ教は、世界中、眞鸞以外に道破し得た人はない。眞鸞の後支那より臨濟禪が入り來り、坐禪によつて直ちに成佛できるといふ自力主義が教へられ、鎌倉の武士など最もそれに囑依した。この自力主義と他力主義とを綜合したのが

白隱禪師 の苦心による。白隱と眞鸞とは實にわが國が世界に務り得る最大人物である。

日蓮上人 の法華經である。眞鸞が佛を念ぜよといつたのに對し、日蓮は法華經の名を唱へよといひ、さうすれば禪宗の即身成佛疑なしと説いた。他力宗に於ては人は彌陀に救はれるが、人が佛に成るとの説はない。これは禪と法華の兩宗である。いづれも印度及び支那の佛敎に源を發してゐるが、日本に於て特殊の發達をした。禪宗

ことである。苦悶はもとわが心にあるのである。如何なる事があつても、それを苦悶と思はねば苦悶とはならぬ心で苦悶と思ふから苦悶となる。それを苦悶と思はない手段を與へるのが佛敎の宗旨である。この事を今少し深く考へて、なぜ苦悶が人間にあるかを考へて見よう。人には常に完全になりたいとの希望がある。自分の行をもつと正しくしたい希望がある。この希望があつて、そして自分自身を内から考へて見ると、一もこの希望にそはない。かうすべしと考へる。果してその通りしてゐるか、その通りせようと努めてゐるか。どれだけその通りになつたか。すべきはずと自分で思つた事が何程できたか、何程せようと努めてゐるか。かく考へて見ると、自分程不都合な者、弱い者、小さい者、賤しい者、恥かしい者はない。まじめに自分を考へると、誰もかく思はぬわけには行かぬ。さうすると自然に自分を責める心が

起る。その責める心から罪の觀念が起る。罪障の山が高
いと、罪業深き身と生れと文學にあるのは皆この心か
らである。自分が罪であると思ふと、恐ろしい。こゝに
苦悶の大本がある。どうかしてこの罪から脱したいと
思はざるを得ぬ。この心が宗教心の起りである。太古の人
にもこの氣持が不鮮明ながら、又は違つた形で、あつた。
それが宗教が非常に古くからあつた理由である。罪の考
は佛教にもヤソ教にも盛んにある。わが國ではそれが穢
の語で用ひられてあり、古事記にのつてゐる。穢を拂ふ
ために穢をする。官中では今でも六月の末と十二月の末
に大祓をせられる。百人一首の歌に「御そぎぞめ夏のし
るしなりける」とあるのは、この夏の祓の事である。
人の心に完全を望む念がある間は、宗教は存在せざるを
得ぬ。人の不完全を他人に歸し、社會や制度に歸するや
うな不まじめな人には宗教はわからぬ。

西洋文明 が入つたのは、吉宗將軍が宗教に關係しな
い藥書の輸入を許してから盛んになつた。

わが國體に違反した思想 の最も著しいのは、大正
になつて國を騒がした共產思想である。共產思想は罪の
原因を自分に求めないで、社會制度に求める。根本にわ
が思想と違ふ。

わが民族性に 違反した思想は、例へばキリスト教の

如きである。同教が祖先尊崇を排斥したのは最も著しい
點であるが、その外わが慣習風俗に違反した事は、それ
が全く歴史を異にした歐米で發達した宗教であるだけ、
無數にあつた。しかし同教と共に入つた思想の中でよい
ものもあつた。それは例へば明治中期に於て貞操の觀
念を強調し、又女子を尊んだ如き類である。しかしその
ために女子は自ら修養しないで徒らに放漫になつた結果
もあつた。

第十九課 謙遜な心

岡目八目 碁の語。岡目は傍に見てゐること。さうす
ると八目位の得はあるといふ意味。

わが俗 例へば華族や金持の子などで、女中などに持ち
あげられてばかりゐて、成長した者は、必ず自分を反省
したり人の注意をきくことなどはできない。

第二十課 人格

人格 の語は譯語であり、わが國では不用意に種々の意

味に用ひられる。人格のある人といふのは、品性の尊い
人といふことで、眞の意味に於ては正しくある。人格は
Personality 品性は Character で、別の語である。人格
とは一人前の人の價値又は能力の具つた者位な意味。

人は同じ價値 であるとは、誰もかれも一人前の資質
能力を具へてさへ居れば人格であるから、上下貴賤の別
なく同じ價値があると見ねばならぬ。

尊い生活 とは、善い生活よりは更に上である。善は
人が賞める。しかし尊んで頭を下げ、上のものと見るに
は、善以上或物をもたねばならぬ。自分の満足をさいて
人に與へるのはたゞの善だけではない。

自分の具へてゐない物 を他人が具へてゐるとわか
るのは、既に立派である。人の欠點は氣がつくが、長處
は一寸見つけ難い。よく見つけても、それをそれと發表
することは往々樂でない。それをするのは上品である。

卷四

編纂趣旨

この巻は大體に於て純日本道德、日本思想を述べた。明治以降萬事西洋崇拜に陥つたため、道德に於ても、われと全く根柢を異にした權利思想、個人思想（思想的には同一物）を取り入れた。一寸見ると尤もらしく思はれ、殊に法律組織に於て全く個人思想をとらんとしたため、それが當然の最も正しい思想の如くに思はれ、そして社會に新しい思想を植ゑつけた。しかしそれだけでは何となく安からぬ處があつたために、思ひ出したやうに時々忠孝の語を説く傾もあつたが、個人思想から忠孝を、よし引き出し得たとしても、それは到底日本の歴史的忠孝ではあり得ない。忠孝として一體の日本道德は、砂漠中のオーシスの如く處々に點在するものではなく、渾然たる一系統である。上から下まで一個の思想が貫通してゐるのである。それを知らないで忠孝を説いても、説かせても、映りがわるく、何等明確な印象を與へ得ない。今日に於ては日本道德、日本思想をいふ者は可なり多くなつたが、尙果して根柢から日本道德を感得してゐるのかどうかは頗る怪しい。本巻に於ては、日本道德の氣分を説明するに力を用ひた。それは從來道德と思はれたものとは可なり違つてゐる。西洋倫理學が完全に道德を

説くものなどと簡易に考へる人から見れば、本書に説く所は恐らく道德でないとも思はれよう。道德は義務とか権利とか、動機とか結果とか、人に對するとか社會に對するとか、細々と分説することによつて出来てくるものではない。自分。を。どう。思。ふ。か、たゞこの一個、心の持ち方によつて萬華が開き來るのである。本書はこの心の持ち方を示さんと試みた。むつかしい専門語を生徒にわからぬまゝで注入すること、たとひ千萬であつても、それで生徒に何の道德心をも起し得るものではない。道德心とはわかりにくい事を諳記する力をいふのではなく、善をする心や力である。善は固よりわが國の善である、個人を單位と見た善ではない。

日本道德を説くといつても、たゞ抽象的にそれを説くことは効がない。本巻に於ては婦人の實際生活を取り出し、それに於て日本道德としてはいかに處置すべきかを示すに力を用ひた。職業に對し、婚姻に關し、儉約に關し、日本道德として要求する事を述べて、日本道德のいかなるものなるかを胸の中に會得せしめんと努めた。道德は人間活動のすべての範圍についてある。しかしその根柢は一であるから、一が鮮明にわかりさへすれば、その他の場合に適用すること必ずしも困難ではない。實行に著せぬ抽象的の説明を何程學んでも、一の善行をもなし得るものでない。

第一課 われ等の任務

正しく考へる この正しくの語に御注意願ひたい。たゞ物の理屈を考へたり、間違つた事の一寸とした改良方法を考へたり、外國の思想や慣習を批判なしによいと考へたりするのは、今の女子に非常に多いが、それは正しく考へるものとはいはれない。

したい事をする これも正しく考へた後でなくてはならぬ。何でも、したいと思つた事をすぐするのでは、動物と同じである。

身體や能力 は天の與へたものとも考へられます。天が身體能力を與へたのは、それを最も適當に働かすためとより考へられぬ。即ち任務は天によつて、又は言ひかへれば天與の身體能力によつて定まつてゐる。

偉人の懺悔 一生が夢の如く過ぎたなどとは、多くの詩人のいふ事である。豊太閤の末期の句と傳へられる「浪速の事は夢の又夢」の如き皆一生空過の嘆聲である。しかしかゝる嘆聲を發する人は、寧ろその自ら期する所任する所が非常に大であつたことを示すことが多

第二課 道のため

大生活 個人に對して家、學校、自治體、國家又は大きくしては宇宙といふものは、皆一つの大生活と見られる。個人個々では何の働をなすこともできぬ。

道 は形なくして各人を支配する。各人は道に従ふによつてその本然の性を全くすることができる。道は思想としては各人がもつてゐるといはれるが、しかし各人は隨意にそれに背き、それを破壊することはできない。西洋では道德律ともいふ。それは法律の如く自己を支配するからである。しかし必ずしも律などいふには及ばぬ。道は違反者を罰するためのものではなく、各人の履まざるべからざるものである。日本人には道は律とは考へられてゐない。ユダヤ人は律法と考へる民族である。

第三課 職業

仕事の目的 何の仕事をするにも目的があるから、それを考へて、その目的を立派に達しようと努めばならぬ。政黨政治が行はれてから、大臣は往々國家の利よりも自黨の利を謀るものとなり、そのために官吏一般が同じ考

となつた傾向がある。知事はその府縣のためを謀るよりも、たゞ政黨大臣の氣に入る事をして昇進の方法のみを考へる。府縣がどうなるとも一向考へぬ。昭和九年東北地方は不作のために非常に困つた。東北は昔から不作の多い地である。歴代の知事に於て、何かかゝる不作に應ずるだけの方法を立て、一朝不作があつても餘りに悲惨な苦み方のない様にすべきはすである。それが何等考へられてゐず、同年の如き事の生じたのは、何といつても知事が知事といふ任務の目的を誠實に考へなかつた積年の結果といはねばならぬ。今の役人にはかゝる氣分が恐ろしく普及してゐる。官吏がその通りである如く、他の方面にも同様の事が可なり多い。

豫斷 とは診察もしない中から何々病だらうときめこんで、その考によつて診察し、深くも考へないで決定すること。レントゲンをとつてさへ、明かに寫つてゐる事を、豫斷のために見遁すことがある。

治療法 現代醫學は診斷に重きをおく。治療法は教へるには教へるが、元來病氣は患者によつて種々の症狀を呈し、或は種々の病氣が多少なりとも混じて居るために、抽象的に講義しただけでは實際に一々適用できぬ。故に大體の原理は教へるが、その餘は各醫師の觀察力、注意力に一任する。實に注意の届いた醫師と届かぬ醫師とは

治療上に天地の差がある。

薬を與へる時間 たしかマラリヤは發熱の少し前が最も菌の繁殖する時かと思ふ。その時に與へねば効は少ない。アスピリンは丁度熱の上りきつた時に與へねば効がないといふ。それ等の時間をかまはず一日三回などいつて與へるのは、醫効を薄くする。

手術 の時の消毒は絶對的必要である。消毒不十分のため他の病菌が體內に入つて、反つて患者の病氣を増すことがある。手術後ガーゼを出すことを忘れ、すぐ皮を縫つた醫師さへある。

患者の病名 を洩らしてはならぬのは、醫師以外、藥劑師、看護婦、祈禱師等も同じである。

報酬 自分と同等又は低い人が高い報酬をとつてゐるのは氣持よいものでない。しかしそれを氣にして不平に思つては人品が低いことを表す。報酬が低く、氣持わるければ、その職を去るべきである。まじめに刀一ぱいの仕事をしてゐれば、それが他人にわからぬはずがない。學校の教師などで常に俸給などを口やかましくいふのは、その出身學校の氣風による様であるが、決してその教師やその出身學校の品位を高めるものではない。一時に俸給は上らずとも、永遠にわが努力がわかるだけの仕事をするのを、わが最上の名譽と心得たい。

第四課 女子の職業

結婚のできぬ事情 家が貧であつて、娘の働きの必要な場合が最も多い。その外、女子自身の都合上、最も多くは健康の都合で結婚のできぬ事であらう。その外性質上の欠陥もあらう、中には容貌の關係もあらう。

母の苦心 子供が幼い間の母の苦心は、昔も今も變りはないが、子供が専門學校程度となると、それを養育するには非常の困難がある。私の學校の高等科生徒の父兄會にも、時間等の都合上母が多く來られるが、中には私のいふ事が全くわからぬのではないかと危ぶまれる母さへ可なりある。今の母の任務は中々重い。女學校をすんだだけで將來子供の教養に當るのには非常に困難であり、まだ、頭と行とを練らねばならぬ。

男子に不適當な仕事 看護婦の如し。
外國の學者 とこゝにいふのは英國のかゝる問題の専門研究家 Havelock Ellis だ。その Man and Woman といふ本に、俳優以外には、男子より優つた女子の出た職業はないといつて居る。しかし日本の歌舞伎の如き訓練しきつた芝居に於ては、とても女優では勤まらぬ。西洋

第四課 女子の職業 第五課 天物を暴殄する勿れ

の芝居は歌舞伎に比べると素人芝居ともいはれよう。
賃銀 裁縫の如きは女子の専門の仕事かと思はれるが、それでも最も高等な物には男子を使ふ。

第五課 天物を暴殄する勿れ

暴殄 とは、あらずとか、むだにするとかの意味と解したい。
殺す 右暴殄と同じ意味。天物といふ語は今の人は多く用ひぬが、この心持がなくしては、眞のまじめさも引締つた氣持も儉約も出て來ない。

峨山和尚 明治三十年代になくなられた高僧。嵯峨天龍寺の事は尙他の處(備考九四頁)にも出るが、足利尊氏の建立にかゝる。足利尊氏は後醍醐天皇の寵愛が非常に厚く、尊氏といふ名さへ御名の一字を賜はつたのである。然るに天皇に背き北朝を立てるに至り、天皇は吉野山に誠にみじめな朝廷を御守りになつたまゝで崩御あそばされた。崩御の時には、右には御劍、左には法華經をもたせられて、朝敵の亡びぬのを恨むと仰せられたとさへ傳へられてある。人間の末期の一念は永遠に續くものである。尊氏も天皇の御恨を受け、深くそれを恐れて、

何とかして御供養申しあげたいとて、時の高僧夢窓國師に教を乞うたれば、國師は寺を造つて御供養申せといつたので、出來たのがこの天龍寺である。同寺には今も尊氏やその弟の直義が自筆で天皇御供養のために納める旨をかいた經が残つてゐる。維新前、長州が朝敵となり、この寺に籠つたので、朝軍即ち會津薩州の兵のために寺の一部分が焼かれて、今は舊時の壯觀を存しない。

侍者 高僧の給仕を勤める若い僧。これは大抵相當な見込のある僧が選ばれる。

人天の師 禪宗の高僧は天地間一切衆生の師たるべきもの。

清水和尚 明治三十年代の始頃なくなられた名僧。和尚が尙若い頃儀山禪師についてゐた。どうしても悟が出來なかつたが、或時禪師が湯に入つて居られた時、水をもつてこいと命ぜられ、手桶に残つてゐた水を捨て、新しい水を汲んだれば、大聲一喝されたので、悟が豁然開けたといはれてゐる。この大聲一喝が即ち天の水を殺すといふ意味であつたのであらう。清水和尚は天下の名僧であつたので、非常に有名の士が訪ね、そして時々その寺に泊られた。

自らもつけた金 女子が卒業後何か會社へでも勤めて月給をもらふと、それを自分が勝手にしてもよいものと

思ふのは、この天物の念がないからである。今の若い會社員等が妄りにカツフェ等に入つたりするのは、皆天物の念がないからである、中等學校の教育が悪いからである。

金原明善翁 遠州濱松近在の人。明治になつてから天龍川の改修を思ひ立ち、自費でこれに當つた。もとは相當の身代もあつたが、そのために一切を擲つた。久しい刻苦の結果その目的を達し、附近幾萬町の原に灌漑ができる様になつた。絶えず公共のために盡した。人が書を頼むと料を取つて書く。その料を一定の目的に供する。翁の考では、明治天皇の御代は誠に立派な盛世であつたが、たゞ一つの汚點がある、それは二十億の公債である。あれをなくしては聖帝の御恩召が満足には達せられぬから、是非とも公債の銷却をしようといふので、その方へ書の料は皆使はれ、私かに公債を買つては、それを破毀する。この志に賛して同様の事をして居る人も少なくない。個人的にかく銷却せられたる額は可なり大きいものであらう。勿論考へ方によつては社會のために盡すにはもつと積極的方法はある。

翁は名刺の代りに手紙の白い部分を裂いてそれに名を書き、袴は禮式上つけて居るが、その折目には縦糸が殆どない。それを自分の手で靜かにたむ。禮式のためにはくのであるから、別に新しく立派でなくてはならぬこ

とはないと翁の考であらう。

本文、翁の響應に對する言葉は京都なる川島甚兵衛氏の處へ泊るとき、常に言つた語であると川島氏から直接にきいた。

翁は大正三年十月七日に特旨を以て正五位に叙せられた。その時翁の令孫の話に「祖父はこの頃郷里靜岡縣濱名在の田舎に住居して居ります。何故の叙位か分りませんが、多年公共のために盡した功勞かと思ひます。今から二十五年前一度從五位に叙せられたことがありますが、その時は海防費を獻納したためであつたらしいので、位記返上の儀を願つたのです。祖父は今年八十三歳になります。腰一つ曲らず、極めて壯健で、終始國家のために盡すのを唯一の樂しみとして居ります。

祖父の致しました事業は天龍川の治水、植林、出獄人保護、運輸製材その他種々ありますが、節儉經濟は八十年來一貫の理想で、常に三等汽車にしか乗つたことはありません。どこへ行くにも木綿の着物で、車にも乗らず山桐の日和下駄でテクテク出掛けます。先年先帝に拜謁仰せつけられた時も、外に着物は無し、借りも出來ないので、縮の單衣物に小倉の袴、小倉の帯で半襟許り白羽二重を着けてお目通り致しました。」

又小松原英太郎氏の談に「自分が翁と相識りしは明治

廿五年、靜岡縣知事の時で、爾來廿年の親友である。翁の功績は枚擧に遑ないが、最も著しいのは天龍川改修工事で、維新後間もなく翁はその改修の必要を政府に建言し、自分の地所家屋一切を賣却し、その金を治水費として政府に獻納し、自分は天龍川の堤上に小屋掛して起臥して居た。政府もその熱誠に感じて維新後本邦に於ける最初の治水事業を同河に施し、なほ翁の獻納金七八萬も返付したのであるが、翁はこれを身につけず、直ちに天龍川水源涵養植林費に投じ、今日にては已に二百萬圓前後の森林を形作つて居る。かくて翁はその財源を更に天龍川沿岸濱松地方の疏水費にあて、嘗て西遠地方の人々が企て、成らなかつた三方ヶ原に水路を開いて沃田とし、兼て一般水利の便をなさんとして、金原疏水財團を組織して遂行機關をつくつた。翁は又普通公共事業にも大いに力を盡し、地方町村に紛議を生ずることあれば、腰辨當にて出張し、且つそれ等の人々に茶菓を供するのであつた。後年翁退隱の後郷里に紛擾があつた時、止むなく七十餘歳の老驥を提げてその村長となり、役場に小使と共に起臥し、終日事務を執り、夜は人々を集めて講話をして村治改善に努めた。」

勿體ない この語は昔から天物に對する氣持を表す語として使はれ來たつたのであるが、明治の始の非宗教氣

分と西洋摸倣気分のために多く用ひられなくなつた。しかしこの語は日本道徳、即ち一物でも天受のものであるとの見方からは、是非共味はさねばならぬものである。よく生徒にも理解させる上、學校でもし天物を粗末にする者のある場合には、この語によつて注意を與へ、その若い頭へしみこませたい。

節儉 をたゞ經濟的のものと思ふのは物質的の見方である。大小を問はず、天の物は粗末にできぬとの宗教的の意味と解する事によつて、節儉の眞の意味がわかり、それが引締まるといふ精神的の徳と關係がある事がわからう。

五燭 詳しくいへば五燭光。

米國の贅澤 私が中學時代の明治十八九年頃、米國教師が英語教師として來てゐた。時々晚餐に招かれた。そのために、無禮をすまいと思つて、米國の禮法の本を讀んだ。その中に、食事には皿の物を全部たべないで残すのが禮法であるとあつたので、その通りにしてゐた。然るに日本の禮法では出されたものは皆食べる事になつて居り、茶事などでは、残つたものは持ち歸ることゝなつてゐるので、非常な差異を認めた。然るに大正九年私が米國に行つて見ると、禮法が非常に變つて居り、パタ少しでも残すと、人が眼をつける位であつた。以前の米國の禮法は物資が非常に又は過分に豊かであつたためであ

るが、それが世界戦争を経ると、矢張米國も日本の昔からの通りになつたのである。しかし米國風の贅澤の跡はまだ、日本に残つてゐて、この國民を不始末にしてゐるのは残念である。

或る富豪 根津嘉一郎氏である。氏は東武鐵道及び太平生命保險會社の社長、武藏高等學校の設立者、富は數千萬圓であらう。その寶物は多くは日本一ともいふべきもので、それを計算することは不可能である。しかし自分の生活上は非常に儉約で、手袋にはつぎ目が當つて居り、靴下など可なり古い。しかし郷里の縣の小學校全部には數十萬圓の必要品を時々寄附してゐる。むだなものには金一錢をも惜むが、數百萬圓の費用も國家文化のためには惜まぬ。

乃木大將 の家は今も保存されてある。あの小さい家に住んでゐられた事は見る人がよく考ふべきである。

第六課 儉約

よく目的を 考へること、これは往々女子のし難い事と思はれる。したいからする、一寸よいと思ふからする、そこから千金の穴ができる。

物のありがたみ これが勿體ないといふと同じ氣持。

金持や華族の子供にはどうしてもわからぬ。今日の一般の家庭にも、いやなにせ華族、にせ金持氣分がはいり、品物を大切にしない風があるが、それはたゞ小物をありがたく思はなくするのみならず、天地のありがたみをもわからなくする。それで以て親をありがたく思はずことは決してできぬ。ありがたといふ氣持は東洋道徳に於て恩の念と同じもので、その中心思想である。

第七課 行の儉約

下品 と上品との區別は理屈で説明しようとしても中々わからぬ、畢竟は幼い時から育つてきた境遇でそれを覚えるより外はない。學校などで、しかも教室内では、よくの家庭の者でなければ餘り下品な事はいふまゝ。しかし一度餘興でもして、一同が面白く遊べよといふと、そこで生徒のお里が出てくることもあらう。樂語や輕口や、映畫、その外新式の劇やレヴュウなどには下品な事で大衆を喜ばせる企が極めて多い。それになれた生徒などには最も注意を與へて、その下品さを意識さす必要があり、それ等の生徒を教へることによつて、一般生徒に上

品下品の別を知らせる便利もある。とにかく教師に於てその判別がはつきり別つてゐることがまづ必要である事はいふまでもない。

跡始末 とは即ち行の儉約である。

サボタージュ といふフランス語は、職工などが資本主を困らすために、仕事をした様に見せかけて實は少ししかしない一種の同盟罷業である。これは行の儉約と全くの反對を故意にするのである。かゝる行がその人の性質にいかなる影響を與ふべきか、生徒に考へさせたい。

第八課 責任

物を半分だけ考へて、それきりにしておくことは、男子にも勿論あるが、女子にはこの事が男子よりも多くはあるまいか。私自身の経験も他人の意見もさうであるやうに思はれる。もしさうであるとすれば、それは今まで女子が責任ある地位に立つた事が少なかつたからかと思ふ。勿論子供の養育は昔から婦人の責任であつたが、それは範圍が比較的狭い事であるため、大いなる責任心の養成を要しなかつたのかも知れぬ。とにかく將來の女子の教育には、この點に大きな注意を要すると思はれる。

例へば將基をさす時、一駒か二駒先きだけしか考へぬ様な心の習慣では、責任心があるとはいはれぬ。常に先の先まで考へて、萬に一、遺漏のないやうにせねばならぬ。**他人に頼る** ちよつと子供が下痢をするから、すぐ夫に相談しなければ何もできない。水道の管がいたんだ。どうしてよいか自分では考へようとしてもしない。これ等は依頼心のためであり、自ら責任の地に當る考がないから起り易い。

第九課 若い女子の慎み

この課から以下三課 は教師の考によつては學年の末にまはされてもよい。

此課 に於ては結婚の重大な事を知らせる積である。外國の如く結婚を單に二人間の事件と考へ、その戀愛によつてすればよいものとの考を全く排除するを目的とする。これは人間を個人的のものと思ふ、民族といふ大機關の一分子と見、その機關の達成を以て人間の先天的任務と見る考方を根柢とするによる。この考へ方それ自身全く日本の特殊のものであり、西洋人の考へ方と全く相反する。

特殊の團體 君民が一體となつてこの國を組織する。日本では君臣は對立するものではない。一のものである。**特殊の宗教** 宇宙はもと渾然たる一體である。一切衆生は悉皆無差別で同等のものである。一のものである。神と人、佛と衆生は皆同一體であり、互に相合し、相救つて生といふ大活動をなすとの考の上に立つてゐるのがわが宗教。

特殊の道德 君臣一體、親子も一體、夫婦も一體、衆人悉く一體となり、和合の上に活動すべしといふのがわが民族道德。(第十五課備考を見よ。)

特殊の藝術 深く内に藏して微かに外に現す。しよみとか動靜一致とかいふのがわが藝術の特徵。それに對して外國のは、内に藏するよりも外に現すのを主とする。日本畫と西洋畫、日本の舞と西洋のダンスを見ればこの差別が一目判然である。わが國が西洋の騒がしい音楽、うるさい舞踊などを取つたのは一時發展の途中として見れば差支はないが、あれを消化する處にわが民族の藝術心が表れよう。上品といふ點に於て西洋の物はすべてわが固有のものに劣ることは、女學校時代からして生徒にわからすべきである。今の女學校教育はこの點の注意が欠乏してゐはせぬか。**特殊の見方** 一例でいへば、外國人は發表の結果に注

意する。日本人は發表するもの、奥底に、何があるかと考へる。かれは表れた處を見、われは表れた物その物即ちそれを表れしめる物はどういふ物かと尋ねる。

考へ方 前の例でわからう。道德についていへば、かれは何をしたかと考へ、われはいかなる氣持でしたかと考へるの類。

仕方 表てに花々しからんよりは、内に眞情のこもるのを貴しとする。内に絹をきても、外には綿と見せる。つやをつけて更にそれを消すの類。

わが民族 でなければわが文化はわからず、固よりそれを發展せしめることはできぬ。明治以降外國文明を無選擇に取り入れた結果、どんな文化でも隨意に取り入れて、それでわが文化が大成し得るものと思つたのは非常な間違である。文化は歴史的にのみ發展する。他の民族がわが文化を發展せしめることは絶対にできぬ。これは今日世界の所信であり、獨りわが國民だけは維新以後の事情のためにこれがわからなくなつてゐる。

人類文化の發展 一民族が高い文化を發展さすと、それが自然に他の民族乃至人類全體に影響してその文化を高める。各民族の存在の意義はこゝにある。

惡疾 花柳病即ち淋病梅毒の類。二者共に全治は非常に困難であり、局部の疾は容易に全身病となり、一生健康上

の不幸となるのみならず、子孫に種々の病氣を遺傳し、又傳染させる。盲人の多くは母體に於ける淋病の傳染によることの如きは殊に注意して知らせてもよからう。梅毒に至つては子の精神病の原因となることが可なり多い。今松浦前京都帝國大學教授の「花柳病講話」(弘道館發行)から花柳病播布の大體を抜載しやう。花柳病とは梅毒、淋病、軟性下疳の三であるが、梅毒は餘程適當の時に適當の醫術を受ければ全治する事もあるが、淋病に至つては現時の醫術では全治はできぬ。たとひ一時さうみえても、たゞ勢を潛めるだけで、折あれば直ちに現はれ、又傳染する。傳染すれば亦その被傳染者の身體各機關にくひこみ、これを害するのみならず、その子に對して例へば盲にするとか、その他悲惨の結果を生ずる。軽くみえてこれ程恐い病氣はない。

同醫院皮膚病教室で明治三十六年一月から九年六月末日までに受診した患者の數約一萬人中で

花柳病患者	一、八四三(總受診患者の 一八%強)
梅毒	六六六(花柳病患者の 三六%)
淋病	一、〇一一(同 五五%)
軟性下疳	一六六(同 九%)

右花柳病患者の職業別

農	業二一八	無業	一八九	學生	一四三	勞働者	九一
---	------	----	-----	----	-----	-----	----

吳服商 七三 官吏 六一 車夫 五九 織職 三四
 會社員 三〇 僧侶 三〇 酒商 二五 染物商 一七
 藝妓 六 娼妓 六 其他略

又同院に於て花柳病の傳染の徑路を調べた事がある。これによると、調べた患者の数は三一〇人であつて、その内容は

梅毒 一四三	無配偶者 男 二五	有配偶者 男 六	計 三一
淋病 二九	無配偶者 女 三	有配偶者 女 三	計 六
軟性下疳 三六	無配偶者 男 三	有配偶者 女 三	計 六

即ち男子は婚姻すれば花柳病が減じ、女子は反對に増します。即ち妻は夫から花柳病を傳染するものである事が判る。勿論婦人の花柳病患者は大抵婦人科へゆくから、實際の花柳病患者婦人はまだ多くものである。右有配偶女子二十六人の花柳病を得た原因は、二十二人までは夫からうけてゐる。

同醫院の各科即ち外科も内科も眼科等をも含んだ各科へきた十五歳以上の男子患者全體中、二六七人に就て調べた處では、淋病患者は左の通り。

年 齡 調 査 患 者 有 毒 者	年 齡 調 査 患 者 有 毒 者
一五—二〇 四七	一七—二〇 四六
二一—二五 五八	二一—二五 五五
	七
	六

第十課 愛の危険性

民族文化發展の機械 個人が民族文化を會得して正しく活動することによつて文化が發展し得る。

民族文化の醜惡場 家庭に於て幼時から民族文化が自然に養へこまれる。實はわが現時の家庭は明治以降固有の民族文化輕蔑の時に生れた人が組織してゐるために、この空氣の薄いのは遺憾な一時的現象である。幼い時から民族文化が頭にしみこめられ、そしてその氣分によつて活動すれば、民族文化が發展され得る。その活動の淵源は實に日々の家庭の生活によるものといはれる。

民族の中に個人 があるのであるとは、これもわが民族の特殊の考へ方の一である。又事實としても個人が社會を造つたのではなく、社會内に個人が生れたのである。社會に對する責務はその中へ生れ來たときに既に負はされてあるのである。

美德 を表さうとはせず、自然に表れる邦人は、歴史的には宣傳や廣告を賤む國民であり、今でも上品な人は餘りそれをしない。又それを盛んにする人は眞に尊敬は受けなす。

米國の離婚 明治二十年頃米國の宣教師はわが國の離婚數が米國の三倍にも當るといつて頻りにわが國を朱開

第十課 愛の危険性 第十一課 選擇の要件

二六—三〇 四九	二五—五六一六〇 一一	八
三一—三五 三四	二四—六一以上 一〇	六
三六—四〇 二四	一六—計 二六七	一五〇
四一—四五 一七	六	

右は淋疾のみの事である。淋疾患者を松浦教授が明治十四年の徵兵検査の際調べられた處では、總受檢壯丁の五〇乃至六〇%がかつてゐる事を見だされた。かゝる有様であるから、結婚するときは、十分に男子の方の品行及び健康を調べねばならぬ。婦人科患者の大多數は子宮内膜炎、子宮外膜炎、卵巢炎、喇叭管炎といふ様な病氣で、その多くは淋疾をうけて起る。梅毒、淋疾の害毒は本人にも配偶者にも子孫にも誠に悲惨な結果を生ずるが、その詳細は右「花柳病講話」を参照。

右淋疾の中で梅毒や淋疾がいかなる結果を生ずるかを生徒に知らすのは困難であるが、婦人で跛ひいたり、何とも知れぬが婦人病でいつも困つてゐるのは淋疾に多い。これは治療を誤ると一生直らぬ。生れながら眼疾の兒も多くはその結果である。それから鼻がかけたり、腰がたゞぬ中には梅毒が多い。狂人にも梅毒によるものが少なくなす。

國の如き口吻をもらしたが、今は米國の方が日本の倍となつた。いかに日本の道徳が進んだかを知ることができ

第十一課 選擇の要件

本末大小の辨へ は現時の人には極めて少ない。これは學校で語記が大切となつたり、試験に細かい、人の氣のつかぬ事を出したりする結果、自然にかくなり易い。常に物の大體に注意し、それを本として考を立て、行をきめる人は立派な人である。女子にも亦かゝる習慣をつける事が必要である。

氣質 とは怒り易いとか、沈着とか、快潤とかの類。これは主として體質から來るから、即ち遺傳による事が多い。男女の氣質が餘り近いのは夫婦としてはよくない。二人共に怒り易い夫婦では、家も治まらず子も亦非常に怒り易くなる類。

年齢 は普通に於ては七八歳以上十年ばかり妻の若い方が一生涯を通じて見ると安全である。

星や合性 の如き迷信を全く排斥したのは眞意の眞宗であり、これは確かに達見である。

挿圖 はメンデルの遺傳法則の事實を示したのである。一八六六年オーストリアのブリューン博物學會々報に一無名の僧侶メンデルの豌豆に關する四十頁ばかりの論文が發表された。その時には誰も注意もせなんだ。此の發表後三十年を経て、三人の學者が同一の事を發表したので、始めてメンデルの手柄がわかり、その研究にメンデルイズムといふ名さへつけることとなり、今は世界中誰知らぬ者はない。氏のつた周到な研究法はこゝにあげぬが、その結果は次の通りである。たとへば二十日鼠の白子と白子との間には何代たつても他の色の鼠はできぬ。黒子と黒子との間も同様である。然るに兩種を雜種させると、その一代の子は決して白子となることがない。一代同志から子を生ませると、第二代には黒色と白子とが混つて産れる。かく第一代に於ては隠れて現れぬ性質を劣性といふ、即ち白色は劣性である。然るにこれが第二代になると始めて現れる。しかしその割合は優性たる黒色に比べると非常に少ない。圖に示した最上の二頭は親、次の黒二頭は子即ち第一代、次の白四、班三、黒七は第二代である。この圖は假定數ではなく、實際のものである。尙詳しくは理學博士三宅順一氏「遺傳と結婚」参照。

感染は境遇の影響

健康 については、肋膜炎を病んでまだ數年の恢復期を経過しない者は危険である。これ等は餘程調べねばならぬ。實際この調査不十分のために不幸を見た女の數は、私一人でも相當に知つて居る。

醫師 は刑法によつて自分が診斷した患者の疾病を患者の承諾なしに他人に洩すことは禁ぜられてある。看護婦、藥劑師、祈禱師も同様である。

第十二課 満足

國の任務 その民族文化を發展すること。

家の任務 各人が國の任務に干與し得るやうに子弟を養育し、又夫婦自身もその務を安心してなし得る本據となる事。

上役に心の正しくない者 例へば政黨員が大臣となると、その政黨の利益のために國家の利益を犠牲にせよと上官に命じた事はわが國には珍らしくなかつた。次官、局長、知事などはその良心に反しても上官の命令を受けねばならぬ事はいくらかあつたらう。

意外な家庭 勅任官の妻が百貨店で萬引したとさへある。

第十三課 全體のため

全體 個人は個人のために存在するのではなく、全體即ち社會民族國家のおかげで生存し、そしてその全體を完くするために存在すると考へる。これが前に述べた日本人特殊の宗教觀、道德觀である。

人々の心の中に 尊い道德心を起させる、これが眞に立派な事である。權利を主張する西洋道德ではこの事は望まれぬ。私が英國で、或る大學の講師をして居る女博士を訪ねた。女博士のその幾千坪とある庭を案内してくれた時は二月の末。寒い庭の石の陰に何か忘れたが、冬らしい花が一つつゝまやかに咲いてゐるのを見て、日本人の婦徳はこんなものであるといつたれば、もし男子が横暴であつたらばどうするとの問であつた。こゝが東西洋道德の根本の差異であり、そしてわが國の女子も漸次まねをし始めようとしてゐる處である。日本道德では婦徳といふものを單獨に考へぬ。社會全體の道德と考へる。社會全體に篤厚の風が充實して、誰も横暴にならぬ様に

さすがの道德である。そのためには男子の教育をも盛んにせねばならぬと同時に、女子もその風の盛んになる様に自己の一分を盡さねばならぬ。西洋は知らず、日本では、人の篤厚な風を見れば必ず内自ら省みる事となつてゐる。維新以來今でも、文部省を始め各學校に於て眞の日本道德といふ事が注意され難いために、この篤厚の風はどこでも教はれず、只少數の眞の佛教徒の間のみに考へられてゐる如き傾があるが、眞の日本道德はこの考を基としてゐる。箕掃堆裡に無價の寶を積むとは大慧禪師の語であるが、人々皆この心でゐなくてはならぬ。一人の一善は他の大勢に影響して道德心を起こさせる。このわけ生徒の心中深く銘せしめたい。

第十四課 尊い一生

京都の五山 禪宗臨濟宗の本山中の主なもの。天龍寺、相國寺、建仁寺、東福寺、萬壽寺であるが、萬壽寺は今はなくなつた。

關山國師 建治三年(一九三七年)信州に生れ、始め鎌倉建長寺で禪を修め、五十一歳に入落し、大徳寺の開祖大燈國師について大悟した。元徳二年(一九九〇年)後

醍醐天皇が、尊置に行幸せられた前年に當る）五十四歳で飄然美濃の伊深に入り牧羊生活を營んだ。曆應元年（九九八年、新田義貞が戦死した歳に當る）六十二歳で花園法皇の院使に迎へられて拜謁し、花園離宮を改めて正法山妙心禪寺とした。法皇も傍に一字を營ませられて日々國師に參禪せられた。延文五年（二〇二〇年）に八十四歳でなくなつた（「華開鐘秀」による）。國師の機宇は高敏で一切世縁を顧みない。寺の建物は彫つてもなく、道具は飾らず。藤を纏めて袈裟の環を造り、それを使つてゐた。伊深の山中で苦んでゐる時も、皇室の御歸敬を得てからも同じである。室の中に宸翰の外何もおかない（「本朝高僧傳」）。國師は偏へに師祖の報恩謝徳を宗旨とし、自分もそれを一生の實行とした。

妙心寺の圖 は元祿頃の版本から取つた。今と大差はない。

關山國師の像 國師は像を作りも畫かせもさせなかつたため、死後百六十年後に於て始めてできたのである。それが二つあり、從來寺に於て寫眞を取つて山門外の人に示した事はないが、私が教科書に挿むときいて、一山僉議の結果特に兩圖を寫眞にして示された。今その一を載せた。山内の厚意に對しては深く感謝する。

夢窓國師 名は疎石、伊勢の人。京都鎌倉で禪を修行

し、悟を得てから正中二（一九八五）年五十一歳で後醍醐天皇に召され、京都の南禪寺にゐた。元弘三年（一三三三）京都が騒がしくなつて國師は挂川の岸なる臨川寺にゐた（今もある）。曆應二（一九九九）年八月天皇崩せられてから、尊氏の請に應じて天龍寺を造り、貞和元（二〇〇五）年天皇の七回忌に大供養式を行つた。光嚴、花園兩先帝及び光明天皇が百官を率ひて御臨幸になり、一代の盛事を極めた。七十六で迂化した。（「本朝高僧傳」）

第十五課 實は自分にあり

尊い心がけ 宇宙のよくない事は皆自分の不行届から起ると思ふ。宇宙の大を以て自ら任ずるものである。自分がわるいと思へば、自ら小にする様に思はれもしようが、宇宙の大責任を自分一人で負ふべきものと思ふならば、それ程自分を大にすることはあるまい。世人はかく

自分を大と思ふ事ができぬから、小さい事にも争ふのである。

本課 の説は純日本思想である。以前にわが民族特殊の道徳といつたものゝ一例である。かゝる教は明治以降學校に於ては全く説かれなかつたといつてもよからう。そしてその代りに西洋輸入の權利的、個人的道徳が臆面なしに説かれ、國家もそれを是認して來た。それが男女を問はず傲慢不遜で義務の念に乏しく、忠實の心の薄らいで來た原因である。今はそれを悔悟すべき時である。

第十六課 判断

身にふりかへつて 判断をすると、表面的、俗見的には自分がまけたやうに見えるかも知れぬが、實は向の人はしてすまぬ事をしたと思はせる。かれはそれを口へ出してはいはぬかも知れぬが、心の中ではさう思ふに相違ない。一人でも心からわかつたと思はすれば、それで道徳上の成功である。世上の道徳といふものは、自分の正しいのを正しいとせよと教へるかも知れぬ。しかしそれでは決して對手にわかつたと心中から思はせる事がない。悪いからまげよと、いはれると、人は心中には悔

第十七課 改良

クリスト教の神 は或る民族が想像で造つたものである。形はないとしても、一種の假設的偶像である。日本の神は實際に居た大人物である。想像で造り出した藝術品とは違ふ。

自己は自己を失ふ とは、自分の本體は何であるか、

自分は何をすべきはずであるかとの深い確かな信念を失ふこと。

第十八課 節句

節句 節句又は五節供と定まつたのは足利時代の事かと思はるが、大體に於てそれ等の日に於て節會や遊びや種々の慣習は平安朝に既に於て行はれてゐた。正月七日の七草は七日の事もあり十五日の事もあり、久しく一定はしてゐなかつたが、七日白馬の節會がいつの程にか混同したのでもあらうか。寛平二年(宇多天皇、一五五〇年)に正月十五日七種粥、三月三日桃花餅、五月五日五色粽、七月七日素麩、十月初亥等俗間行來以爲歳事、自今以後毎色辨調、宜供奉之との仰が記録にのつてゐるから、その頃既に民間の習俗となつてゐた事がわからう。たゞし九月九日の代りに十月初亥となつてゐる。文安二年(後花園天皇、二一〇五年)にできた本には、既に今の通りの五節句がのつてゐるから、足利時代頃にはもう定つたものと見える。徳川幕府に至つては、それが正式の儀式となつてゐた。これ等の五節句はその始まりに於ては支那の慣習とわが國在來の慣習とが結びついたものらしい。

端午の圖 徳川末期の圖「江戸歳事記」からとる。草木の恩までも感じ、それと親しく遊ぶ氣持は人を謙遜にする。人間だからとて威張らず、人間の如き感覺がない物だからとて虐待せず、共に生を樂み、樂ます。これは邦人の尊い性質である。都會生活が繁くなるに従つて、この氣分が薄らぐ。せめては地方に於て、山村に於てなりとも、この美風を維持し、中央政府の無分別な法規によつてその實行を不可能にしたくない。小學校などではかゝる慣習を學校で行つてもよからう。

第十九課 模範とならう

兒が母體內にゐる時代の感化 Havlock Ellis が最近十五年間に最も信用すべき醫學雜誌から集めた懷妊中に胎兒に加へられた印刷の例を左に轉載する。

- 一、懷妊の初期に於て、母がその愛兎が猫のために兩前肢をかみ落されて肉塊のみを残せるを見、久しくそれを思つてゐた。生兒の片足は二指、他の足は三指しかなく、兩足とも orolans はない。
- 二、窓の硝子をはめる職人が、浴室の屋根から墜ちてひどく左腕を傷けた。久しく入院してその全快が疑はしかつた。

眞傷の三ヶ年半後で生れた兒は、右手の拳より上の處、父の傷と同じ處に六ベンス大の痕があつた。

三、妊娠の初期の婦人が牛乳を搾つてゐて、その牝牛にけられ、乳房に懸命にすがつてゐたが、多分踏み殺されたらうと思つた。生兒をみれば脊椎から延びてできた肉状の物がついてゐた。産婦はその牛の事を話したので、醫も産婆もその肉状が全く牛の乳房にてゐるので驚いた。これは勿論産婦が自己の産兒をみない中の事である。

四、妊娠二ヶ月の婦人が市場から歸るとき、牡牛に驚かされた。産兒は十分に發育した男子であつたが、頭が全く牡牛の頭であつた。後頭骨はなく、左右の骨は小さく、眼は額骨の上にある、額骨は平たく、兩端は不完全な角にてゐた。

五、三十歳の婦人が妊娠四ヶ月で、戸を開けた時に白黒斑の犬が飛こんできたので驚かされた。生兒の右肢が白毛のはえた黒斑でまかれてゐた。左の肩骨の背面の處にも他の斑があつた。

六、妊娠が馬糞器で草をかつてゐたとき、夫が枯草中に見つけた子兎をなげたれば、その類と類とに當つた。産兒は左類に色も柔かさもその子兎に似た毛がはえてゐた。

七、三十歳の榮養のよい婦人、十年間に十二人を産したが、その第十の妊娠の三ヶ月に於て、電車にしかれて頭を碎かれた子供をみた。生兒には頭骨の上部がなかつた。

八、皮膚に何等異状のない健全な婦人の妊娠の四ヶ月目か五

妊娠時の影響の他の例

原昭胤氏は多年出獄人保護事業に従事せられ、澤山の出獄人をも自分の家庭において、さういふ人々が悪事をするやうになつた原因を調べられた。その中に同じ父母の子でありながら、外の兄弟は皆よいのに、たつた一人が罪人になつたといふやうな者を調べてみると、その子が母の胎内にゐた時、家庭に不幸があつたとか、親がよからぬ事をしたとかいふ事實のあるのをしつて、胎教の重んずべきことをといてをられまゝす。その例の中に、兄が大悪人で弟は高等官吏となつてゐるのがある。それはその父が維新前金持で立派な役人であつた時、酒に女に放蕩をしてゐた最中に迎へた妻にできたのがその兄でありました。つまり嫉妬やら心配やらで、新妻の心が惱んでゐる絶頂に、飲倒れ酔つぱらひの酔中の嵐を宿したのである。これに反して維新後一家が故郷に歸還して土地開墾の業につき、正直に勤勞して夫婦睦じく暮して居た時にできたのが、この弟の紳士であつたといひます。

左拳がなかつた。(Psychology of Sex, 5, p. 218 以下)

胎兒をよくするには、まづ妊婦の精神衛生をよくしなければならぬ。妊婦の精神衛生をよくするとは、要するに妊婦の生活を安謐平和にし、心配なく、心長閑に、快活に日を送るやうにするのである。又精神修養になる書物を読んで精神を高尙に保ち、音楽や美術にも親んで、よい影響を精神に與へるやうにすることである。そのためには夫をはじめ家内すべてが注意して、妊婦にかゝる便宜を與へなくてはならぬ。胎教はひとり妊婦ばかりでなしに、一家總がよりて行ふ事である。一家が平和をかいである中で、妊婦だけに胎教を守れといつても無理である。また生活の周圍を選ぶ必要もある。あまり精神に強い刺激、よくない影響を與へる場所に住居することも、なるべくさげたい。孟子の母は孟子を教育するため三度その居所を移したと申しますが、未だ生れぬ胎内の子のために居所を移す事も、時には甚だ必要である。家族からも周圍からも強い刺激を與へぬことが最も大切である。

第二十課 平常の用心

盡すべき務 乃木大将が自刃せられる前に、かねて依頼をうけて居られた揮毫は全部認め、東京市内では自分で騎馬で一々その家へ届け、誰にも約束をはたされた。**轉宅** する時に汚れたまゝで立ち去る人は、この頃可な

かくは思ひ知りながら。或時は色にそみ食着の思淺からず。又或時は聲をきき愛執の心いと深き心に思ひ口にいふ妄舌の縁となるものを。實や皆人は六塵の界に迷ひ六根の罪を作ることも。見る事聞く事に迷ふ心あるべし。

結末の一話 餘分な注意ではあるが、私が中學校の修身教師であつた時には、五年間の修身教授を首尾よく終へた最後の時間には、五年間の教授の不行届を生徒に謝し、自分が五年教授した微志の程を述べ、さてこれから諸共に益々道徳的生活に入つて、自分、家族、社會を益々高めたいとの意を話して、教授上の別れとした。この一課もその積りで記したのである。一點晴で教師のまじめさが生徒に深くいる。教師の眞の敬虔の態度をこの時に一度でも發しておけば、それは必ず生徒の心中に残るこれは勿論女學校が四年で終る場合である。序であるが私は高等女學校を四年として、その上に三年の高等科をつけるを必要と信ずるものである。

り多い。皆妻に武士的教養ができてゐないためと見ねばならぬ。學校にも責任はある。

木村重成最後の用意 重成夏陣五月始より食事進まざりしかば、重成が妻これを愛ひて、「この度は落城近きにありときかるれば、御食事の進まざるに候にや」と案じければ、重成きいて「全く左にあらず。昔後三年の戦に末割四郎是廣といふ者天性臆病にして、朝の食事も咽喉を下らずして敵陣にて首をきられしに、その疵口より食物いで、諸人に乳をさらしけるなり、われも敵に首をとらるべし。死骸の臍腑見苦しからぬやう心掛にて食事を慎むなり」と答へしとなり。重成が最後に帶せし刀、摺あげ物にて二尺三寸五分堀川國治、これを摺りあげると、差裏の込に金象眼にて道芝の露木村長門守と象眼をいれたり。作は古備前物とみえて、そり古び惣體格好よく残る所なし。(圖書刊行會本「明良洪範」三一頁)

江口のクセ クセとは謡曲中の一節の名である。「江口のクセの全文を左に擧げる。

紅花の春の徒、紅錦繡の山粧ひをなすとみえしも。夕べの風にさそはれ紅葉の秋の夕。黄縷の林。色を舍むといへども朝の霜にうつらふ。松風羅月に詞をかむす賓客も。去つて來ることなし。翠帳紅闌に枕を並べし縁背も何時の間にかは隔つらん。凡そ心なき草木。情ある人物いづれ哀れを通るべき

昭和十年六月十九日印刷 昭和女子教養會付
昭和十年六月廿三日發行 (非賣品)

著者 山本良吉

東京市神田區神保町二ノ四〇

發行兼 株式會社弘道館

代表者 辻本卯藏

印刷所 共榮舍
東京市神田區三崎町二ノ一一

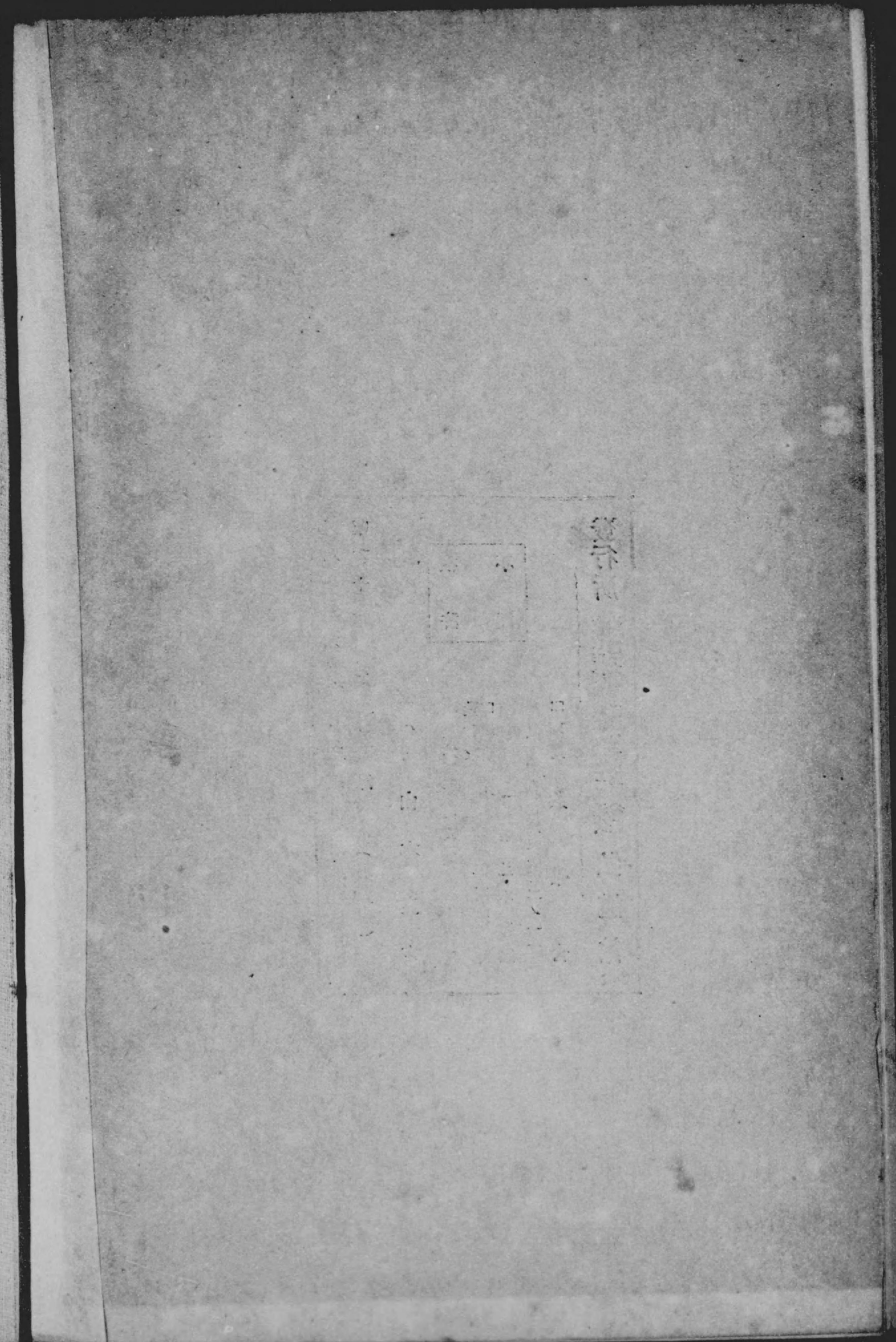
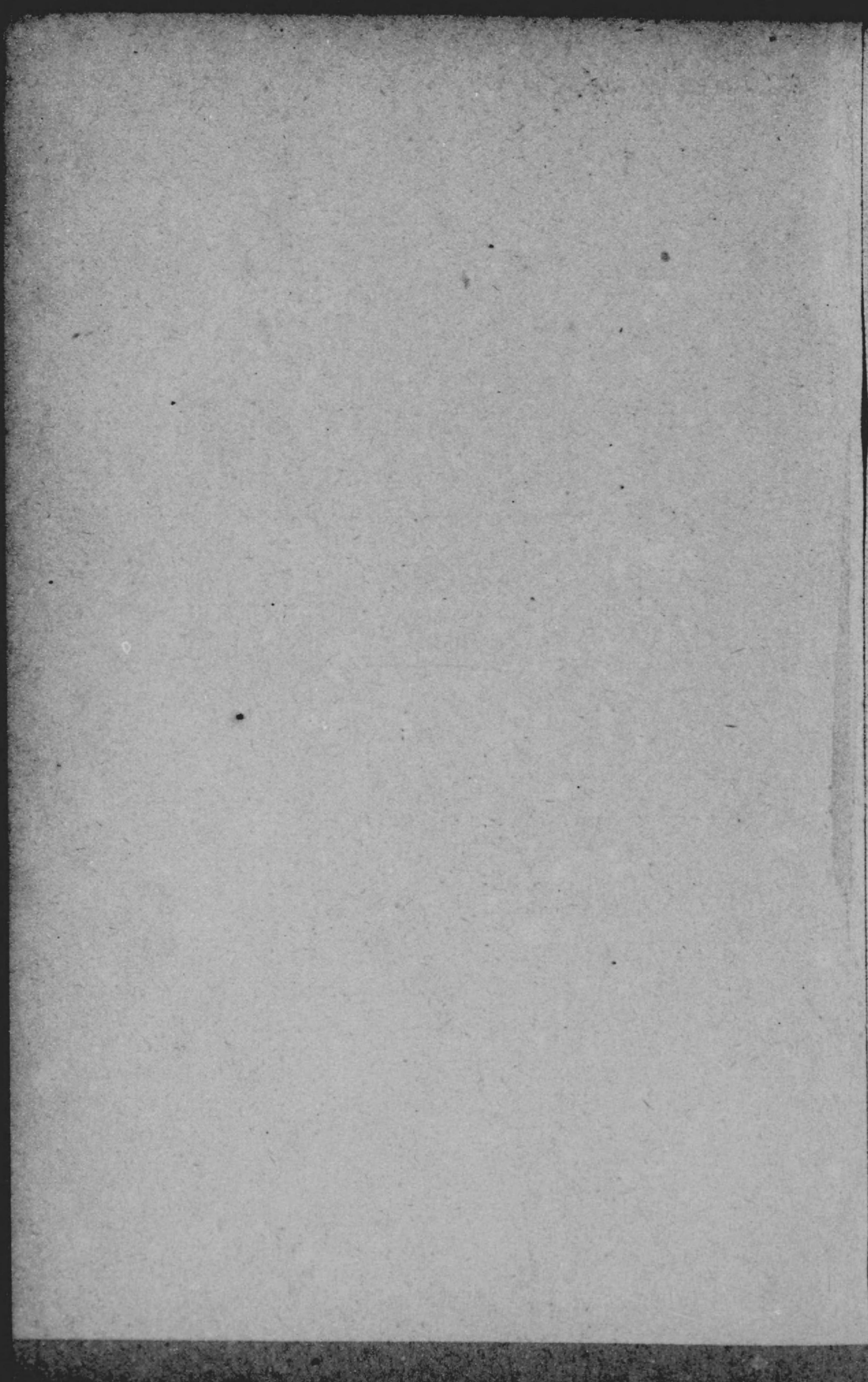
複許
不製

10.6.19

發行所

東京市神田區神保町二
電話九段一五八・二五九

株式會社 弘道館





6
7